

ガンマ分布の中心極限定理と Stirling の公式

黒木玄

2016年5月1日作成*

<http://www.math.tohoku.ac.jp/~kuroki/LaTeX/20160501StirlingFormula.pdf>

目次

0	はじめに	3
1	ガンマ分布に関する中心極限定理からの“導出”	4
2	ガンマ分布の特性函数を用いた表示からの導出	5
2.1	Stirling の公式の証明	5
2.2	正規化されたガンマ分布の確率密度函数の各点収束	7
2.3	Fourier 反転公式を用いない方法	8

*最新版は下記 URL からダウンロードできる。飽きるまで継続的に更新と訂正を続ける予定である。2016年5月1日 Ver.0.1. 2016年5月2日 Ver.0.2: 対数版の易しい Stirling の公式の節を追加した。2016年5月3日 Ver.0.3: 色々追加。特に Fourier の反転公式に関する付録を追加した。2016年5月4日 Ver.0.4: ガウス分布の Fourier 変換の付録と Gauss 積分の計算の付録を追加した。2016年5月5日 Ver.0.5: 誤りの訂正と様々な追加 (全 17 頁)。2016年5月5日 Ver.0.6: ファイル名を変更し、対数版の易しい Stirling の公式の微小な改良の節を追加した (全 18 頁)。2016年5月6日 Ver.0.7: ガンマ函数の正值性と対数凸性と函数等式による特徴付けと無限乗積展開の証明の節や対数版の易しい Stirling の公式を改良して通常の Stirling の公式を導くことなどを色々追加した (全 24 頁)。2016年5月7日 Ver.0.8: 正弦函数の無限乗積展開を $\cos(tx)$ の Fourier 級数展開を使って導く方法の解説を追加した (全 25 頁)。2016年5月8日 Ver.0.9: Riemann-Lebesgue の定理の節と Fourier 変換の部分和と Fourier 級数の部分和の収束に関する解説を追加 (全 30 頁)。2016年5月9日 Ver.0.10: 二項分布の中心極限定理の解説を追加 (全 33 頁)。2016年5月12日 Ver.0.11: Laplace の方法による補正項の計算の仕方の解説と表 0.1 を追加 (全 37 頁)。2016年5月13日 Ver.0.12(43 頁): 自由度の大きなカイ 2 乗分布が正規分布で近似できることと Stirling の公式が同値であるというコメントを追加した。様々な確率分布についての付録 (第 9 節) を追加した。Maxwell-Boltzmann 則の導出も追加した (第 9.5 節)。2016年5月14日 Ver.0.13(46 頁): 細かい計算ミスを訂正し、MB 則の解説を補充した。2016年5月15~18日 Ver.0.14(50 頁): ギャンブルに関する逆正弦法則 (脚注 59), Wigner の半円則 (脚注 60), \sin^2 型分布が佐藤・Tate 予想に登場すること (脚注 61) のコメントを追加した。二項分布と第一種ベータ分布の関係 (第 9.7 節) と Poisson 分布とガンマ分布の関係 (第 9.8 節) の簡単に大雑把な解説を追加した。Stirling の公式のよりシンプルな証明の筋道の解説 (第 2.3 節) を追加した。細かな誤りを訂正した。2016年5月23日 Ver.0.15(57 頁): 簡単な Tauber 型定理とその応用に関する第 10 節を追加した。応用例は Wallis の公式と $x - x^2 + x^4 - x^8 + x^{16} - \dots$ の $x \nearrow 1$ での漸近挙動の 2 つ。Wallis の公式型の漸近挙動からどのようにして逆正弦分布が出て来るかも解説してある。2016年5月24日 Ver.0.16(61 頁): 定理 10.4 の証明があまりにも雑だったので、Stone-Weierstrass の多項式近似定理から得られる補題 10.3 を追加して、詳しく書き直した。大きく書き直した直後なので誤りが残っているものと思われる。他にも細かな訂正と追加をした。2016年5月24日 Ver.0.17(61 頁): 細かな誤りの訂正。2016年5月25日 Ver.0.18(67 頁): Taylor の定理の証明の仕方に関する第 11 節を追加した (iterated integrals による線形常微分方程式の解法 (第 11.2 節) を含む)。

2.4	自由度が大きなカイ 2 乗分布が正規分布で近似できることとの関係	8
2.5	一般の場合の中心極限定理に関する大雑把な解説	9
2.6	二項分布の中心極限定理	10
3	Laplace の方法による導出	12
3.1	ガンマ関数の Gauss 積分による近似を使った導出	12
3.2	ガンマ関数のガンマ関数を用いた近似で補正項を計算する方法	14
4	対数版の易しい Stirling の公式	17
4.1	対数版の易しい Stirling の公式の易しい証明	17
4.2	大学入試問題への応用例	18
4.3	対数版の易しい Stirling の公式の改良	19
5	付録: Fourier の反転公式	20
5.1	Gauss 分布の場合	20
5.2	一般の場合	21
5.3	Riemann-Lebesgue の定理	23
5.4	Fourier 変換の部分和の収束	24
5.5	Fourier 級数の部分和の収束	27
6	付録: ガウス分布の Fourier 変換	28
6.1	熱方程式を使う方法	29
6.2	両辺が同一の常微分方程式を満たしていることを使う方法	29
6.3	項別積分で計算する方法	30
6.4	Cauchy の積分定理を使う方法	30
7	付録: Gauss 積分の計算	31
7.1	同一の体積の 2 通りの積分表示を用いた計算	31
7.2	極座標変換による計算	31
7.3	Jacobian を使わずにすむ座標変換による計算	32
7.4	ガンマ関数とベータ関数の関係を用いた計算	32
7.5	他の方法	33
8	付録: ガンマ関数	33
8.1	ガンマ関数と正弦関数の関係式	34
8.2	ガンマ関数の無限乗積展開	35
8.3	正弦関数の無限乗積展開	38
8.4	Wallis の公式	40
9	付録: 様々な確率分布について	41
9.1	正規分布	41
9.2	ガンマ分布とカイ 2 乗分布	41
9.3	第二種ベータ分布と t 分布	42
9.4	第一種ベータ分布と F 分布	43
9.5	$n - 1$ 次元球面上の一様分布と Maxwell-Boltzmann 則 (1)	44

9.6	$n - 1$ 次元球面上の一様分布と Maxwell-Boltzmann 則 (2)	47
9.7	二項分布と第一種ベータ分布	50
9.8	Poisson 分布とガンマ分布	50
9.9	基本的な数学用語の大雑把な説明	51
10	付録: 簡単な Tauber 型定理とその応用	52
10.1	不定積分型	52
10.2	Laplace 変換型	53
10.3	Wallis の公式と逆正弦分布	59
10.4	$x - x^2 + x^4 - x^8 + x^{16} - x^{32} + \dots$ で $x \nearrow 1$ とすると?	60
11	付録: Taylor の定理に証明の仕方	61
11.1	積分剰余項型 Taylor の定理	61
11.2	線形常微分方程式の解法	64
11.3	微分剰余項型 Taylor の定理	65

0 はじめに

Stirling の公式とは

$$n! \sim n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n} \quad (n \rightarrow \infty)$$

という階乗の近似公式のことである. ここで $a_n \sim b_n$ ($n \rightarrow \infty$) は $\lim_{n \rightarrow \infty} (a_n/b_n) = 1$ を意味する. より精密には

$$n! = n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n} \left(1 + \frac{1}{12n} + O\left(\frac{1}{n^2}\right) \right) \quad (n \rightarrow \infty)$$

が成立している¹. このノートではまず最初にガンマ分布に関する中心極限定理から Stirling の公式が“導出”されることを説明する. その後は様々な方法で Stirling の公式を導出する. 精密かつ厳密な議論はしない.

このノートの後半の付録群では関連の基礎知識の解説を行なう. このノートの全体は学生向けの Gauss 積分入門, ガンマ関数入門, ベータ関数入門, Fourier 解析入門になることを意図して書かれた雑多な解説の寄せ集めである. 前の方の節で後の方の節で説明した結果を使うことが多いので読者は注意して欲しい. 基本的な方針として易しい話しか扱わないことにする.

表 0.1: Stirling の公式による階乗の近似

n	$n!$	$A_n = n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n}$ (誤差/ $n!$)	$A_n(1 + 1/(12n))$ (誤差/ $n!$)
1	1	0.92... (7.78%)	0.9989... (0.10%)
3	6	5.836... (2.73%)	5.998... (0.028%)
10	3628800	3598695.6... (0.83%)	3628684.7... (0.0032%)
30	$2.6525 \dots \times 10^{32}$	$2.6451 \dots \times 10^{32}$ (0.28%)	$2.6525 \dots \times 10^{32}$ (3.7×10^{-6})
100	$9.3326 \dots \times 10^{157}$	$9.3248 \dots \times 10^{157}$ (0.08%)	$9.3326 \dots \times 10^{157}$ (3.4×10^{-7})

¹第 3 節を見よ.

表 0.1 を見ればわかるように, $n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n}$ による $n!$ の近似の誤差は, $n = 3$ の段階ですでに 3% を切っており, $n = 10$ の段階では 1% を切っている. さらに $1/(12n)$ で補正すると誤差は劇的に小さくなり, $n = 1$ の段階ですでに近似の誤差が 0.1% 程度と相当に小さい:

$$\frac{\sqrt{2\pi}}{e} \left(1 + \frac{1}{12}\right) = 0.9989 \dots \approx 1.$$

このように Stirling の公式は階乗の近似公式として非常に優秀である².

1 ガンマ分布に関する中心極限定理からの“導出”

ガンマ分布とは次の確率密度関数で定義される確率分布のことである³:

$$f_{\alpha, \tau}(x) = \begin{cases} \frac{e^{-x/\tau} x^{\alpha-1}}{\Gamma(\alpha) \tau^\alpha} & (x > 0), \\ 0 & (x \leq 0). \end{cases}$$

ここで $\alpha, \tau > 0$ はガンマ分布を決めるパラメーターである⁴. 以下簡単のため $\alpha = n > 0$, $\tau = 1$ の場合のガンマ分布のみを扱うために $f_n(x) = f_{n,1}(x)$ とおく:

$$f_n(x) = \frac{e^{-x} x^{n-1}}{\Gamma(n)} \quad (x > 0).$$

確率密度関数 $f_n(x)$ で定義される確率変数を X_n と書くことにする. 確率変数 X_n の平均 μ_n と分散 σ_n^2 は両方 n になる⁵:

$$\begin{aligned} \mu_n &= E[X_n] = \int_0^\infty x f_n(x) dx = \frac{\Gamma(n+1)}{\Gamma(n)} = n, \\ E[X_n^2] &= \int_0^\infty x^2 f_n(x) dx = \frac{\Gamma(n+2)}{\Gamma(n)} = (n+1)n, \\ \sigma_n^2 &= E[X_n^2] - \mu_n^2 = n. \end{aligned}$$

ゆえに確率変数 $Y_n = (X_n - \mu_n)/\sigma_n = (X_n - n)/\sqrt{n}$ の平均と分散はそれぞれ 0 と 1 になり, その確率密度関数は

$$\sqrt{n} f_n(\sqrt{n}y + n) = \sqrt{n} \frac{e^{-(\sqrt{n}y+n)} (\sqrt{n}y + n)^{n-1}}{\Gamma(n)}$$

²Gergő Nemes, *New asymptotic expansion for the $\Gamma(z)$ function*, 2007 に階乗の様々な近似公式の比較がある. たとえば Nemes の公式

$$n! = \left[\left(n + \frac{1}{12n - \frac{1}{10n + \dots}} \right) \frac{1}{e} \right]^n \sqrt{2\pi n} = n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n} \left(1 + \frac{1}{12n^2} + \frac{1}{1440n^4} + \dots \right)^n$$

は極めて優秀な近似公式である.

³ガンマ関数は $s > 0$ に対して $\Gamma(s) = \int_0^\infty e^{-x} x^{s-1} dx$ と定義される. 直接の計算によって $\Gamma(1) = 1$ を, 部分積分によって $\Gamma(s+1) = s\Gamma(s)$ を示せるので, 0 以上の整数 n について $\Gamma(n+1) = n!$ となる.

⁴ α は shape parameter と, τ は scale parameter と呼ばれているらしい. ガンマ分布の平均と分散はそれぞれ $\alpha\tau$ と $\alpha\tau^2$ になる.

⁵確率密度関数 $f(x)$ を持つ確率変数 X に対して, 期待値汎関数が $E[g(X)] = \int_{\mathbb{R}} g(x)f(x) dx$ と定義され, 平均が $\mu = E[X]$ と定義され, 分散が $\sigma^2 = E[(X - \mu)^2] = E[X^2] - \mu^2$ と定義される.

になる⁶. この確率密度関数で $y = 0$ とおくと

$$\sqrt{n}f_n(n) = \sqrt{n} \frac{e^{-n}n^{n-1}}{\Gamma(n)} = \frac{n^n e^{-n} \sqrt{n}}{\Gamma(n+1)}$$

となる. $n > 0$ が整数のとき $\Gamma(n+1) = n!$ なので, これが $n \rightarrow \infty$ で $1/\sqrt{2\pi}$ に収束することと Stirling の公式の成立は同値になる.

ガンマ分布が再生性を満たしていることより, 中心極限定理を適用できるので, \mathbb{R} 上の有界連続関数 $\varphi(x)$ に対して, $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\int_0^\infty \varphi\left(\frac{x-n}{\sqrt{n}}\right) f_n(x) dx = \int_0^\infty \varphi(y) \sqrt{n} f_n(\sqrt{n}y+n) dy \rightarrow \int_{-\infty}^\infty \varphi(y) \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}} dy.$$

$\varphi(y)$ をデルタ関数 $\delta(y)$ に近づけることによって (すなわち確率密度関数の y に 0 を代入することによって),

$$\sqrt{n}f_n(n) = \sqrt{n} \frac{e^{-n}n^{n-1}}{\Gamma(n)} = \frac{n^n e^{-n} \sqrt{n}}{\Gamma(n+1)} \rightarrow \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \quad (n \rightarrow \infty)$$

を得る. この結果は Stirling の公式の成立を意味する.

以上の“導出”の最後で確率密度関数の y に 0 を代入するステップには論理的にギャップがある. このギャップを埋めるためには中心極限定理をブラックボックスとして利用するのではなく, 中心極限定理の特性函数を用いた証明に戻る必要がある. そのような証明の方針については次の節を見て欲しい.

2 ガンマ分布の特性函数を用いた表示からの導出

前節では中心極限定理を便利なブラックボックスとして用いて Stirling の公式を“導出”した. しかし, その“導出”には論理的なギャップがあった. そのギャップを埋めるためには, 中心極限定理が確率密度函数を特性函数 (確率密度函数の逆 Fourier 変換) の Fourier 変換で表示することによって証明されることを思い出す必要がある.

この節ではガンマ分布の確率密度函数を特性函数の Fourier 変換で表わす公式を用いて, 直接的に Stirling の公式を証明する⁷.

2.1 Stirling の公式の証明

ガンマ分布の確率密度函数 $f_n(x) = e^{-x}x^{n-1}/\Gamma(n)$ ($x > 0$) の特性函数 (逆 Fourier 変換) $F_n(t)$ は次のように計算される⁸:

$$F_n(t) = \int_0^\infty e^{itx} f_n(x) dx = \frac{1}{\Gamma(n)} \int_0^\infty e^{-(1-it)x} x^{n-1} dx = \frac{1}{(1-it)^n}.$$

⁶確率変数 X の確率分布函数が $f(x)$ のとき, 確率変数 Y を $Y = (X - a)/b$ と定めると, $E[g(Y)] = \int_{\mathbb{R}} g((x-a)/b) f(x) dx = \int_{\mathbb{R}} g(y) b f(by+a) dy$ なので, Y の確率分布函数は $b f(by+a)$ になる.

⁷筆者はこの証明法を <https://www.math.kyoto-u.ac.jp/~nobuo/pdf/prob/stir.pdf> を見て知った.

⁸確率分布がパラメーター n について再生性を持つことと特性函数がある函数の n 乗の形になることは同値である.

ここで、実部が正の複素数 α に対して

$$\frac{1}{\Gamma(n)} \int_0^\infty e^{-\alpha t} t^{n-1} dt = \frac{1}{\alpha^n}$$

となることを使った。この公式は Cauchy の積分定理を使って示せる⁹。

Fourier の反転公式より¹⁰,

$$f_n(x) = \frac{e^{-x} x^{n-1}}{\Gamma(n)} = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty e^{-itx} F_n(t) dt = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty \frac{e^{-itx}}{(1-it)^n} dt \quad (x > 0).$$

この公式さえ認めてしまえば Stirling の公式の証明は易しい。

この公式より、 $t = \sqrt{n}u$ と置換することによって、

$$\sqrt{n}f_n(n) = \frac{n^n e^{-n} \sqrt{n}}{\Gamma(n+1)} = \frac{\sqrt{n}}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty \frac{e^{-itn}}{(1-it)^n} dt = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty \frac{e^{-iu\sqrt{n}}}{(1-iu/\sqrt{n})^n} du.$$

Stirling の公式を証明するためには、これが $n \rightarrow \infty$ で $1/\sqrt{2\pi}$ に収束することを示せばよい。そのために被積分函数の対数の様子を調べよう:

$$\begin{aligned} \log \frac{e^{-iu\sqrt{n}}}{(1-iu/\sqrt{n})^n} &= -n \log \left(1 - \frac{iu}{\sqrt{n}} \right) - iu\sqrt{n} \\ &= n \left(\frac{iu}{\sqrt{n}} - \frac{u^2}{2n} + o\left(\frac{1}{n}\right) \right) - iu\sqrt{n} = -\frac{u^2}{2} + o(1). \end{aligned}$$

したがって、 $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\frac{e^{-iu\sqrt{n}}}{(1-iu/\sqrt{n})^n} \rightarrow e^{-u^2/2}.$$

これより、 $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\sqrt{n}f_n(n) = \frac{n^n e^{-n} \sqrt{n}}{\Gamma(n+1)} = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty \frac{e^{-iu\sqrt{n}}}{(1-iu/\sqrt{n})^n} du \rightarrow \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty e^{-u^2/2} du = \frac{1}{\sqrt{2\pi}}$$

となることがわかる¹¹。最後の等号で一般に正の実数 α に対して

$$\int_{-\infty}^\infty e^{-u^2/\alpha} du = \sqrt{\alpha\pi}$$

となることを用いた¹²。これで Stirling の公式が証明された。

⁹ Cauchy の積分定理を使わなくても示せる。左辺を $f(\alpha)$ と書くと、 $f(1) = 1$ でかつ部分積分によって $f'(\alpha) = -(n/\alpha)f(\alpha)$ となることがわかるので、その公式が得られる。正の実数 α に対するこの公式は $t = x/\alpha$ という置換積分によって容易に証明される。

¹⁰ Fourier の反転公式の証明の概略については第 5 節を参照せよ。

¹¹ 厳密に証明したければ、たとえば Lebesgue の収束定理を使えばよい。

¹² この公式は Gauss 積分の公式 $\int_{-\infty}^\infty e^{-x^2} dx = \sqrt{\pi}$ で $x = u/\sqrt{\alpha}$ と積分変数を変換すれば得られる。Gauss 積分の公式は以下のようにして証明される。左辺を I とおくと $I^2 = \int_{-\infty}^\infty \int_{-\infty}^\infty e^{-(x^2+y^2)} dx dy$ であり、 I^2 は $z = e^{-(x^2+y^2)}$ のグラフと平面 $z = 0$ で挟まれた「小山状の領域」の体積だと解釈される。その小山の高さ $0 < z \leq 1$ における断面積は $-\pi \log z$ になるので、その体積は $\int_0^1 (-\pi \log z) dz = -\pi [z \log z - z]_0^1 = \pi$ になる。ゆえに $I = \sqrt{\pi}$ 。Gauss 積分の公式の不思議なところは円周率が出て来るところであり、しかもその平方根が出て来るところである。しかしその二乗が小山の体積であることがわかれば、その高さ z での断面が円盤の形になることから円周率 π が出て来る理由がわかる。平方根になるのは I そのものを直接計算したのではなく、 I^2 の方を計算したからである。

2.2 正規化されたガンマ分布の確率密度関数の各点収束

確率密度関数 $f_n(x) = e^{-x}x^{n-1}$ を持つ確率変数を X_n と書くとき, $Y_n = (X_n - n)/\sqrt{n}$ の平均と分散はそれぞれ 0 と 1 になるのであった (前節を見よ). Y_n の確率密度関数は

$$\sqrt{n}f_n(\sqrt{ny} + n) = \sqrt{n} \frac{e^{-\sqrt{ny}-n}(\sqrt{ny} + n)^{n-1}}{\Gamma(n)} = \frac{e^{-n}n^{n-1/2}}{\Gamma(n)} \frac{e^{-\sqrt{ny}}(1 + y/\sqrt{n})^n}{1 + y/\sqrt{n}}$$

になる. そして, $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\begin{aligned} \log \left(e^{-\sqrt{ny}} \left(1 + \frac{y}{\sqrt{n}} \right)^n \right) &= n \log \left(1 + \frac{y}{\sqrt{n}} \right) - \sqrt{ny} \\ &= n \left(\frac{y}{\sqrt{n}} - \frac{y^2}{2n} + o\left(\frac{1}{n}\right) \right) - \sqrt{ny} = -\frac{y^2}{2} + o(1) \end{aligned}$$

なので, $n \rightarrow \infty$ で $e^{-\sqrt{ny}}(1 + y/\sqrt{n})^n \rightarrow e^{-y^2/2}$ となり, さらに $1 + y/\sqrt{n} \rightarrow 1$ となる. ゆえに, 次が成立することと Stirling の公式は同値になる:

$$\sqrt{n}f_n(\sqrt{ny} + n) = \sqrt{n} \frac{e^{-\sqrt{ny}-n}(\sqrt{ny} + n)^{n-1}}{\Gamma(n)} \rightarrow \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}} \quad (n \rightarrow \infty).$$

すなわち Y_n の確率密度関数が標準正規分布の確率密度関数に各点収束することと Stirling の公式は同値である.

ガンマ分布について確率密度関数の各点収束のレベルで中心極限定理が成立していることと Stirling の公式は同じ深さにある.

Y_n の確率分布関数が標準正規分布の確率密度関数に各点収束することの直接的証明は $\sqrt{n}f(n)$ の収束の証明と同様に以下のようにして得られる:

$$\begin{aligned} \sqrt{n}f_n(\sqrt{ny} + n) &= \frac{\sqrt{n}}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{-it(\sqrt{ny}+n)}}{(1-it)^n} dt = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-iuy} \frac{e^{-it\sqrt{n}}}{(1-iu/\sqrt{n})^n} dt \\ &\rightarrow \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-iuy} e^{-u^2/2} du = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-y^2/2} \quad (n \rightarrow \infty). \end{aligned}$$

最後の等号で, Cauchy の積分定理より¹³

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-iuy} e^{-u^2/2} du = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(u+iy)^2/2 - y^2/2} du = e^{-y^2/2} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-v^2/2} dv = e^{-y^2/2} \sqrt{2\pi}$$

となることを用いた.

このように, ガンマ分布の確率密度関数の特性関数の Fourier 変換による表示を使えば確率密度関数の各点収束のレベルでの中心極限定理を容易に示すことができ, その結果は Stirling の公式と同値になっている.

¹³複素解析を使わなくても容易に証明される. たとえば, e^{-ity} の Taylor 展開を代入して項別積分を実行しても証明できる. もしくは, 両辺が $f'(y) = -yf(y)$, $f(0) = \sqrt{2\pi}$ を満たしていることから導かれる (左辺が満たしていることは部分積分すればわかる). Cauchy の積分定理を使えば形式的に $u + iy$ ($u > 0$) を $v > 0$ で置き換える置換積分を実行したのと同じように見える証明が得られる.

2.3 Fourier 反転公式を用いない方法

ガンマ函数の定義より,

$$n! = \Gamma(n+1) = \int_0^\infty e^{-x} x^n dx.$$

積分変数を $x = n + \sqrt{n}y = n(1 + y/\sqrt{n})$ によつて y に変換すると,

$$n! = n^n e^{-n} \sqrt{n} \int_{-\sqrt{n}}^\infty e^{-\sqrt{n}y} \left(1 + \frac{y}{\sqrt{n}}\right)^n dy.$$

ゆえに

$$c_n = \frac{n!}{n^n e^{-n} \sqrt{n}}, \quad h_n(y) = \begin{cases} e^{-\sqrt{n}y} (1 + y/\sqrt{n})^n & (y > \sqrt{n}), \\ 0 & (y \leq -\sqrt{n}). \end{cases}$$

とおくと, $c_n = \int_{-\infty}^\infty h_n(y) dy$ となる. $\log h_n(y)$ の $y = 0$ における Taylor 展開によつて $\log h_n(y) = -y^2/2 + o(1)$ ($n \rightarrow \infty$) となることがわかるので, $\lim_{n \rightarrow \infty} h_n(y) = e^{-y^2/2}$ となることがわかる. さらに

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_{-\infty}^\infty h_n(y) dy = \int_{-\infty}^\infty e^{-y^2/2} dy$$

という積分と極限の順序の交換を示すことができれば¹⁴, $\lim_{n \rightarrow \infty} c_n = \sqrt{2\pi}$ が得られる. すなわち Stirling の公式

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n!}{n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n}} = 1$$

が得られる. この筋道であれば Fourier 解析の知識は必要ではなくなる.

2.4 自由度が大きなカイ 2 乗分布が正規分布で近似できることとの関係

独立な標準正規分布する確率変数 n 個の確率変数 X_1, \dots, X_n によつて $Y_n = X_1^2 + \dots + X_n^2$ と定義された確率変数 Y_n の確率分布を自由度 n のカイ 2 乗分布と呼ぶ.

自由度 n のカイ 2 乗分布は shape が $\alpha = n/2$ で scale が $\tau = 2$ のガンマ分布に等しい. 特に自由度 n のカイ 2 乗分布の確率密度函数は

$$f_{n/2,2}(y) = \begin{cases} \frac{e^{-y/2} y^{n/2-1}}{\Gamma(n/2) 2^{n/2}} & (y > 0), \\ 0 & (y \leq 0). \end{cases}$$

になり, その平均と分散はそれぞれ n と $2n$ になる. すなわち,

$$\int_0^\infty g(y) \frac{e^{-y/2} y^{n/2-1}}{\Gamma(n/2) 2^{n/2}} dy = \int_{\mathbb{R}^n} g(x_1^2 + \dots + x_n^2) \frac{e^{-(x_1^2 + \dots + x_n^2)/2}}{(2\pi)^{n/2}} dx_1 \cdots dx_n.$$

¹⁴ $y \geq 0$ で $h_n(y) \leq h_1(y) = e^{-y}(1+y)$ が, $y \leq 0$ で $h_n(y) \leq e^{-y^2/2}$ が成立しているので, Lebesgue の収束定理を使えば容易に示すことができる. Lebesgue の収束定理を使わなくても, $|y| \leq M$ で h_n が一様収束することを用いて示すこともできる.

この事実を示すためには、ガンマ分布の再生性より、 $n = 1$ の場合を示せば十分である。 $n = 1$ の場合の計算は本質的にガウス積分と $\Gamma(1/2)$ の関係そのものである。実際、 $x > 0$ で $x = \sqrt{y}$ と積分変数を置換することによって

$$\int_{-\infty}^{\infty} g(x^2) \frac{e^{-x^2/2}}{\sqrt{2\pi}} dx = 2 \int_0^{\infty} g(y) \frac{e^{-y/2}}{\sqrt{2\pi}} \frac{y^{-1/2}}{2} dy = \int_0^{\infty} g(y) \frac{e^{-y/2} y^{1/2-1}}{\Gamma(1/2) 2^{1/2}} dy.$$

最後の等号で $\Gamma(1/2) = \sqrt{\pi}$ を使った。

統計学の世界では、自由度 n を大きくすると、カイ 2 乗分布は平均が n で分散が $2n$ の正規分布にゆっくり近付くことがよく知られている。その事実はガンマ分布の中心極限定理そのものである。そして、前節で示したように正規化されたガンマ分布の確率密度関数が標準正規分布に各点収束するという結果と Stirling の公式は同値 (同じ深さの結果) なのであった。以上をまとめると次のようにも言えることがわかる：

自由度 n のカイ 2 乗分布を変数変換で平均 0, 分散 1 に正規化するとき、 $n \rightarrow \infty$ でその確率密度関数が標準正規分布の確率密度関数に収束するという統計学においてよく知られている結果は Stirling の公式と同値である。

要するに統計学をよく知っている人は、Stirling の公式は $n \rightarrow \infty$ でカイ 2 乗分布が正規分布に近づくことと同じことを意味していると思ってよい。

2.5 一般の場合の中心極限定理に関する大雑把な解説

一般の場合の中心極限定理について大雑把にかつ簡単に解説する。

X_1, X_2, X_3, \dots は独立で等しい確率分布を持つ確率変数の列であるとする。さらにそれらは平均 $\mu = E[X_k]$ と分散 $\sigma^2 = E[(X_k - \mu)^2] = E[X_k^2] - \mu^2$ を持つと仮定する。

$Y_n = (X_1 + \dots + X_n - n\mu)/\sqrt{n\sigma^2}$ とおくと Y_n の平均と分散はそれぞれ 0 と 1 になる。このとき $n \rightarrow \infty$ の極限で Y_n の確率分布が平均 0, 分散 1 の標準正規分布に (適切な意味で) 収束するというのが中心極限定理である。

記述の簡単のため X_k を $(X_k - \mu)/\sigma$ で置き換えることにする。このように置き換えても Y_n は変わらない。このとき X_k の平均と分散はそれぞれ 0 と 1 になるので、 X_k の特性関数を $\varphi(t) = E[e^{itX_k}]$ と書くと、

$$\varphi(t) = 1 - \frac{t^2}{2} + o(t^2).$$

$Y_n = (X_1 + \dots + X_n)/\sqrt{n}$ とおくと Y_n の平均と分散もそれぞれ 0 と 1 になり、 Y_n の特性関数の極限は次のように計算される：

$$\begin{aligned} E[e^{itY_n}] &= \prod_{k=1}^n E[e^{itX_k/\sqrt{n}}] = \varphi\left(\frac{t}{\sqrt{n}}\right)^n \\ &= \left(1 - \frac{t^2}{2n} + o\left(\frac{1}{n}\right)\right)^n \rightarrow e^{-t^2/2} \quad (n \rightarrow \infty). \end{aligned}$$

ゆえに、Fourier の反転公式より¹⁵、 Y_n の確率密度関数¹⁶ $f_n(y)$ は

$$f_n(y) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ity} \varphi\left(\frac{t}{\sqrt{n}}\right)^n dt$$

¹⁵ $\varphi(t/\sqrt{n})^n$ が可積分ならば Y_n に関する Fourier 反転公式の結果は函数になるが、可積分でない場合には測度になり、測度の収束を考えることになる。

¹⁶一般には \mathbb{R} 上の確率測度になる。

になり, これは $n \rightarrow \infty$ で標準正規分布の確率密度函数

$$\frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ity} e^{-t^2/2} dt = \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}}$$

に収束する¹⁷.

2.6 二項分布の中心極限定理

以上では確率分布の「適切な意味での収束」についてほとんど何も説明しなかった. この節ではその点について二項分布を例に用いて大雑把に説明する¹⁸.

X_n が二項分布する確率変数のとき, $g(X_n)$ の期待値は

$$E[g(X_n)] = \sum_{k=0}^n g(k) \binom{n}{k} p^k q^{n-k}$$

と定義される. ここで $0 < p < 1$, $q = 1 - p$ であり, n は正の整数であるとし, $\binom{n}{k}$ は二項係数を表わす:

$$\binom{n}{k} = \frac{n!}{k!(n-k)!}, \quad (x+y)^n = \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} x^k y^{n-k}.$$

$E[g(X_n)]$ を積分の形式で書くためにはデルタ函数 (デルタ測度) $\delta(x-a) dx$ を使う必要がある¹⁹:

$$E[g(X_n)] = \int_{\mathbb{R}} g(x) f_n(x) dx, \quad f_n(x) = \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} p^k q^{n-k} \delta(x-k).$$

このように, 二項分布の確率密度函数 $f_n(x)$ はデルタ函数 (デルタ測度) を使って表わされると考えられ, 通常の函数ではなく超函数 (より正確には測度) になってしまう. 特に確率密度函数の収束を通常の函数の各点収束で考えることはできなくなる.

そのような場合には確率密度函数の各点収束ではなく, 期待値汎函数 $g \mapsto E[g(X)]$ の収束を考えればよい²⁰.

具体的な議論では, 一般の函数 g に対する $E[g(X)]$ を扱うのではなく, ある特別な形の函数 g に関する $E[g(X)]$ を扱い, その特別な場合の計算から一般の場合を導くというようにすることがよく行われる.

その典型例が確率変数 X の特性函数 $\varphi_X(t) = E[e^{itX}]$ を扱うことである. 特性函数は \mathbb{R} 上で常に絶対値が 1 以下の一樣連続函数になる:

$$|\varphi_X(t)| = |E[e^{itX}]| \leq E[|e^{itX}|] = E[1] = 1, \\ \sup_{t \in \mathbb{R}} |\varphi_X(t+h) - \varphi_X(t)| = \sup_{t \in \mathbb{R}} |E[e^{itX}(e^{ihX} - 1)]| \leq E[|e^{ihX} - 1|] \rightarrow 0 \quad (h \rightarrow 0).$$

最後の 0 への収束では Lebesgue の収束定理を用いた. 函数 $g(x)$ が

$$g(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{itx} \hat{g}(t) dt$$

¹⁷厳密には適切な意味での収束を考える必要がある.

¹⁸アイデアの説明はするが, 厳密な議論はしない.

¹⁹デルタ函数 (デルタ測度) $\delta(x-a) dx$ は連続函数 $f(x)$ に対して, $\int_{\mathbb{R}} g(x) \delta(x-a) dx = g(a)$ によって定義されていると考える.

²⁰この型の収束は弱収束と呼ばれる.

と表わされていたとする²¹. このとき, $E[\]$ と積分の順序を交換することによって

$$E[g(X)] = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \hat{g}(t) E[e^{itX}] dt = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \hat{g}(t) \varphi_X(t) dt.$$

この公式より, 確率変数列 Y_n と確率変数 Y について, 特性函数列 φ_{Y_n} が特性函数 φ_Y に各点収束していれば, 適切なクラス²²に含まれる任意の函数 $g(y)$ に対して $E[g(Y_n)]$ は $E[g(Y)]$ に収束することを示せる²³. 離散型確率変数を含む一般の場合の中心極限定理はこのような形で定式化される.

注意. 確率変数 Y_n の特性函数 φ_{Y_n} が函数 φ に各点収束していても収束先の函数 φ がある確率変数の特性函数になっていない場合には確率変数 Y_n は確率変数に収束しない. 特性函数列 φ_{Y_n} が原点で連続な函数 φ に各点収束するならば, 特性函数 φ を持つ確率変数 Y が存在して, 確率変数列 Y_n が Y に弱収束することが知られている²⁴. \square

二項分布の中心極限定理を示そう. 二項分布の特性函数は

$$\begin{aligned} \varphi_{X_n}(t) &= E[e^{itX_n}] = \sum_{k=0}^n e^{itk} \binom{n}{k} p^k q^{n-k} \\ &= \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} (pe^{it})^k q^{n-k} = (pe^{it} + q)^n \end{aligned}$$

となる. 二項分布の平均と分散はそれぞれ $\mu_n = np$ と $\sigma_n^2 = npq$ である. ゆえに確率変数

$$Y_n = \frac{X_n - \mu_n}{\sigma_n} = \frac{X_n - np}{\sqrt{npq}}$$

の平均と分散はそれぞれ 0 と 1 になり, その特性函数は

$$\begin{aligned} \varphi_{Y_n}(t) &= E[e^{itY_n}] = E[e^{-itnp/\sqrt{npq}} e^{itX_n/\sqrt{npq}}] \\ &= e^{-itnp/\sqrt{npq}} \varphi_{X_n}(t/\sqrt{npq}) = e^{-itnp/\sqrt{npq}} (pe^{it/\sqrt{npq}} + q)^n \\ &= (pe^{itq/\sqrt{npq}} + qe^{-itp/\sqrt{npq}})^n \end{aligned}$$

となる²⁵. X_n の特性函数の公式を経由せずに, $X_n - np = X_n(p+q) - np = qX_n - p(n-X_n)$ を用いて, 直接的に

$$\begin{aligned} \varphi_{Y_n}(t) &= E[e^{itY_n}] = E[e^{itqX_n/\sqrt{npq}} e^{-itp(n-X_n)/\sqrt{npq}}] \\ &= \sum_{k=0}^n e^{itqk/\sqrt{npq}} e^{-itp(n-k)/\sqrt{npq}} \binom{n}{k} p^k q^{n-k} \\ &= \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} (pe^{itq/\sqrt{npq}})^k (qe^{-itp/\sqrt{npq}})^{n-k} \\ &= (pe^{itq/\sqrt{npq}} + qe^{-itp/\sqrt{npq}})^n \end{aligned}$$

²¹たとえば $g(x)$ が急減少函数であれば急減少函数 $\hat{g}(t)$ でこのように $g(x)$ を表示できる.

²²たとえば有界な連続函数の集合.

²³実際の証明では, $g(y)$ が急減少函数であるような扱い易い場合に収束を示し, その極限として $g(t)$ がより広い函数のクラス (例えば有界連続函数の集合) に含まれる場合の結果を導く.

²⁴Bochner の定理.

²⁵たとえば $p = q = 1/2$ のとき $\varphi_{Y_n}(t) = (\cos(t/\sqrt{n}))^n$.

と計算することもできる. これに

$$pe^{itq/\sqrt{npq}} = p + \frac{itpq}{\sqrt{npq}} - \frac{qt^2}{2n} + O\left(\frac{1}{n\sqrt{n}}\right),$$

$$qe^{-itp/\sqrt{npq}} = q - \frac{itpq}{\sqrt{npq}} - \frac{pt^2}{2n} + O\left(\frac{1}{n\sqrt{n}}\right)$$

を代入すると

$$\varphi_{Y_n}(t) = \left(1 - \frac{t^2}{2n} + O\left(\frac{1}{n\sqrt{n}}\right)\right)^n$$

なので

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \varphi_{Y_n}(t) = e^{-t^2/2}$$

一方, 標準正規分布する確率変数 Y の特性関数は

$$\varphi_Y(t) = E[e^{itY}] = \int_{-\infty}^{\infty} e^{ity} \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}} dy = e^{-t^2/2}.$$

これより, 適切なクラスに含まれる函数²⁶ $g(y)$ について

$$\lim_{n \rightarrow \infty} E[g(Y_n)] = E[g(Y)]$$

となることを示せる. すなわち

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=0}^n g\left(\frac{k-np}{\sqrt{npq}}\right) \binom{n}{k} p^k q^{n-k} = \int_{-\infty}^{\infty} g(y) \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}} dy.$$

$g(y)$ が $a \leq y \leq b$ のとき値が 1 になり, そうでないとき 0 になる函数の場合には

$$\lim_{n \rightarrow \infty} P\left(a \leq \frac{X_n - np}{\sqrt{npq}} \leq b\right) = \int_a^b \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}} dy.$$

以上が二項分布の確率変数 X_n の中心極限定理である.

3 Laplace の方法による導出

前節までに説明した Stirling の公式の証明は本質的にガンマ函数 (ガンマ分布) が Gauss 積分 (正規分布) で近似されることを用いた証明だと考えられる. Gauss 積分による近似を Laplace の方法と呼ぶことがある.

3.1 ガンマ函数の Gauss 積分による近似を使った導出

ガンマ函数の値を Gauss 積分で直接近似することによって Stirling の公式を示そう. $\log(e^{-x}x^n) = n \log x - x$ を $x = n$ で Taylor 展開すると

$$n \log x - x = n \log n - n - \frac{(x-n)^2}{2n} + \frac{(x-n)^3}{3n^2} - \frac{(x-n)^4}{4n^3} + \dots$$

²⁶この場合には有界な連続函数や $a \leq y \leq b$ で値が 1 にそうでないとき 0 になる函数など.

なので, n が大きくなると $n! = \Gamma(n+1) = \int_0^\infty e^{-x} x^n dx$ が

$$\int_{-\infty}^{\infty} \exp\left(n \log n - n - \frac{(x-n)^2}{2n}\right) dx = n^n e^{-n} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x-n)^2/(2n)} dx = n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n}$$

で近似されることがわかる. ゆえに

$$n! \sim n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n} \quad (n \rightarrow \infty).$$

この近似の様子を scilab で描くことによって作った画像を [ツイッターの過去ログ](#) で見ることができる. 無料の数値計算ソフト scilab については [関連のツイート](#) を参照して欲しい.

以上の証明法では Stirling の公式中の因子 $n^n e^{-n}$, $\sqrt{2\pi n}$ のそれぞれが $g_n(x) = \log(e^{-x} x^n) = n \log x - x$ の $x = n$ における Taylor 展開の定数項と 2 次の項に由来していることがわかる. 3 次の項は $\int_{-\infty}^{\infty} y^3 e^{-y^2/\alpha} dy = 0$ なので寄与しない.

以上の方法を拡張して第 1 補正項の $1/(12n)$ まで導出してみよう²⁷.

準備. ガウス型積分とガンマ関数の関係は以下の通り:

$$\begin{aligned} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^{2k} dx &= 2 \int_0^{\infty} e^{-x^2/2} (x^2)^k dx = 2 \int_0^{\infty} e^{-t} (2t)^k \sqrt{2} \frac{t^{-1/2}}{2} dt \\ &= 2^k \sqrt{2} \int_0^{\infty} e^{-t} t^{k-1/2} dt = 2^k \sqrt{2} \Gamma(k+1/2) \\ &= 2^k \sqrt{2} \frac{1 \cdot 3 \cdots (2k-1)}{2^k} \sqrt{\pi} = 1 \cdot 3 \cdots (2k-1) \sqrt{2\pi}. \end{aligned}$$

たとえば, $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} dx = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^2 dx = \sqrt{2\pi}$,

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^4 dx = 3\sqrt{2\pi}, \quad \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^6 dx = 15\sqrt{2\pi}.$$

これらの公式を以下で使う.

ガンマ関数の積分表示の積分変数 x に $n(1+x/\sqrt{n})$ を代入すると

$$\begin{aligned} n! &= \Gamma(n+1) = \int_0^\infty e^{-x} x^n dx \\ &= n^n e^{-n} \sqrt{n} \int_{-\sqrt{n}}^\infty e^{-\sqrt{n}x} \left(1 + \frac{x}{\sqrt{n}}\right)^n dx \\ &\sim n^n e^{-n} \sqrt{n} \int_{-1}^1 e^{-\sqrt{n}x} \left(1 + \frac{x}{\sqrt{n}}\right)^n dx \quad (n \rightarrow \infty). \end{aligned}$$

被積分関数の対数を $\phi_n(x)$ と書くと:

$$\phi_n(x) = n \log\left(1 + \frac{x}{\sqrt{n}}\right) - \sqrt{n}x = -\frac{x^2}{2} + \frac{x^3}{3\sqrt{n}} - \frac{x^4}{4n} + o\left(\frac{1}{n}\right) \quad (n \rightarrow \infty).$$

²⁷—松信, Stirling の公式の第 1 剰余項までの初等的証明, 数学 Vol. 31 (1979) No. 3, 262–263 では Wallis の公式の精密化によって第 1 補正項を得る方法が解説されている. 第 1 補正項付きの Stirling 公式の易しい証明については, 鍋谷清治, 連続変数に対する Stirling の公式の初等的証明, 数学 Vol. 36 (1984) No. 2, 175–178 という文献がある. 後者の文献の解説を以下では参考にした.

最後の $o(1/n)$ の部分は n をかけた後に $n \rightarrow \infty$ とすると $|x| \leq 1$ で 0 に一様収束する。ゆえに $|x| \leq 1$ において一様に

$$\begin{aligned} e^{-\sqrt{n}x} \left(1 + \frac{x}{\sqrt{n}}\right)^n &= e^{-x^2/2} \exp\left(\frac{x^3}{3\sqrt{n}} - \frac{x^4}{4n} + o\left(\frac{1}{n}\right)\right) \\ &= e^{-x^2/2} \left(1 + \frac{x^3}{3\sqrt{n}} - \frac{x^4}{4n} + \frac{1}{2} \left(\frac{x^3}{3\sqrt{n}}\right)^2 + o\left(\frac{1}{n}\right)\right) \\ &= e^{-x^2/2} \left(1 + \frac{x^3}{3\sqrt{n}} - \frac{x^4}{4n} + \frac{x^6}{18n} + o\left(\frac{1}{n}\right)\right). \end{aligned}$$

$o(1/n)$ の部分に含まれる n の半整数乗分の 1 の項の係数は x について奇函数になることに注意せよ。奇函数と $e^{-x^2/2}$ の積の $-1 \leq x \leq 1$ での積分は消えるので、上で準備しておいた公式によって次が得られる:

$$\begin{aligned} \int_{-1}^1 e^{-\sqrt{n}x} \left(1 + \frac{x}{\sqrt{n}}\right)^n dx &\sim \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} \left(1 - \frac{x^4}{4n} + \frac{x^6}{18n}\right) dx + O\left(\frac{1}{n^2}\right) \\ &= \sqrt{2\pi} - \frac{3\sqrt{2\pi}}{4n} + \frac{15\sqrt{2\pi}}{18n} + O\left(\frac{1}{n^2}\right) \\ &= \sqrt{2\pi} \left(1 + \frac{1}{12n} + O\left(\frac{1}{n^2}\right)\right). \end{aligned}$$

ゆえに

$$n! = n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n} \left(1 + \frac{1}{12n} + O\left(\frac{1}{n^2}\right)\right) \quad (n \rightarrow \infty).$$

これで第 1 補正項 $1/(12n)$ が得られた²⁸ 第 1 補正項 $1/(12n)$ は、 n が大きなとき、 $n!$ の $n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n}$ による近似の誤差は n が大きなとき $n!$ の値の $12n$ 分の 1 程度になることを意味している。

3.2 ガンマ函数のガンマ函数を用いた近似で補正項を計算する方法

Laplace の方法による Stirling の公式の証明とその一般化に関しては [Gergő Nemes, Asymptotic expansions for integrals, 2012, M. Sc. Thesis, 40 pages](#) が詳しい。以下で説明する方法の詳細はこの論文の Example 1.2.1 にある。そこに書いてある方法を使っても、Stirling の公式の補正項 $1/(12n)$ を容易に得ることができる。

次の公式を使うことを考える: 任意の $a > 0$ ($a = \infty$ を含む) に対して,

$$\int_0^a e^{-nt} t^{s-1} dt = \frac{1}{n^s} \int_0^{an} e^{-x} x^{s-1} dx \sim \frac{\Gamma(s)}{n^s} \quad (n \rightarrow \infty).$$

$t = x/n$ と積分変数を置換した。この公式を使えば,

$$\int_0^a e^{-nt} (\alpha_1 t^{s_1-1} + \alpha_2 t^{s_2-1} + \dots) dt = \frac{\alpha_1 \Gamma(s_1)}{n^{s_1}} + \frac{\alpha_2 \Gamma(s_2)}{n^{s_2}} + \dots \quad (n \rightarrow \infty)$$

のような計算が可能になる。これを用いて Stirling の公式の最初の補正項 $1/(12n)$ を得てみよう。

²⁸高次の補正項も同様にして得られる。

函数 $f(x)$ を

$$f(x) = x - \log(1+x) \quad (x > -1)$$

と定め、積分変数を $y = n(1+x)$ と置換することによって、

$$\begin{aligned} n! &= \Gamma(n+1) = \int_0^\infty e^{-y} y^n dy \\ &= \int_{-1}^\infty e^{-n-nx} n^n (1+x)^n dx = n^{n+1} e^{-n} \int_{-1}^\infty e^{-nf(x)} dx. \end{aligned}$$

さらに積分を $x > 0$ と $x < 0$ に分けることによって

$$\frac{n!}{n^{n+1} e^{-n}} = \int_0^\infty e^{-nf(x)} dx + \int_0^1 e^{-nf(-x)} dx.$$

もしも $f(x) = t$ もしくは $f(-x) = t$ と積分変数を置換できれば、積分の形が上で説明した形になりそうである。

実際にそれが可能なことを確認しよう。 $f(x) = x - \log(1+x)$ の導函数は

$$f'(x) = 1 - \frac{1}{1+x} = \frac{x}{1+x}$$

なので $x > 0$ で $f'(x) > 0$ となり、 $-1 < x < 0$ で $f'(x) < 0$ となる。 $f(x)$ は $x = 0$ で最低値 $f(0) = 0$ を持ち、 $x > 0$ で単調増加し、 $x < 0$ で単調減少する。ゆえに $x > 0$ と $-1 < x < 0$ のそれぞれで $t = f(x)$ は逆函数 $x = x(t)$ を持つ。 $x = x(t)$ の原点近くでの振る舞いを調べるために、

$$x = \alpha t^{1/2} + \beta t + \gamma t^{3/2} + \dots$$

とにおいて

$$t = f(x) = x - \log(1+x) = \frac{x^2}{2} - \frac{x^3}{3} + \frac{x^4}{4} - \dots$$

に代入して²⁹、 α, β, γ を求めてみよう。実際に代入すると、

$$t = \frac{\alpha^2}{2} t + \left(\alpha\beta + \frac{\alpha^3}{3} \right) t^{3/2} + \left(\alpha\gamma + \frac{\beta^2}{2} + \alpha^2\beta + \alpha^4 \right) t^2 + \dots$$

両辺を比較して α, β, γ を求めると、

$$\alpha = \sqrt{2}, \quad \beta = \frac{2}{3}, \quad \gamma = \frac{\sqrt{2}}{18}$$

を得る。すなわち

$$x = \sqrt{2} t^{1/2} + \frac{2}{3} t + \frac{\sqrt{2}}{18} t^{3/2} + \dots$$

とおくと $f(x) = t$ となる。 $x > 0$ ではこの表示をそのまま用いる。 $x < 0$ では $t^{1/2}$ を $-t^{1/2}$ で置き換え、さらに x を $-x$ で置き換えた表示を用いる。すなわち

$$x = \sqrt{2} t^{1/2} - \frac{2}{3} t + \frac{\sqrt{2}}{18} t^{3/2} - \dots$$

²⁹ $|x| < 1$ における Taylor 展開 $\log(1+x) = x - x^2/2 + x^3/3 - x^4/4 + \dots$ は非常によく使われる。

とおくと $f(-x) = t$ となる. 以上のそれぞれの場合において, おいて

$$\frac{dx}{dt} = \frac{\sqrt{2}}{2} t^{1/2-1} \pm \frac{2}{3} t^{1-1} + \frac{\sqrt{2}}{12} t^{3/2-1} \pm \dots$$

以上の2つの場合で t の整数次の項には -1 倍の違いがある. 準備が整った.

$f(x) = t$ と積分変数を置換することによって, $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\begin{aligned} \int_0^\infty e^{-nf(x)} dx &= \int_0^\infty e^{-nt} \frac{dx}{dt} dt \\ &= \int_0^\infty e^{-nt} \left(\frac{\sqrt{2}}{2} t^{1/2-1} + \frac{2}{3} t^{1-1} + \frac{\sqrt{2}}{12} t^{3/2-1} + \dots \right) dt \\ &= \frac{\sqrt{2}\Gamma(1/2)}{2n^{1/2}} + \frac{2\Gamma(1)}{3} + \frac{\sqrt{2}\Gamma(3/2)}{12n^{3/2}} + \dots \\ &= \frac{\sqrt{2\pi}}{2n^{1/2}} + \frac{2}{3n} + \frac{\sqrt{2\pi}}{24n^{3/2}} + \dots \end{aligned}$$

となる. 最後に $\Gamma(1/2) = \sqrt{\pi}$, $\Gamma(1) = 1$, $\Gamma(3/2) = (1/2)\Gamma(1/2) = \sqrt{\pi}/2$ を使った. もう一方の積分についても, $f(-x) = t$ と積分変数を置換することによって同様にして, $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\int_0^1 e^{-nf(-x)} dx = \frac{\sqrt{2\pi}}{2n^{1/2}} - \frac{2}{3n} + \frac{\sqrt{2\pi}}{24n^{3/2}} - \dots$$

となる. 以上の2つを足し合わせると, n の整数乗分の1の項がすべてキャンセルし, 次が得られる:

$$\frac{n!}{n^{n+1}e^{-n}} = \frac{\sqrt{2\pi}}{n^{1/2}} + \frac{\sqrt{2\pi}}{12n^{3/2}} + O\left(\frac{1}{n^{5/2}}\right) \quad (n \rightarrow \infty).$$

これは次のように書き直される:

$$n! = n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n} \left(1 + \frac{1}{12n} + O\left(\frac{1}{n^2}\right) \right) \quad (n \rightarrow \infty).$$

これで第1の補正項 $1/(12n)$ も Laplace の方法で求められることがわかった. 第2の補正項以降も同様にして求められる.

注意. 以上の計算において “+…” と書いた部分については注意が必要である. そのことは以下の計算例を見ればわかる.

$$\frac{1}{1+t} = 1 - t + t^2 - t^3 + \dots + (-1)^{k-1} t^{k-1} + (-1)^k \frac{t^k}{1+t}$$

なので

$$\begin{aligned} \int_0^\infty \frac{e^{-nt}}{1+t} dt &= \frac{\Gamma(1)}{n} - \frac{\Gamma(2)}{n^2} + \dots + (-1)^{k-1} \frac{\Gamma(k)}{n^k} + (-1)^k \int_0^\infty \frac{e^{-nt} t^k}{1+t} dt \\ &= \frac{0!}{n} - \frac{1!}{n^2} + \dots + (-1)^{k-1} \frac{(k-1)!}{n^k} + (-1)^k \int_0^\infty \frac{e^{-nt} t^k}{1+t} dt. \end{aligned}$$

上の議論ではこのような和の途中から先を “+…” と略記して来た. すぐ上の式は正しい公式だが,

$$\int_0^\infty \frac{e^{-nt}}{1+t} dt = \sum_{k=1}^{\infty} (-1)^{k-1} \frac{(k-1)!}{n^k}$$

は通常の意味で正しい公式ではない。なぜならば右辺はどんなに大きな n に対しても収束しないからである。“+…”の部分は“無限和”を意味すると解釈するのではなく、“有限和+剰余項”を意味すると解釈しておかなければいけない。□

4 対数版の易しい Stirling の公式

Stirling の公式は次と同値である:

$$\log n! - (n + 1/2) \log n + n \longrightarrow \log \sqrt{2\pi} \quad (n \rightarrow \infty).$$

これより, 次の弱い結果が導かれる:

$$\log n! = n \log n - n + o(n) \quad (n \rightarrow \infty).$$

ここで $o(n)$ は n で割った後に $n \rightarrow \infty$ とすると 0 に収束する量を意味する。これをこの節では対数版の易しい Stirling の公式と呼ぶことにする。この公式であれば以下で説明するように初等的に証明することができる³⁰。

4.1 対数版の易しい Stirling の公式の易しい証明

単調増加関数 $f(x)$ について $f(k) \leq \int_k^{k+1} f(x) dx \leq f(k+1)$ が成立しているので, $f(1) \geq 0$ を満たす単調増加関数 $f(x)$ について,

$$f(1) + f(2) + \cdots + f(n-1) \leq \int_1^n f(x) dx \leq f(1) + f(2) + \cdots + f(n).$$

ゆえに

$$\int_1^n f(x) dx \leq f(1) + f(2) + \cdots + f(n) \leq \int_1^n f(x) dx + f(n).$$

これを $f(x) = \log x$ に適用すると

$$\int_1^n \log x dx = [x \log x - x]_1^n = n \log n - n + 1, \quad \log 1 + \log 2 + \cdots + \log n = \log n!$$

なので

$$n \log n - n + 1 \leq \log n! \leq n \log n - n + 1 + \log n.$$

すなわち

$$1 \leq \log n! - n \log n + n \leq 1 + \log n.$$

したがって

$$\log n! = n \log n - n + O(\log n) = n \log n - n + o(n) \quad (n \rightarrow \infty).$$

ここで $O(\log n)$ は $\log n$ で割ると有界になるような量を意味している。

³⁰以下の証明を見ればわかるように $o(n)$ の部分は $O(\log n)$ であることも証明できる。ここで $O(\log n)$ は $\log n$ で割った後に有界になる量を意味している。

4.2 大学入試問題への応用例

対数版の易しい Stirling の公式を使うと, an 個から bn 個取る組み合わせの数 (二項係数) の対数は

$$\begin{aligned} \log \binom{an}{bn} &= \log(an)! - \log(bn)! - \log((a-b)n)! \\ &= an \log a + an \log n - an + o(n) \\ &\quad - bn \log b - bn \log n + bn + o(n) \\ &\quad - (a-b)n \log(a-b) - (a-b)n \log n + (a-b)n + o(n) \\ &= n \log \frac{a^a}{b^b(a-b)^{a-b}} + o(n). \end{aligned}$$

となる. ゆえに

$$\log \binom{an}{bn}^{1/n} \rightarrow \log \frac{a^a}{b^b(a-b)^{a-b}} \quad (n \rightarrow \infty).$$

すなわち

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \binom{an}{bn}^{1/n} = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{(an)!}{(bn)!((a-b)n)!} \right)^{1/n} = \frac{a^a}{b^b(a-b)^{a-b}}.$$

要するに an 個から bn 個取る組み合わせの数の n 乗根の $n \rightarrow \infty$ での極限は二項係数部分の式の分子分母の $(kn)!$ を k^k で置き換えれば得られる.

この結果を使えば次の東工大の1988年の数学の入試問題を暗算で解くことができる:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{{}^{3n}C_n}{{}^{2n}C_n} \right)^{1/n} \text{ を求めよ.}$$

この極限の値は

$$\frac{3^3/(1^1 2^2)}{2^2/(1^1 1^1)} = \frac{3^3}{2^4} = \frac{27}{16}.$$

入試問題を作った人は, まず Stirling の公式を使うと容易に解ける問題を考え, その後に高校数学の範囲内でも解けることを確認したのだと思われる.

注意. 上で示したことより,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \binom{2n}{n}^{1/n} = \frac{2^2}{1^1 1^1} = 2^2.$$

これは次を意味している ($o(n)$ は n で割ると $n \rightarrow \infty$ で 0 に収束する量):

$$\binom{2n}{n} = 2^{2n} e^{o(n)} \quad (n \rightarrow \infty).$$

Wallis の公式 (第 8.4 節)

$$\binom{2n}{n} \sim \frac{2^{2n}}{\sqrt{\pi n}} \quad (n \rightarrow \infty)$$

はその精密化になっている. □

注意. 東工大では 1968 年にも次の問題を出しているようだ:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sqrt[n]{2n P_n} \text{ を求めよ. (答えは } 2^2 e^{-1} \text{.)}$$

この問題も明らかに元ネタは Stirling の公式である. より一般に次を示せる:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{((an)!)^{1/n}}{n^a} = a^a e^{-a}.$$

なぜならば

$$\begin{aligned} \log \frac{((an)!)^{1/n}}{n^a} &= \frac{1}{n} \log(an)! - a \log n \\ &= \frac{1}{n} (an \log a + an \log n - an + o(n)) - a \log n \\ &= a \log a - a + o(1) \\ &= \log(a^a e^{-a}) + o(1). \end{aligned}$$

やはり Stirling の公式を使えば容易に示せる結果を高校数学の範囲内で解けるように調節して入試問題にしているのだと思われる. \square

4.3 対数版の易しい Stirling の公式の改良

少し工夫すると次を示せる. ある定数 c が存在して,

$$\log n! = n \log n + \frac{1}{2} \log n - n + c + o(1) \quad (n \rightarrow \infty).$$

以下ではこの公式を証明しよう³¹.

第 4.1 節で証明した対数版の易しい Stirling の公式と上の公式の違いは $(1/2) \log n$ の項と定数項 c を付け加えて改良しているところである. それらの項を出すアイデアは次の通り. $\int_1^n \log x dx = [x \log x - x]_1^n = n \log n - n + 1$ を $k = 1, 2, 3, \dots, n-1$ に対する長方形 $[k-1/2, k+1/2] \times [0, \log k]$ の面積の総和と長方形 $[n-1/2, n] \times [0, \log n]$ の面積の和 $\log(n-1)! + (1/2) \log n = \log n! - (1/2) \log n$ で近似すれば, 自然に $(1/2) \log n$ の項が得られる. さらに, それらの長方形の和集合と領域 $\{(x, y) \mid 1 \leq x \leq n, 0 \leq y \leq \log x\}$ の違いを注意深く分析すれば, $\int_1^n \log x dx$ と長方形の面積の総和の差が $n \rightarrow \infty$ である定数に収束することがわかり, 定数項も得られる.

$\log x$ は単調増加関数なので正の実数 α_k, β_k を

$$\alpha_k = \int_k^{k+1/2} \log x dx - \frac{1}{2} \log k, \quad \beta_k = \frac{1}{2} \log k - \int_{k-1/2}^k \log x dx$$

と定めることができる. このとき,

$$\begin{aligned} \log n! - \frac{1}{2} \log n - \int_1^n \log x dx &= \sum_{k=1}^{n-1} \log k + \frac{1}{2} \log n - \int_1^n \log x dx \\ &= -\alpha_1 + \beta_2 - \alpha_2 + \beta_3 - \cdots + \beta_{n-1} - \alpha_{n-1} + \beta_n. \end{aligned}$$

³¹定数 c が $\log \sqrt{2\pi}$ であることは既知であるが, Wallis の公式を使えば $e^c = \sqrt{2\pi}$ であることを示せる.

この交代和が $n \rightarrow \infty$ で収束することを示したい。

$\log x$ が上に凸であることより, 数列 $\alpha_1, \beta_2, \alpha_2, \beta_3, \alpha_3, \dots$ が単調減少することがわかり, $\log x$ の導関数が $x \rightarrow \infty$ で 0 に収束することより, その数列は 0 に収束することもわかる. ゆえに上の交代和は $n \rightarrow \infty$ で収束する³². その収束先を a と書き, $c = 1 + a$ とおくと, $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\log n! = \frac{1}{2} \log n + \int_1^n \log x dx + a + o(1) = n \log n + \frac{1}{2} \log n - n + c + o(1).$$

$c = \log \sqrt{2\pi}$ であることを Wallis の公式 (第 8.4 節) を使って証明しよう. $n! = n^{n+1/2} e^{-n} e^c e^{o(1)}$ を Wallis の公式

$$\sqrt{\pi} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{2n} (n!)^2}{(2n)! \sqrt{n}}$$

に代入すると,

$$\sqrt{\pi} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{2n} n^{2n+1} e^{-2n} e^{2c}}{2^{2n+1/2} n^{2n+1} e^{-2n} e^c} = \frac{e^c}{\sqrt{2}}.$$

ゆえに $e^c = \sqrt{2\pi}$ である.

これで Wallis の公式を使えば, 対数版の易しい Stirling の公式を改良することによって, 通常の Stirling の公式 $n! \sim n^n e^{-n} \sqrt{2\pi n}$ が得られることがわかった.

5 付録: Fourier の反転公式

厳密な証明をするつもりはないが, Fourier の反転公式の証明の概略について説明しよう. 関数 $f(x)$ に対してその逆 Fourier 変換 $F(p)$ を

$$F(p) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx} f(x) dx$$

と定める. このとき関数 f について適切な条件を仮定しておく, それに応じた適切な意味で

$$f(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} F(p) dp$$

が成立する. これを Fourier の反転公式と呼ぶ.

5.1 Gauss 分布の場合

$a > 0$ であるとし,

$$f(x) = e^{-x^2/(2a)}$$

とおき, $F(p)$ はその逆 Fourier 変換であるとする. このとき

$$F(p) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx} e^{-x^2/(2a)} dx = e^{-p^2/(2a^{-1})} \sqrt{2a\pi}$$

³²0 以上の実数で構成された 0 に収束する単調減少列 a_n が定める交代級数 $\sum_{k=1}^{\infty} (-1)^{k-1} a_k$ は収束する. (絶対収束するとは限らない.)

が容易に得られる³³. この公式で x, a のそれぞれと p, a^{-1} の立場を交換することによって

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} e^{-p^2/(2a^{-1})} dp = e^{-x^2/(2a)} \sqrt{2a^{-1}\pi}$$

が得られる. 以上の2つの結果を合わせると,

$$f(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} F(p) dp$$

が得られる. すなわち $f(x) = e^{-x^2/(2a)}$ については Fourier の反転公式が成立している.

一般に $f(x)$ について Fourier の反転公式が成立していれば $f(x)$ を平行移動して得られる関数 $f(x - \mu)$ についても Fourier の反転公式が成立していることが容易に示される. 実際, $F(p)$ を $f(x)$ の逆 Fourier 変換とすると, $f(x - \mu)$ の逆 Fourier 変換は

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx} f(x - \mu) dx = \int_{-\infty}^{\infty} e^{ip(x'+\mu)} f(x') dx' = e^{ip\mu} F(p)$$

になり,

$$\frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} e^{ip\mu} F(p) dp = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ip(x-\mu)} F(p) dp = f(x - \mu).$$

以上によって, $f(x - \mu) = e^{-(x-\mu)^2/(2a)}$ についても Fourier の反転公式が成立することがわかった.

逆 Fourier 変換および Fourier 変換の線形性より, $f(x - \mu) = e^{-(x-\mu)^2/(2a)}$ の形の関数の線形和についても Fourier の反転公式が成立していることがわかる³⁴.

5.2 一般の場合

$a > 0$ に対して関数 $\rho_a(x)$ を

$$\rho_a(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi a}} e^{-x^2/(2a)}$$

と定める. これは $\rho_a(x) > 0$ と $\int_{-\infty}^{\infty} \rho_a(x) dx = 1$ を満たしている. そして前節の結果によって, $\rho_a(x - \mu)$ は Fourier の反転公式を満たしている.

関数 $f(x)$ に対して関数 $f_a(x)$ を ρ_a との畳み込み積によって関数 $f_a(x)$ を定める:

$$f_a(x) = \int_{-\infty}^{\infty} \rho_a(x - y) f(y) dy.$$

このとき $f_a(x)$ については Fourier の反転公式が成立している³⁵. 実際, $f_a(x)$ の逆 Fourier 変換 $F_a(p)$ と書くと,

$$F_a(p) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx} f_a(x) dx = \int_{-\infty}^{\infty} \left(\int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx} \rho_a(x - y) dx \right) f(y) dy$$

³³Cauchy の積分定理を使う方法, e^{ipx} の Taylor 展開を代入して項別積分する方法, 左辺と右辺が同じ微分方程式を満たしていることを使う方法など複数の方法で容易に計算可能である.

³⁴“任意の関数”はそのような線形和の“極限”で表わされる. したがって, Fourier の反転公式の証明の本質的部分はこれで終了しているとみなせる.

³⁵ $f_a(x)$ は Fourier の反転公式が成立している関数 $\rho_a(x - \mu)$ の重み $f(\mu)$ での重ね合わせなので, これはほとんど明らかである.

なので

$$\begin{aligned} \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} F_a(p) dp &= \int_{-\infty}^{\infty} \left(\frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} \left(\int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx'} \rho_a(x' - y) dx' \right) dp \right) f(y) dy \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \rho_a(x - y) f(y) dy = f_a(x). \end{aligned}$$

2つ目の等号で $\rho_a(x - \mu)$ について Fourier の反転公式が成立することを使った。さらに

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx} \rho_a(x - y) dx = e^{ipy} e^{-ap^2/2}$$

なので

$$F_a(p) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{ipy} e^{-ap^2/2} f(y) dy = e^{-ap^2/2} F(p)$$

となる³⁶。ゆえに

$$\frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} F_a(p) dp = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} e^{-ap^2/2} F(p) dp.$$

したがって

$$\frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} e^{-ap^2/2} F(p) dp = \int_{-\infty}^{\infty} \rho_a(x - y) f(y) dy = f_a(x).$$

もしも $F(p)$ が可積分ならば, Lebesgue の収束定理より, 左辺について

$$\lim_{a \rightarrow 0} \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} e^{-ap^2/2} F(p) dp = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} F(p) dp$$

が言える。あとは, 函数 $f(x)$ について適切な条件を仮定したとき, $a \rightarrow 0$ のとき函数 $f_a(x)$ が適切な意味で函数 $f(x)$ に収束することを示せば, $f(x)$ 自身が適切な意味で Fourier の反転公式を満たすことがわかる³⁷。

たとえば, f は有界かつ点 x で連続だと仮定する。ある $M > 0$ が存在して $|f(y) - f(x)| \leq M$ ($y \in \mathbb{R}$) となる。任意に $\varepsilon > 0$ を取る。ある $\delta > 0$ が存在して $|y - x| \leq \delta$ ならば $|f(y) - f(x)| \leq \varepsilon/2$ となる。函数 ρ_a の定義より, $a > 0$ を十分小さくすると $\int_{|y-x|>\delta} \rho_a(x - y) dy \leq \varepsilon/(2M)$ となることもわかる。以上の状況のもとで

$$\begin{aligned} |f_a(x) - f(x)| &= \left| \int_{-\infty}^{\infty} \rho_a(x - y) (f(y) - f(x)) dy \right| \\ &\leq \int_{-\infty}^{\infty} \rho_a(x - y) |f(y) - f(x)| dy \\ &\leq \int_{|y-x| \leq \delta} \rho_a(x - y) \frac{\varepsilon}{2} dy + \int_{|y-x| > \delta} \rho_a(x - y) M dy \\ &\leq \frac{\varepsilon}{2} + \frac{\varepsilon}{2M} M = \varepsilon. \end{aligned}$$

これで $\lim_{a \rightarrow 0} f_a(x) = f(x)$ が示された。

筆者は実解析一般については次の教科書をおすすめする。

³⁶これは畳み込み積の逆 Fourier 変換が逆 Fourier 変換の積に等しいことの特な場合にすぎない。

³⁷ $\rho_a(x)$ の $a \rightarrow 0$ での様子のグラフを描けば, $\rho_a(x)$ が Dirac のデルタ函数 (超函数) に“収束”しているように見えることから, これもほとんど明らかだと言える。

猪狩惺, 実解析入門, 岩波書店 (1996), xii+324 頁, 定価 3,800 円.

筆者は学生時代に猪狩惺先生の授業で Lebesgue 積分論や Fourier 解析について勉強した。信じられないほどクリアな講義であり, 数学の分野の中で実解析が最もクリアな分野なのではないかと思えて来るほどだった。上の教科書が 2016 年 5 月 3 日現在品切れ中であり, プレミア価格のついた中古本しか手に入らないことはとても残念なことである。

5.3 Riemann-Lebesgue の定理

$f(x)$ は \mathbb{R} 上の可積分関数³⁸ であるとする。このとき, その Fourier 変換 $\hat{f}(p) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} f(x) dx$ は連続関数になり, $|p| \rightarrow \infty$ で 0 に収束する。特に

$$\lim_{|p| \rightarrow \infty} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} f(x) dx = 0.$$

これは **Riemann-Lebesgue の定理** (リーマン・ルベグの定理) と呼ばれている。

$\hat{f}(p)$ の連続性は Lebesgue の収束定理³⁹ によって示される。実際, $|e^{ihx} - 1| |f(x)| \leq 2|f(x)|$ でかつ $|f(x)|$ は可積分なので,

$$|\hat{f}(x+h) - \hat{f}(x)| \leq \int_{\mathbb{R}} |e^{ihx} - 1| |f(x)| dx \rightarrow 0 \quad (h \rightarrow 0).$$

これで \hat{f} の連続性が示された。

Riemann-Lebesgue の定理の証明は可積分関数が階段関数列で L^1 近似されることからただちに得られる。区間 $I = [a, b]$ 上で 1 になり, その外で 0 になる関数を 1_I と書くと,

$$\hat{1}_I(p) = \int_a^b e^{-ipx} dx = \frac{e^{-ipb} - e^{-ipa}}{-ip}$$

なので, $\hat{1}_I(p) \rightarrow 0$ ($|p| \rightarrow \infty$)。一般の可積分関数に関する結果はこれよりしたがう。

³⁸ \mathbb{R} 上の可測関数で $\int_{\mathbb{R}} |f(x)| dx < \infty$ を満たすものを \mathbb{R} 上の可積分関数と呼ぶ。可測関数の定義を知らない人は以下のように考えてよい。区間 $I = [a, b]$ に対して I 上で 1 になり I の外で 0 になる関数を 1_I と書く。数 α_i と区間 I_i たちによって $\sum_{i=1}^n \alpha_i 1_{I_i}$ と表される関数は階段関数と呼ばれる。階段関数の全体は和とスカラー倍で閉じており, 自然にベクトル空間をなす。階段関数 $f = \sum_{i=1}^n \alpha_i 1_{I_i}$, $I_i = [a_i, b_i]$, $a_i < b_i$ の積分が $\int_{\mathbb{R}} f(x) dx = \sum_{i=1}^n \alpha_i (b_i - a_i)$ と定義することができる。階段関数列 $f_n(x)$ は $\int_{\mathbb{R}} |f_m(x) - f_n(x)| dx \rightarrow 0$ ($m, n \rightarrow \infty$) を満たし, ほとんどすべての $x \in \mathbb{R}$ について $f_n(x)$ は収束していると仮定する。(前者の仮定からほとんどいたる所収束する部分列を取れることを示せる。) このとき $f(x) = \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$ で関数 $f(x)$ が定まる(収束しない x における f の値は任意に決めておく)。このとき $|\int_{\mathbb{R}} f_m(x) dx - \int_{\mathbb{R}} f_n(x) dx| \leq \int_{\mathbb{R}} |f_m(x) - f_n(x)| dx \rightarrow 0$ ($m, n \rightarrow \infty$) なので $\int_{\mathbb{R}} f_n(x) dx$ は $n \rightarrow \infty$ で収束する。その収束先の値を $\int_{\mathbb{R}} f(x) dx$ と書く。このような関数 $f(x)$ を可積分関数と呼んでよい。さらにそのとき $|\int_{\mathbb{R}} |f_m(x)| dx - \int_{\mathbb{R}} |f_n(x)| dx| \leq \int_{\mathbb{R}} |f_m(x) - f_n(x)| dx \rightarrow 0$ ($m, n \rightarrow \infty$) でもあるので, $\int_{\mathbb{R}} |f_n(x)| dx$ は有限の値に収束し, $\int_{\mathbb{R}} |f(x)| dx < \infty$ も成立している。

³⁹Lebesgue の収束定理とは次の結果のことである。 f_n はほとんどいたる所 f に収束する可積分関数列であり, ある可積分関数 $\varphi \geq 0$ ですべての n について $|f_n| \leq \varphi$ を満たすものが存在するとき, f_n の収束先の f も可積分関数になり, 積分 $\int_{\mathbb{R}} f_n(x) dx$ は $n \rightarrow \infty$ で $\int_{\mathbb{R}} f(x) dx$ に収束する。この定理は非常に便利なので空気のごとく使われる。

5.4 Fourier 変換の部分和の収束

$N > 0$ とする.

\mathbb{R} 上の可積分関数 f の Fourier 変換 $\widehat{f}(p) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipy} f(y) dx$ に対して,

$$s_N(f)(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-N}^N e^{ipx} \widehat{f}(p) dp$$

を Fourier 変換の N 部分和と呼ぶ. N 部分和は次のように変形される:

$$\begin{aligned} s_N(f)(x) &= \int_{-\infty}^{\infty} \left(\frac{1}{2\pi} \int_{-N}^N e^{ip(x-y)} dp \right) f(y) dy \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{iN(x-y)} - e^{-iN(x-y)}}{2\pi i(x-y)} f(y) dy \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\sin(N(x-y))}{\pi(x-y)} f(y) dy. \\ &= \int_0^{\infty} \frac{\sin(Ny)}{\pi y} (f(x+y) + f(x-y)) dy \\ &= \frac{1}{\pi} \int_0^{\infty} \sin(Ny) \frac{f(x+y) + f(x-y)}{y} dy. \end{aligned}$$

4つ目の等号で y を $x+y$ でおきかえ, $\sin(Ny)/y$ が偶関数であることを使った.

$\delta > 0$ を任意に取る. $y \geq \delta$ で $(f(x+y) + f(x-y))/y$ は可積分である. ゆえに Riemann-Lebesgue の定理より,

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \int_{\delta}^{\infty} \sin(Ny) \frac{f(x+y) + f(x-y)}{y} dy = 0.$$

したがって N 部分和 $s_N(f)(x)$ が $N \rightarrow \infty$ で収束することと,

$$\frac{1}{\pi} \int_0^{\delta} \sin(Ny) \frac{f(x+y) + f(x-y)}{y} dy$$

が $N \rightarrow \infty$ で収束することは同値になり, それらが収束するときそれらの値は一致する. 以上の結果を **Riemann** の局所性定理と呼ぶ.

以上の結果を $f(x) = e^{-x^2/2}$ の場合に適用することによって **Dirichlet** 積分 (ディリクレ積分) の公式

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^R \frac{\sin x}{x} dx = \frac{\pi}{2}$$

を証明できる. $f(x) = e^{-x^2/2}$ とおく. このとき, 第 6 節での計算より, $\widehat{f}(p) = e^{-p^2/2} \sqrt{2\pi}$ であつ

$$\lim_{N \rightarrow \infty} s_N(f)(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{ipx} \widehat{f}(p) dp = f(x).$$

ゆえに, Riemann の局所性定理を $x = 0$ の場合に適用すると, 任意の $\delta > 0$ について

$$\lim_{N \rightarrow \infty} s_N(f)(0) = \lim_{N \rightarrow \infty} \frac{1}{\pi} \int_0^{\delta} \sin(Ny) \frac{2e^{-y^2/2}}{y} dy = e^{-0^2/2} = 1.$$

ゆえに

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \left(\int_0^\delta \frac{\sin(Ny)}{y} dy + \int_0^\delta \sin(Ny) \frac{e^{-y^2/2} - 1}{y} dy \right) = \frac{\pi}{2}.$$

左辺の后者の積分は Riemann-Lebesgue の定理より $N \rightarrow \infty$ で 0 に収束する. したがって

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \int_0^\delta \frac{\sin(Ny)}{y} dy = \frac{\pi}{2}.$$

さらに $y = x/N$ と積分変数を変換することによって,

$$\frac{\pi}{2} = \lim_{N \rightarrow \infty} \int_0^{N\delta} \frac{\sin x}{x} dx = \lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^R \frac{\sin x}{x} dx.$$

このように Dirichlet 積分の公式は Riemann の局所性定理と Riemann-Lebesgue の定理と $e^{-x^2/2}$ の Fourier 変換の計算から得られる⁴⁰.

Dirichlet 積分の公式で積分変数 x を $a > 0$ に対する ax で置換し, 両辺を ± 1 倍することによって

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^R \frac{\sin(\pm ax)}{x} dx = \pm \frac{\pi}{2} \quad (a > 0, \text{ 復号同順}).$$

すなわち次が成立している:

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \int_0^R \frac{\sin(ax)}{x} dx = \begin{cases} \pi/2 & (a > 0), \\ 0 & (a = 0), \\ -\pi/2 & (a < 0). \end{cases}$$

Dirichlet 積分の公式はこの形で使われることが多い.

\mathbb{R} 上の可積分関数 f と $x \in \mathbb{R}$ に対して, ある $\delta > 0$ が存在して

$$\frac{(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)}{y}$$

が $0 < y < \delta$ で可積分になるならば⁴¹, Fourier 変換の N 部分和の x における値は $f(x)$ に収束する:

$$\lim_{N \rightarrow \infty} s_N(f)(x) = f(x).$$

この事実は上で述べたことを合わせると容易に導かれる. Riemann の局所性定理より, 任意の $\delta > 0$ について, $N \rightarrow \infty$ のとき

$$s_N(f)(x) = \frac{1}{\pi} \int_0^\delta \sin(Ny) \frac{f(x+y) + f(x-y)}{y} dy + o(1).$$

Dirichlet 積分の公式の証明より, $N \rightarrow \infty$ のとき

$$f(x) = \lim_{N \rightarrow \infty} \frac{2}{\pi} \int_0^\delta \frac{\sin(Ny)}{y} dy f(x) = \frac{2}{\pi} \int_0^\delta \sin(Ny) \frac{f(x)}{y} dy + o(1).$$

⁴⁰複素解析を使った証明もある.

⁴¹この条件は **Dini** の条件と呼ばれている.

ゆえに

$$s_N(f)(x) - f(x) = \frac{2}{\pi} \int_0^\delta \sin(Ny) \frac{(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)}{y} dy + o(1).$$

もしも $[(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)]/y$ が $0 < y < \delta$ で可積分ならば Riemann-Lebesgue の定理より, 右辺は $N \rightarrow \infty$ で 0 に収束する. これを示すべきことが示された.

例 5.1. 可積分関数 f が点 x で微分可能ならば, 十分小さな $\delta > 0$ について, $[(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)]/y$ は $0 < y < \delta$ で有界になる. したがって f が微分可能な点 x において, $\lim_{N \rightarrow \infty} s_N(f)(x) = f(x)$ が成立する. \square

例 5.2. 可積分関数 f の値の点 x における左右からの極限

$$f(x-0) = \lim_{\varepsilon \searrow 0} f(x-\varepsilon), \quad f(x+0) = \lim_{\varepsilon \searrow 0} f(x+\varepsilon)$$

が存在し, $f(x) = (f(x+0) + f(x-0))/2$ であると仮定する. さらに点 x における左右の微係数

$$f'(x-0) = \lim_{\varepsilon \searrow 0} \frac{f(x-\varepsilon) - f(x-0)}{-\varepsilon}, \quad f'(x+0) = \lim_{\varepsilon \searrow 0} \frac{f(x+\varepsilon) - f(x+0)}{\varepsilon}$$

が存在すると仮定する. このとき, 十分小さな $\delta > 0$ について,

$$\frac{(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)}{y} = \frac{1}{2} \left[\frac{f(x+y) - f(x+0)}{y} - \frac{f(x-y) - f(x-0)}{-y} \right]$$

は $0 < y < \delta$ で有界になる. したがって

$$\lim_{N \rightarrow \infty} s_N(f)(x) = \lim_{N \rightarrow \infty} \frac{1}{2\pi} \int_{-N}^N e^{ipx} \widehat{f}(p) dp = f(x) = \frac{f(x+0) + f(x-0)}{2}$$

となる. \square

例 5.3. $a > 1$ に対して関数 $f_a(x)$ を次のように定める:

$$f_a(x) = \begin{cases} 1/(2a) & (-a < x < a), \\ 1/(4a) & (x = \pm a), \\ 0 & (x < -a \text{ または } a < x). \end{cases}$$

このとき

$$\widehat{f}_a(p) = \frac{1}{2a} \int_{-a}^a e^{-ipx} dx = \frac{e^{-iap} - e^{iap}}{-2iap} = \frac{\sin(ap)}{ap}.$$

これは偶関数である. ゆえに Fourier 変換の N 部分和は次のようになる:

$$\begin{aligned} s_N(f_a)(x) &= \frac{1}{2\pi} \int_{-N}^N e^{ixp} \frac{\sin(ap)}{ap} dp = \frac{2}{2\pi a} \int_0^N \cos(xp) \frac{\sin(ap)}{p} dp \\ &= \frac{1}{2\pi a} \int_0^N \frac{\sin((a+x)p) + \sin((a-x)p)}{p} dp \end{aligned}$$

この $N \rightarrow \infty$ での極限は2つの Dirichlet 積分の和の $2\pi a$ 分の1になる. 1つ目の Dirichlet 積分は $x > -a$ のとき $\pi/2$ になり, $x = -a$ のとき 0 になり, $x < -a$ のとき $-\pi/2$ になり, 2つ目の Dirichlet 積分は $x < a$ のとき $\pi/2$ になり, $x = a$ のとき 0 になり, $x > a$ のとき $-\pi/2$ になる. それらの和は $-a < x < a$ のとき π になり, $x = \pm a$ のとき $\pi/2$ になり, $x < -a$ または $a < x$ のとき 0 になる. ゆえに

$$\lim_{N \rightarrow \infty} s_N(f_a) = f_a(x)$$

となることがわかる. □

5.5 Fourier 級数の部分和の収束

以下, f は \mathbb{R} 上の周期 2π を持つ関数であり, $0 \leq x \leq 2\pi$ で可積分であると仮定する. このとき f の Fourier 係数 a_n ($n \in \mathbb{Z}$) が

$$a_n = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} e^{-iny} f(y) dy$$

と定義される. 正の整数 N に対して, 次を f の Fourier 級数の N 部分和と呼ぶ:

$$s_N(f)(x) = \sum_{n=-N}^N a_n e^{inx}.$$

N 部分和は次のように変形される:

$$\begin{aligned} s_N(f)(x) &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \left(\sum_{n=-N}^N e^{in(x-y)} \right) f(y) dy \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \frac{e^{i(N+1)(x-y)} - e^{-iN(x-y)}}{e^{i(x-y)} - 1} f(y) dy \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \frac{e^{i(N+1/2)(x-y)} - e^{-i(N+1/2)(x-y)}}{e^{i(x-y)/2} - e^{-i(x-y)/2}} f(y) dy \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \frac{\sin((N+1/2)(x-y))}{\sin((x-y)/2)} f(y) dy \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \frac{\sin((N+1/2)y)}{\sin(y/2)} f(x+y) dy \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^\pi \frac{\sin((N+1/2)y)}{\sin(y/2)} (f(x+y) + f(x-y)) dy \\ &= \frac{1}{\pi} \int_0^\pi \sin((N+1/2)y) \frac{y/2}{\sin(y/2)} \frac{f(x+y) + f(x-y)}{y} dy. \end{aligned}$$

5つ目の等号で y を $x+y$ で置き換え, $\sin(\alpha x)/\sin(\beta x)$ が偶関数であることを使い, さらに6つ目の等号で被積分関数の周期性を使った.

$\lim_{t \rightarrow 0} (t/\sin t) = 1$ に注意すれば, 第5.4節とまったく同様にして, N 部分和の収束に関する類似の結果が得られることがわかる.

Dirichlet 積分の公式の代わりに次の公式を使わなければいけない:

$$\frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \frac{\sin((N+1/2)y)}{\sin(y/2)} dy = s_N(1)(0) = 1.$$

さらに非積分函数の周期性と偶函数性より,

$$\frac{1}{\pi} \int_0^\pi \frac{\sin((N+1/2)y)}{\sin(y/2)} dy = 1.$$

$s_N(1)(0) = 1$ の証明は次の通り:

$$s_N(1)(0) = \sum_{n=-N}^N \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} e^{-iny} dy = \sum_{n=-N}^N \delta_{n0} = 1.$$

$e^{-i0y} = 1$ 以外の e^{-iny} の 0 から 2π までの積分が消えることを使った.

上の公式を使うと,

$$f(x) = \frac{1}{\pi} \int_0^\pi \frac{\sin((N+1/2)y)}{\sin(y/2)} dy f(x) = \frac{1}{\pi} \int_0^\pi \sin((N+1/2)y) \frac{y/2}{\sin(y/2)} \frac{2f(x)}{y} dy.$$

ゆえに上の $s_N(f)(x)$ の表示より,

$$s_N(f)(x) - f(x) = \frac{2}{\pi} \int_0^\pi \sin((N+1/2)y) \frac{y/2}{\sin(y/2)} \frac{(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)}{y} dy.$$

右辺の積分の被積分函数の $\sin((N+1/2)y)$ 以外の部分は $\delta \leq y < \pi$ で可積分なので Riemann-Lebesgue の定理より, $\delta > 0$ に対して,

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \int_\delta^\pi \sin((N+1/2)y) \frac{y/2}{\sin(y/2)} \frac{(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)}{y} dy = 0.$$

ゆえに, $N \rightarrow \infty$ のとき,

$$\begin{aligned} & s_N(f)(x) - f(x) \\ &= \frac{2}{\pi} \int_0^\delta \sin((N+1/2)y) \frac{y/2}{\sin(y/2)} \frac{(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)}{y} dy + o(1). \end{aligned}$$

ゆえに $0 < y < \delta$ で

$$\frac{(f(x+y) + f(x-y))/2 - f(x)}{y}$$

が可積分ならば $N \rightarrow \infty$ で $s_N(f)(x) - f(x)$ が 0 に収束し, $\lim_{N \rightarrow \infty} s_N(f)(x) = f(x)$ が成立することがわかる. この条件が成立するための簡単な十分条件の例も第 5.4 節と同様である.

6 付録: ガウス分布の Fourier 変換

$t > 0$ に対して次の公式が成立している:

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} \frac{e^{-x^2/(2t)}}{\sqrt{2\pi t}} dx = e^{-tp^2/2}. \quad (*)$$

この公式が成立していることを複数の方法で示そう.

6.1 熱方程式を使う方法

函数 $u = u(t, x)$ を次のように定める:

$$u(t, x) = \frac{e^{-x^2/(2t)}}{\sqrt{2\pi t}}.$$

この函数 $u = u(t, x)$ は熱方程式の基本解になっている:

$$u_t = \frac{1}{2}u_{xx}, \quad \lim_{t \rightarrow 0} \int_{-\infty}^{\infty} f(x)u(t, x) dx = f(0).$$

ここで $f(x)$ は有界な連続函数である. $u = u(t, x)$ が熱方程式を満たすことは偏微分の計算で容易に示される. 後者の極限の証明は実質的に第 5.2 節の終わりに書いてある.

ゆえに, $U(t, p) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx}u(t, x) dx$ とおくと,

$$\frac{\partial}{\partial t}U(t, p) = \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} \frac{\partial^2 u(t, x)}{\partial x^2} dx = \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\partial^2 e^{-ipx}}{\partial x^2} u(t, x) dx = -\frac{p^2}{2}U(t, p).$$

2つ目の等号で部分積分を 2 回行なった. さらに

$$\lim_{t \rightarrow 0} U(t, p) = \lim_{t \rightarrow 0} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx}u(t, x) dx = e^{-ip \cdot 0} = 1.$$

したがって

$$U(t, p) = e^{-tp^2/2}$$

となることがわかる. これで公式 (*) が示された.

6.2 両辺が同一の常微分方程式を満たしていることを使う方法

前節の記号をそのまま使うと,

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial p}U(t, p) &= \int_{-\infty}^{\infty} (-ix)e^{-ipx}u(t, x) dx = it \int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} \frac{\partial}{\partial x}u(t, x) dx \\ &= -it \int_{-\infty}^{\infty} \left(\frac{\partial}{\partial x}e^{-ipx} \right) u(t, x) dx = -it \int_{-\infty}^{\infty} (-ip)e^{-ipx}u(t, x) dx \\ &= -tpU(t, p). \end{aligned}$$

2つ目の等号で $u_x = -(x/t)u$ を使い, 3つ目の等号で部分積分を使った. さらに

$$U(t, 0) = \int_{-\infty}^{\infty} u(t, x) dx = 1$$

となる. これらより $U(t, p) = e^{-tp^2/2}$ となることがわかる. この方針であれば $u(t, x)$ が熱方程式の基本解であることを使わずにすむ.

6.3 項別積分で計算する方法

もしも $t = 1$ の場合の公式 (*)

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} \frac{e^{-x^2/2}}{\sqrt{2\pi}} dx = e^{-p^2/2} \quad (**)$$

が示されたならば, x, p をそれぞれ $x/\sqrt{t}, \sqrt{t}p$ で置換することによって一般の $t > 0$ に関する公式 (*) が得られる. ゆえに公式 (*) を示すためには公式 (**) を証明すれば十分である.

さらに $\sin(px)$ は奇関数なので $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} \sin(px) dx = 0$ となる. ゆえに

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} \cos(px) dx = e^{-p^2/2} \sqrt{2\pi}$$

を示せば十分である. 左辺の $\cos(px)$ にその Taylor-Maclaurin 展開を代入した後に項別積分することによってこの公式を示そう.

準備. まず $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^{2n} dx$ を計算しよう. 部分積分によって

$$\begin{aligned} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^{2n} dx &= \int_{-\infty}^{\infty} (-e^{-x^2/2})' x^{2n-1} dx \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} (x^{2n-1})' dx = (2n-1) \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^{2n-2} dx. \end{aligned}$$

ゆえに帰納的に $n = 0, 1, 2, \dots$ に対して

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^{2n} dx = (2n-1) \cdots 5 \cdot 3 \cdot 1 \sqrt{2\pi} = \frac{(2n)!}{2^n n!} \sqrt{2\pi}.$$

2つ目の等号は左辺の分子分母に $2n \cdots 4 \cdot 2 = 2^n n!$ をかけることによって得られる.

上で準備した結果を用いると,

$$\begin{aligned} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} \cos(px) dx &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n \frac{(px)^{2n}}{(2n)!} dx \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-p^2)^n}{(2n)!} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} x^{2n} dx = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-p^2/2)^n}{n!} \sqrt{2\pi} = e^{-p^2/2} \sqrt{2\pi}. \end{aligned}$$

これで公式 (**) が示された.

6.4 Cauchy の積分定理を使う方法

複素解析を知っている人であれば詳しい説明は必要ないと思うので, 以下の説明では大幅に手抜きをする. Cauchy の積分定理を使うと実数 p に対して

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x+ip)^2/2} dx = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2/2} dx = \sqrt{2\pi}$$

となることを示せる. ゆえに

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{-ipx} e^{-x^2/2} dx = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x+ip)^2/2 - p^2/2} dx = e^{-p^2/2} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x+ip)^2/2} dx = e^{-p^2/2} \sqrt{2\pi}.$$

これで公式 (**) が示された.

7 付録: Gauss 積分の計算

次の公式の様々な証明の仕方を解説しよう:

$$I := \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} dx = \sqrt{\pi}.$$

この公式の面白いところ (不思議なところ) は円周率の気配が見えない積分の値が円周率の平方根になっていることである. 実際の証明では

$$I^2 = \iint_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx dy = \pi$$

を示すことになる.

7.1 同一の体積の 2 通りの積分表示を用いた計算

$I^2 = \iint_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx dy$ は $z = e^{-(x^2+y^2)}$ の小山状のグラフと平面 $z = 0$ に挟まれた部分の体積を表わしている. その体積は高さ z の断面の面積⁴² $\pi(-\log z)$ を $0 < z \leq 1$ で積分することによっても求められる. ゆえに

$$I^2 = \int_0^1 \pi(-\log z) dz = -\pi[z \log z - z]_0^1 = \pi.$$

おそらくこの方法が最も簡明である.

7.2 極座標変換による計算

$x = r \cos \theta$, $y = r \sin \theta$ と極座標変換すると,

$$I^2 = \iint_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx dy = \int_0^{2\pi} d\theta \int_0^{\infty} e^{-r^2} r dr = 2\pi \left[\frac{e^{-r^2}}{-2} \right]_0^{\infty} = \pi.$$

2つ目の等号で極座標変換の Jacobian が r になることを使った. もしくは

$$dx \wedge dy = (\cos \theta dr - r \sin \theta d\theta) \wedge (\sin \theta dr + r \cos \theta d\theta) = r dr \wedge d\theta$$

なので, $K = \{(r, \theta) \mid r > 0, 0 \leq \theta < 2\pi\}$ とおくと,

$$I^2 = \iint_{\mathbb{R}^2} e^{-(x^2+y^2)} dx \wedge dy = \iint_K e^{-r^2} r dr \wedge d\theta = \int_0^{2\pi} d\theta \int_0^{\infty} e^{-r^2} r dr = \pi.$$

⁴² $z = e^{-(x^2+y^2)}$, $r^2 = x^2 + y^2$ とおくと, $\pi r^2 = \pi(-\log z)$ となる.

7.3 Jacobian を使わずにすむ座標変換による計算

y から θ に $y = x \tan \theta$ によって積分変数を変換すると,

$$\begin{aligned} I^2 &= 4 \int_0^\infty \left(\int_0^\infty e^{-(x^2+y^2)} dy \right) dx = 4 \int_0^\infty \left(\int_0^{\pi/2} e^{-x^2 \cos^2 \theta} x \cos^2 \theta d\theta \right) dx \\ &= 4 \int_0^{\pi/2} \left(\int_0^\infty e^{-x^2 \cos^2 \theta} x \cos^2 \theta dx \right) d\theta = 4 \int_0^{\pi/2} \left[\frac{e^{-x^2 \cos^2 \theta}}{-2} \right]_{x=0}^{x=\infty} d\theta \\ &= 4 \int_0^{\pi/2} \frac{1}{2} d\theta = \pi. \end{aligned}$$

3つ目の等号で積分の順序交換を行なった.

7.4 ガンマ函数とベータ函数の關係を用いた計算

前節では Jacobian が出て来ない 1 変数の積分の置換積分のみを用いて Gauss 積分を計算する方法を説明した. それと似たような方法によって, ガンマ函数とベータ函数の關係式を 1 変数の積分の置換積分のみを用いて証明することができて, その關係式の特別な場合として Gauss 積分の値を計算することもできる. この節の内容は前節の内容の一般化であると考えられる. 統計学でよく使われる確率密度函数の記述にはガンマ函数やベータ函数を与える積分の被積分函数が現われる (第 9 節). だから, 統計学に興味がある読者は Gauss 積分の計算の一般化としてガンマ函数とベータ函数についても学んでおいた方が効率が良いとも考えられる.

$s, p, q > 0$ (もしくは実部が正の複素数 s, p, q) に対して,

$$\Gamma(s) = \int_0^\infty e^{-x} x^{s-1} dx \quad B(p, q) = \int_0^1 x^{p-1} (1-x)^{q-1} dx$$

によってガンマ函数 $\Gamma(s)$ とベータ函数 $B(p, q)$ が定義される⁴³.

部分積分によって $\Gamma(s+1) = s\Gamma(s)$ であることがわかり, $\Gamma(1) = 1$ なので, 0 以上の整数 n に対して $\Gamma(n+1) = n!$ となる.

Gauss 積分 I は $\Gamma(1/2)$ に等しい:

$$I = 2 \int_0^\infty e^{-x^2} dx = 2 \int_0^\infty e^{-t} \frac{t^{-1/2}}{2} dt = \int_0^\infty e^{-t} t^{1/2-1} dt = \Gamma(1/2).$$

2つ目の等号で $x = \sqrt{t}$ とおいた. したがって $\Gamma(1/2)^2 = \pi$ を証明できれば Gauss 積分が計算できたことになる.

ベータ函数は以下のような複数の表示を持つ:

$$B(p, q) = 2 \int_0^{\pi/2} \cos^{2p-1} \theta \sin^{2q-1} \theta d\theta = \int_0^\infty \frac{t^{p-1} dt}{(1+t)^{p+q}} = \frac{1}{p} \int_0^\infty \frac{du}{(1+u^{1/p})^{p+q}}.$$

$x = \cos^2 \theta = t/(1+t)$, $t = u^{1/p}$ と変数変換した. 3つ目の (最後の) 表示の $p = 1/2$ の場合の被積分函数が t 分布の確率密度函数の表示で使用され, 2つ目の表示の被積分函数は F

⁴³他にもたくさんの同値な定義の仕方がある. 以下では解析接続については扱わない.

分布の確率密度関数の表示で使用される. $\Gamma(1/2)$ の Gauss 積分による表示の被積分関数は正規分布の確率密度関数の表示で使用され, ガンマ関数の定義式の被積分関数は χ^2 分布の被積分関数の表示で使用される. このようにガンマ関数とベータ関数は実用的によく利用される確率分布を理解するためには必須の教養になっている (第 9 節).

特に最初の表示より $B(1/2, 1/2) = \pi$ となることがわかる. ゆえに, もしも

$$\Gamma(p)\Gamma(q) = \Gamma(p+q)B(p, q)$$

が示されたならば, $\Gamma(1/2)^2 = B(1/2, 1/2) = \pi$ となることがわかる. したがって Gauss 積分の計算はガンマ関数とベータ関数のあいだの関係式を示すことに帰着される.

ガンマ関数とベータ関数のあいだの関係式は 1 変数の置換積分と積分順序の交換のみを使って証明可能である. 以下でそのことを簡単に説明しよう. 条件 A に対して, x, y が A をみたすとき値が 1 になり, それ以外のときに値が 0 になる x, y の関数を $1_A(x, y)$ と書くことにすると,

$$\begin{aligned} \Gamma(p)\Gamma(q) &= \int_0^\infty \left(\int_0^\infty e^{-(x+y)} x^{p-1} y^{q-1} dy \right) dx \\ &= \int_0^\infty \left(\int_x^\infty e^{-z} x^{p-1} (z-x)^{q-1} dz \right) dx \\ &= \int_0^\infty \left(\int_0^\infty 1_{x < z}(x, z) e^{-z} x^{p-1} (z-x)^{q-1} dz \right) dx \\ &= \int_0^\infty \left(\int_0^\infty 1_{x < z}(x, z) e^{-z} x^{p-1} (z-x)^{q-1} dx \right) dz \\ &= \int_0^\infty \left(\int_0^z e^{-z} x^{p-1} (z-x)^{q-1} dx \right) dz \\ &= \int_0^\infty \left(\int_0^1 e^{-z} (zt)^{p-1} (z-zt)^{q-1} z dt \right) dz \\ &= \int_0^\infty e^{-z} z^{p+q-1} dz \int_0^1 t^{p-1} (1-t)^{q-1} dt = \Gamma(p+q)B(p, q). \end{aligned}$$

2 つ目の等号で $y = z - x$ と置換積分し, 4 つ目の等号で積分の順序を交換し, 6 つ目の等号で $x = zt$ と置換積分した.

7.5 他の方

他の方については [Hirokazu Iwasawa, Gaussian Integral Puzzles, The Mathematical Intelligencer, Vol. 31, No. 3, 2009, pp. 38-41](#) および [Steven R. Dunbar, Evaluation of the Gaussian Density Integral, October 22, 2011](#) を参照して欲しい.

8 付録: ガンマ関数

第 7.4 節でガンマ関数について簡単に解説した. 以下ではそこでは解説できなかったガンマ関数の性質について説明しよう.

8.1 ガンマ関数と正弦関数の関係式

第7.4節で示した $\Gamma(1/2)^2 = B(1/2, 1/2) = \pi$ は次の有名な公式の特別な場合である:

$$\Gamma(s)\Gamma(1-s) = B(s, 1-s) = \frac{\pi}{\sin(\pi s)}.$$

この公式にも複数の証明法がある. 1つ目の方法は $\sin z$ と $\Gamma(s)$ の無限乗積展開

$$\sin z = z \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{z^2}{\pi^2 n^2}\right), \quad i.e. \quad \frac{\sin(\pi s)}{\pi} = s \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{s^2}{n^2}\right),$$

$$\frac{1}{\Gamma(s)} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{s(s+1) \cdots (s+n)}{n! n^s} = e^{\gamma s} \prod_{n=1}^{\infty} \left[\left(1 + \frac{s}{n}\right) e^{-s/n}\right]$$

を使う方法である⁴⁴. ここで γ は Euler 定数

$$\gamma = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{1}{1} + \frac{1}{2} + \cdots + \frac{1}{n} - \log n\right)$$

である. これらの公式を認めると,

$$\frac{1}{\Gamma(s)\Gamma(1-s)} = \frac{1}{\Gamma(s)(-s)\Gamma(-s)} = \frac{s(-s)}{-s} \prod_{n=1}^{\infty} \left[\left(1 + \frac{s}{n}\right) \left(1 - \frac{s}{n}\right)\right] = \frac{\sin(\pi s)}{\pi}.$$

2つ目の方法は次の定積分を複素解析を用いて計算することである:

$$\Gamma(s)\Gamma(1-s) = B(s, 1-s) = \int_0^{\infty} \frac{t^{s-1}}{1+t} dt.$$

$0 < s < 1$ であると仮定し, $0 < \varepsilon < 1 < R$ に対して定まる次の積分経路を C と書く: まず ε から R までまっすぐ進む. 次に複素平面上の原点を中心とする半径 R の円周上を反時計回りで1周する. そして R から ε までまっすぐ進む. 最後に複素平面上の原点を中心とする半径 ε の円周上を時計回りで1周する. このとき $\int_C z^{s-1} dz/(1+z)$ は $z^{s-1} dz/(1+z)$ の $z = -1$ での留数の $2\pi i$ 倍に等しい:

$$\int_C \frac{z^{s-1} dz}{1+z} = -2\pi i e^{\pi i s}.$$

$\varepsilon \rightarrow 0, R \rightarrow \infty$ の極限を考えることによって $\int_C z^{s-1} dz/(1+z)$ は $\int_0^{\infty} t^{s-1} dt/(1+t)$ からそれ自身の $e^{2\pi i s}$ 倍⁴⁵ を引いた結果に等しいこともわかる:

$$\int_C \frac{z^{s-1} dz}{1+z} = (1 - e^{2\pi i s}) \int_0^{\infty} \frac{t^{s-1} dt}{1+t}.$$

以上の2つの結果を比較することによって

$$B(s, 1-s) = \int_0^{\infty} \frac{t^{s-1} dt}{1+t} = \frac{-2\pi i e^{\pi i s}}{1 - e^{2\pi i s}} = \frac{2\pi i}{e^{\pi i s} - e^{-\pi i s}} = \frac{\pi}{\sin(\pi s)}.$$

⁴⁴ $\Gamma(s)\Gamma(1-s) = \pi/\sin(\pi s)$ を先に証明しておいて (たとえば複素解析を使えば容易に示せる), ガンマ関数の無限乗積展開から $\sin z$ の無限乗積展開を導出することもできる.

⁴⁵ z^s の値は原点の周囲を反時計回りに1周すると $e^{2\pi i s}$ 倍になる.

この積分は $t = u^{1/s}$ とおくことによつて $s^{-1} \int_0^\infty du/(1+u^{1/s})$ に変形できる. ゆえに, 次の公式も得られたことになる:

$$B(1+s, 1-s) = sB(s, 1-s) = \int_0^\infty \frac{du}{1+u^{1/s}} = \frac{\pi s}{\sin(\pi s)}.$$

この公式を直接示すこともできる. $R > 1$ であるとし, 複素平面上を原点から R までまっすぐ進み, 次に時計回りに角度 $2\pi s$ だけ回転して $Re^{2\pi is}$ まで進み, そこから原点までまっすぐに戻る経路を C と書くと, $\int_C dz/(1+z^{1/s})$ は $dz/(1+z^{1/s})$ の $z = e^{\pi is}$ における留数 $-se^{\pi is}$ の $2\pi i$ 倍に等しく, $R \rightarrow \infty$ の極限で $\int_C dz/(1+z^{1/s})$ は $\int_0^\infty du/(1+u^{1/s})$ からそれ自身の $e^{2\pi is}$ 倍を引いたものに等しい⁴⁶. ゆえに

$$\int_0^\infty \frac{du}{1+u^{1/s}} = \frac{-2\pi is e^{\pi is}}{1 - e^{2\pi is}} = \frac{2\pi is}{e^{\pi is} - e^{-\pi is}} = \frac{\pi s}{\sin(\pi s)}.$$

定積分を計算した結果に円周率倍がよく現われるのは極の周囲を1周する積分が留数の $2\pi i$ 倍になるからである.

複素解析と初等函数とガンマ函数の解説については, [高木貞治『解析概論』\(岩波書店\)](#) の第5章(201-267頁)をおすすめする. 複素函数論の一般論だけではなく, 具体的な函数の性質の詳しい解説も含めて67頁におさまっているのは驚異的だと思う.

8.2 ガンマ函数の無限乗積展開

函数 $f(s)$ ($s > 0$) は以下の3つの条件を満たしていると仮定する:

- 正値性: $f(s) > 0$ ($s > 0$),
- 函数等式: $f(s+1) = sf(s)$ ($s > 0$),
- 対数凸性: $\log f(s)$ は $s > 0$ の下に凸な函数である.

この3つの条件を満たす函数は次の表示を持つ:

$$f(s) = f(1) \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n! n^s}{s(s+1)\cdots(s+n)} \quad (s > 0). \quad (*)$$

特に $\Gamma(s)$ が上の3つの条件と $\Gamma(1) = 1$ を満たしていることから, **Gauss** の公式

$$\Gamma(s) = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n! n^s}{s(s+1)\cdots(s+n)}$$

が成立しており, 上の3つの条件を満たしている函数は $\Gamma(s)$ の定数倍になることもわかる. 以上で述べたことを証明しよう.

まず, (*) の極限の分子分母をひっくり返して得られる極限

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{s(s+1)\cdots(s+n)}{n! n^s}$$

⁴⁶ $z^{1/s}$ は z を $e^{2\pi is}$ 倍しても不変だが, dz は $e^{2\pi is}$ 倍になる.

が常に収束することを示そう.

$$\begin{aligned} & \frac{s(s+1)\cdots(s+n)}{n!n^s} \\ &= s \left(1 + \frac{s}{1}\right) \left(1 + \frac{s}{2}\right) \cdots \left(1 + \frac{s}{n}\right) e^{-s \log n} \\ &= s \left(1 + \frac{s}{1}\right) e^{-s} \left(1 + \frac{s}{2}\right) e^{-\frac{s}{2}} \cdots \left(1 + \frac{s}{n}\right) e^{-\frac{s}{n}} e^{s(1+\frac{1}{2}+\cdots+\frac{1}{n}-\log n)} \end{aligned}$$

$1 + \frac{1}{2} + \cdots + \frac{1}{n} - \log n$ は $n \rightarrow \infty$ で Euler 定数 γ に収束する⁴⁷. ゆえに $\prod_{k=1}^n (1 + s/k) e^{-s/k}$ が $n \rightarrow \infty$ で収束することを示せばよい. z の複素正則関数 $(1+z)e^{-z} - 1$ は原点 $z=0$ で2位の零点を持つので, $(1+z)e^{-z} = 1 + O(z^2)$ ($z \rightarrow 0$) となる. ゆえに $(1+s/k)e^{-s/k} = 1 + O(s^2/k^2)$ ($k \rightarrow \infty$). これより無限積 $\prod_{k=1}^{\infty} (1 + s/k) e^{-s/k}$ が収束することがわかる. まとめ:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{s(s+1)\cdots(s+n)}{n!n^s} = e^{\gamma s} s \prod_{n=1}^{\infty} \left[\left(1 + \frac{s}{n}\right) e^{-s/n} \right]$$

は常に収束する⁴⁸. 右辺の無限積が $1/\Gamma(s)$ に等しいという公式を **Weierstrass** の公式と呼ぶことがある.

この極限の逆数を $F(s)$ と書くと,

$$F(s+1) = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{ns}{s+1+n} \frac{n!n^s}{s(s+1)\cdots(s+n)} = sF(s), \quad F(1) = \frac{n!n}{(n+1)!} = 1.$$

ゆえに目標である(*)の公式 $f(s) = f(1)F(s)$ ($s > 0$) を示すためには, $0 < s < 1$ のとき $f(s) = f(1)F(s)$ となることを示せば十分である.

次に, $f(s)$ の正值性と対数凸性を用いて, 2以上の整数 n と $0 < s < 1$ について, $f(n+s)$ の大きさを $f(n-1), f(n), f(n+1)$ を用いて上下から評価する不等式

$$\left(\frac{f(n)}{f(n-1)} \right)^s f(n) \leq f(n+s) \leq \left(\frac{f(n+1)}{f(n)} \right)^s f(n) \quad (0 < s < 1) \quad (\#)$$

を示そう. 一般に下に凸な関数 $g(s)$ は $a < b < c$ に対して

$$\frac{g(b) - g(a)}{b - a} \leq \frac{g(c) - g(a)}{c - a} \leq \frac{g(c) - g(b)}{c - b}$$

を満たしている⁴⁹. これの左半分を $g(s) = \log f(s)$, $(a, b, c) = (n, n+s, n+1)$ に適用すると,

$$\frac{\log f(n+s) - \log f(n)}{s} \leq \log f(n) - \log f(n+1).$$

右半分を $(a, b, c) = (n-1, n, n+s)$ に適用すると,

$$\log f(n) - \log f(n-1) \leq \frac{\log f(n+s) - \log f(n)}{s}.$$

⁴⁷ $1/x$ は単調減少関数なので, $1 + 1/2 + \cdots + 1/n - \log n \geq \int_1^{n+1} dx/x - \log n = \log(n+1) - \log n \geq 0$ かつ $1/(n+1) \leq \int_n^{n+1} dx/x = \log(n+1) - \log n$ なので, $1 + 1/2 + \cdots + 1/n - \log n$ は有界かつ単調減少する. ゆえに収束する.

⁴⁸この極限を $1/\Gamma(s)$ の定義とすることもできる. この方法であれば最初から $1/\Gamma(s)$ が複素平面全体で定義されており, $\Gamma(s)$ の極が $s=0, -1, -2, \dots$ のみにあることも自明になる.

⁴⁹図を描けば直観的に明らかだろう.

以上の2つの不等式を整理し直すと $f(n+s)$ の評価 (#) が得られる。

$f(n+s)$ の評価 (#) に f の函数等式を適用しよう. f の函数等式より

$$\frac{f(n+1)}{f(n)} = n, \quad f(s+n) = (s+n-1)\cdots(s+1)sf(s), \quad f(n) = (n-1)!f(1)$$

などが成立している. (#) の左半分で n を $n+1$ に置き換えると,

$$n^s n! f(1) \leq (n+s)(n-1+s)\cdots sf(s), \quad \therefore \frac{f(0)n!n^s}{s(s+1)\cdots(s+n)} \leq f(s).$$

(#) の右半分より,

$$f(s) \leq \frac{f(1)(n-1)!n^s}{s(s+1)\cdots(s+n-1)} = \frac{n+s}{n} \frac{f(1)n!n^s}{s(s+1)\cdots(s+n)}.$$

以上をまとめると

$$\frac{f(1)n!n^s}{s(s+1)\cdots(s+n)} \leq f(s) \leq \frac{n+s}{n} \frac{f(1)n!n^s}{s(s+1)\cdots(s+n)}.$$

これより, 示したかった (*) が得られる.

ガンマ函数が3つの条件 (正値性, 函数等式, 対数凸性) を満たしていることを証明しよう. 正値性は定義 $\Gamma(s) = \int_0^\infty e^{-x} x^{s-1} dx$ より明らかであり, 函数等式は部分積分によって容易に証明される. 対数凸性を示すためには $g(s) = \log \Gamma(s)$ とおくととき, $g''(s) \geq 0$ を示せば十分である. より一般に次のように定義される函数 $f(s)$ に対して $g(s) = \log f(s)$ とおくと $g''(s) \geq 0$ となることを示そう:

$$f(s) = \int_a^b e^{s\phi(x)+\psi(x)} dx.$$

ここで $\phi(x), \psi(x)$ は実数値函数であり, s に関する積分記号化の微分が可能だと仮定しておく. $(a, b) = (0, \infty)$, $\phi(x) = \log x$, $\psi(x) = -x - \log x$ のとき $f(s) = \Gamma(s)$ となる⁵⁰. このとき, $g(s) = \log f(s)$ とおくと

$$g'' = \frac{d}{ds} \frac{f'}{f} = \frac{ff'' - f'^2}{f^2}.$$

ゆえに $ff'' - f'^2 \leq 0$ を示せばよい. $f(s)$ の定義より,

$$\begin{aligned} f(s)\lambda^2 + 2f'(s)\lambda + f''(s) &= \int_a^b e^{s\phi(x)+\psi(x)} (\lambda^2 + 2\phi(x)\lambda + \phi(x)^2) dx \\ &= \int_a^b e^{s\phi(x)+\psi(x)} (\lambda + \phi(x))^2 dx \geq 0. \end{aligned}$$

ゆえに $ff'' - f'^2 \leq 0$ となる. 特に $\Gamma(s)$ も対数凸である.

これでガンマ函数の Gauss の公式と無限乗積展開も証明されたことになる.

⁵⁰ $(a, b) = (0, 1)$, $\psi(x) = \log x$, $\phi(x) = t \log(1-x)$ のとき $f(s) = B(s, t)$ となる. $B(s, t)$ も s の函数として対数凸になる. ゆえに $F(s) = \Gamma(s+t)B(s, t)$ も s の函数として対数凸になる. $F(s+1) = sF(s)$, $F(1) = \Gamma(t)$ なので $F(s) = \Gamma(s)\Gamma(t)$ であることがわかる. このようにガンマ函数の特徴付けによってガンマ函数とベータ函数の関係式を証明することもできる.

補足. 以上で説明したガンマ関数に関する Gauss の公式の証明はガンマ関数そのものではなく、正值対数凸でガンマ関数と同じ函数等式を満たす函数に対して証明されたのであった. 積分で定義されたガンマ関数に関する Gauss の公式を以下のようにして直接的に証明することもできる. 函数 $n^s B(s, n+1)$ について,

$$n^s B(s, n+1) = \frac{n^s \Gamma(s) \Gamma(n+1)}{\Gamma(s+n+1)} = \frac{n^s n!}{s(s+1) \cdots (s+n)}$$

でかつ

$$n^s B(s, n+1) = n^s \int_0^1 x^{s-1} (1-x)^n dx = \int_0^n t^{s-1} \left(1 - \frac{t}{n}\right)^n dt$$

2つ目の等号で $x = t/n$ とおいた. ゆえに, $n \rightarrow \infty$ のとき,

$$\frac{n^s n!}{s(s+1) \cdots (s+n)} = \int_0^n t^{s-1} \left(1 - \frac{t}{n}\right)^n dt \rightarrow \int_0^\infty t^{s-1} e^{-t} dt = \Gamma(s).$$

最後のステップを別の方法で証明することもできる. 評価 (#) を $f(s) = \Gamma(s)$ の場合に適用すると, $0 < s < 1$ のとき

$$\Gamma(s+n+1) \sim n^s \Gamma(n+1) \quad (n \rightarrow \infty).$$

ガンマ関数の函数等式より, これは任意の $s > 0$ で成立している. ゆえに

$$\frac{n^s n!}{s(s+1) \cdots (s+n)} = \frac{n^s \Gamma(s) \Gamma(n+1)}{\Gamma(s+n+1)} \rightarrow \Gamma(s) \quad (n \rightarrow \infty).$$

このように, ガンマ関数の正值性, 対数凸性, 函数等式による特徴付けを経由せずに, 直接的にガンマ関数に関する Gauss の公式を (したがって無限乗積展開も) 得ることは易しい. 以上によって次の公式も証明されたことになる:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} n^s B(s, n+1) = \Gamma(s).$$

まとめ:

$$\Gamma(s) = \lim_{n \rightarrow \infty} n^s B(s, n+1) = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n^s n!}{s(s+1) \cdots (s+n)} = \frac{1}{e^{\gamma s} s} \prod_{n=1}^{\infty} \left[\left(1 + \frac{s}{n}\right) e^{-s/n} \right]^{-1}.$$

ここで γ は Euler 定数である.

8.3 正弦関数の無限乗積展開

ガンマ関数の無限乗積展開の応用として $\sin z$ の無限乗積展開を証明しよう. 積分の順序交換を用いて証明されるガンマ関数とベータ関数の関係と複素解析を用いて証明されるベータ関数と正弦関数の関係より

$$\Gamma(s) \Gamma(1-s) = B(s, 1-s) = \frac{\pi}{\sin(\pi s)}.$$

一方, ガンマ関数の無限乗積展開より,

$$\frac{1}{\Gamma(s) \Gamma(1-s)} = \frac{1}{\Gamma(s) (-s) \Gamma(-s)} = s \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{s^2}{n^2}\right).$$

以上を比較すると,

$$\sin(\pi s) = \pi s \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{s^2}{n^2}\right), \quad \therefore \sin z = z \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{z^2}{\pi^2 n^2}\right).$$

このように, $\sin(\pi s) = \pi/(\Gamma(s)(-s)\Gamma(-s))$ なのでガンマ函数の無限乗積展開⁵¹から正弦函数の無限乗積展開が得られるのである.

正弦函数の無限乗積展開を直接示すためには, $\sin z$ の対数微分 $\cot z$ の部分分数展開

$$\cot z = \frac{1}{z} + \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{1}{z - n\pi} + \frac{1}{z + n\pi} \right)$$

を複素解析を用いて証明し, 項別に積分すればよい. 詳しくは高木貞治『解析概論』の235頁を見よ.

以下では, 複素解析ではなく, Fourier 級数の理論を使って正弦函数の無限乗積展開を得る方法を紹介しておこう⁵².

まず x の函数 $\cos(tx)$ の $-\pi \leq x \leq \pi$ での値の Fourier 級数展開を求め, そこから $\cot(\pi t)$ の部分分数展開が得られることを示そう⁵³. e^{itx} の Fourier 係数は

$$\begin{aligned} a_n &= \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} e^{-inx} e^{itx} dx = \frac{1}{2\pi} \left[\frac{e^{-inx} e^{itx}}{i(t-n)} \right]_{x=-\pi}^{x=\pi} \\ &= \frac{(-1)^n (e^{i\pi t} - e^{-i\pi t})}{2\pi i(t-n)} = (-1)^n \frac{\sin(\pi t)}{\pi} \frac{1}{t-n} \end{aligned}$$

なので, e^{itx} の Fourier 級数展開は

$$\begin{aligned} e^{itx} &= \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=-N}^N a_n e^{inx} = \frac{\sin(\pi t)}{\pi} \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=-N}^N \frac{(-1)^n e^{inx}}{t-n} \\ &= \frac{\sin(\pi t)}{\pi} \left[\frac{1}{t} + \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^n \left(\frac{e^{inx}}{t-n} + \frac{e^{-inx}}{t+n} \right) \right] \\ &= \frac{\sin(\pi t)}{\pi} \left[\frac{1}{t} + \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^n \left(\frac{2t \cos(nx)}{t^2 - n^2} + i \frac{2n \sin(nx)}{t^2 - n^2} \right) \right] \end{aligned}$$

になる. ゆえに $\cos(tx)$ の Fourier 級数展開は

$$\cos(tx) = \frac{\sin(\pi t)}{\pi} \left[\frac{1}{t} + \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^n \frac{2t \cos(nx)}{t^2 - n^2} \right]$$

になる. したがって,

$$\pi \cot(tx) = \frac{\pi \cos(\pi t)}{\sin(\pi t)} = \frac{1}{t} + \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^n \frac{2t \cos(nx)}{t^2 - n^2}$$

⁵¹直接証明すれば易しい.

⁵²以下では厳密な議論はしないが, Fourier 級数の収束については第 5.5 節を参照せよ.

⁵³ x の偶函数 $\cos(tx)$ の $-\pi \leq x \leq \pi$ での値を周期 2π で \mathbb{R} 全体に拡張して得られる連続周期函数 $f_t(x)$ の Fourier 級数を考える. $\cos(tx)$ の $0 \leq x < 2\pi$ での値を周期 2π で拡張するのではないことに注意せよ.

両辺の $x \rightarrow \pi$ での極限を取ることによって,

$$\pi \cot(\pi t) = \frac{1}{t} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{2t}{t^2 - n^2} = \frac{1}{t} + \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{1}{t-n} + \frac{1}{t+n} \right)$$

を得る⁵⁴. $\sin(\pi t)$ の対数微分は $\pi \cot(\pi t)$ に等しいので,

$$\frac{d}{dt} \log \frac{\sin(\pi t)}{\pi t} = \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{1}{t-n} + \frac{1}{t+n} \right) = \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{-1/n}{1-t/n} + \frac{1/n}{1+t/n} \right).$$

両辺を $t=0$ から $t=s$ まで積分すると,

$$\log \frac{\sin(\pi s)}{\pi s} = \sum_{n=1}^{\infty} \left(\log \left(1 - \frac{s}{n} \right) + \log \left(1 + \frac{s}{n} \right) \right) = \log \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{s^2}{n^2} \right)$$

したがって, 次が得られる⁵⁵

$$\sin(\pi s) = \pi s \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{s^2}{n^2} \right).$$

\sin の無限乗積展開とガンマ函数の無限乗積展開の公式を認めて使うことを許せば, $1/(\Gamma(s)\Gamma(1-s))$ と $\sin(\pi s)$ を比較することによって

$$\Gamma(s)\Gamma(1-s) = \frac{\pi}{\sin(\pi s)}$$

を示せる. さらに $\Gamma(p)\Gamma(q) = \Gamma(p+q)B(p,q)$ を 1 変数の積分の置換積分と積分の順序交換のみを用いて容易に証明できることを使えば, 次の公式も得られる:

$$\frac{\pi}{\sin(\pi s)} = B(s, 1-s) = \int_0^1 x^s(1-x)^{1-s} dx = \int_0^{\infty} \frac{t^{s-1} dt}{1+t} = \frac{1}{s} \int_0^{\infty} \frac{du}{1+u^{1/s}}.$$

これらの公式はどれか一つを証明できれば他も芋づる式に得られるようになっている.

8.4 Wallis の公式

次の公式は Wallis の公式と呼ばれている:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{2n} (n!)^2}{(2n)! \sqrt{n}} = \sqrt{\pi}, \quad \text{i.e.} \quad \binom{2n}{n} \sim \frac{2^{2n}}{\sqrt{\pi n}}.$$

Wallis の公式の面白いところは円周率の平方根が整数の比の極限で表わされているところである. Wallis の公式はガンマ函数に関する Gauss の公式に $s = 1/2$ を代入すれば得ら

⁵⁴ $\coth z = -i \cot(-iz)$ より, $\coth(\pi t) = -i\pi \cot(-\pi it) = \frac{1}{t} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{2t}{t^2 + n^2}$.

⁵⁵ $\sinh z = i \sin(-iz)$ より, $\sinh(\pi s) = \pi s \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 + \frac{s^2}{n^2} \right)$.

れる:

$$\begin{aligned}\sqrt{\pi} &= \Gamma(1/2) = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n^{1/2}n!}{(1/2)(1/2+1)\cdots(1/2+n)} \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{n+1}n^{1/2}n!}{1 \cdot 3 \cdots (2n+1)} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{n+1}n^{1/2}n!}{1 \cdot 3 \cdots (2n+1)} \frac{2^n n!}{2 \cdot 4 \cdots (2n)} \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{2n+1}n^{1/2}(n!)^2}{(2n+1)!} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{2n}(n!)^2}{(2n)!} \frac{2n^{1/2}}{2n+1} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{2^{2n}(n!)^2}{(2n)! \sqrt{n}}.\end{aligned}$$

次の公式も Wallis の公式と呼ばれている:

$$\prod_{n=1}^{\infty} \frac{2n \cdot 2n}{(2n-1)(2n+1)} = \frac{\pi}{2}.$$

この公式は次の公式で $s = 1/2$ とおけば得られる:

$$\sin(\pi s) = \frac{\pi}{\Gamma(s)\Gamma(1-s)} = \pi s \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{s^2}{n^2}\right).$$

実際,

$$1 = \sin\left(\frac{\pi}{2}\right) = \frac{\pi}{2} \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 - \frac{1}{(2n)^2}\right) = \frac{\pi}{2} \prod_{n=1}^{\infty} \frac{(2n-1)(2n+1)}{2n \cdot 2n}.$$

9 付録: 様々な確率分布について

9.1 正規分布

次の確率密度関数で定義される確率分布を平均 μ , 分散 σ の正規分布と呼ぶ:

$$f_{\mu,\sigma}(x) dx = \frac{e^{-(x-\mu)^2/(2\sigma^2)}}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} dx.$$

平均 0, 分散 1 の正規分布を標準正規分布と呼ぶ.

再生性 独立な確率変数 X, Y がそれぞれ平均 μ_X, μ_Y , 分散 σ_X^2, σ_Y^2 の正規分布にしたがうとき, $X + Y$ は平均 $\mu_X + \mu_Y$, 分散 $\sigma_X^2 + \sigma_Y^2$ の正規分布にしたがう.

9.2 ガンマ分布とカイ 2 乗分布

次の確率密度関数で定義される確率分布を shape $\alpha > 0$, scale $\tau > 0$ のガンマ分布と呼ぶ:

$$f_{\alpha,\tau}(x) dx = \frac{e^{-x/\tau} x^{\alpha-1}}{\Gamma(\alpha)\tau^\alpha} dx = \frac{e^{-x/\tau} (x/\tau)^\alpha}{\Gamma(\alpha)} \frac{dx}{x} \quad (x > 0).$$

平均は $x = \alpha\tau$, 分散は $\alpha\tau^2$ であり, $\alpha \geq 0$ のとき最頻値は $x = (\alpha - 1)\tau$ になる.

再生性 独立な確率変数 X, Y がそれぞれ shape α_X, α_Y , scale τ, τ のガンマ分布にしたがうとき, $X + Y$ は shape $\alpha_X + \alpha_Y$, scale τ のガンマ分布にしたがう.

カイ 2 乗分布 (χ^2 分布) はガンマ分布の特別な場合である. すなわち, shape $n/2$, scale 2 のガンマ分布を自由度 n のカイ 2 乗分布 (χ^2 分布) と呼ぶ. カイ 2 乗分布は自由度 n について再生性を持つ.

確率変数 X_1, \dots, X_n が標準正規分布にしたがうとき, $Y = X_1^2 + \dots + X_n^2$ は自由度 n のカイ 2 乗分布にしたがう.

9.3 第二種ベータ分布と t 分布

次の確率密度関数で定義される確率分布をパラメーター $\alpha, \beta > 0$ を持つ第二種ベータ分布 (Beta distribution of the second kind もしくは Beta prime distribution) と呼ぶ:

$$\tilde{f}_{\alpha, \beta}(x) dx = \frac{1}{B(\alpha, \beta)} \frac{x^{\alpha-1}}{(1+x)^{\alpha+\beta}} dx \quad (x > 0).$$

$\beta > 1$ ならば平均は $\alpha/(\beta-1)$ になり, $\beta > 2$ ならば分散は $(\alpha(\alpha+\beta-1))/((\beta-2)(\beta-1)^2)$ になる.

第 2 種ベータ分布の確率密度関数に $x = t^2/\gamma$ ($\gamma > 0$) を代入して, 確率分布を $-\infty < t < \infty$ に拡張すると, 確率密度関数は次の形になる:

$$\tilde{f}_{\alpha, \beta} \left(\frac{t^2}{\gamma} \right) \frac{t}{\gamma} dt = \frac{1}{\gamma^\alpha B(\alpha, \beta)} \frac{t^{2\alpha-1}}{(1+t^2/\gamma)^{\alpha+\beta}} dt$$

$n > 0$ に対して, $\alpha = 1/2$, $\beta = n/2$, $\gamma = n$ のとき, この確率密度関数で定義される確率分布を自由度 n の t 分布と呼ぶ. すなわち, 自由度 n の t 分布とは次の確率密度関数で定義される確率分布のことである:

$$\tilde{g}_n(t) dt = c_n \left(1 + \frac{t^2}{n} \right)^{-(n+1)/2} dt.$$

ここで

$$c_n = \frac{1}{n^{1/2} B(1/2, n/2)} = \frac{\Gamma((n+1)/2)}{\sqrt{n\pi} \Gamma(n/2)}.$$

自由度が $n > 1$ ならば t 分布は平均 0 を持つ. 自由度が $n \leq 1$ のとき t 分布は平均を持たない. 自由度が $n > 2$ ならば t 分布は分散 $n/(n-2)$ を持つ. 自由度を無限大にする極限で t 分布の平均と分散はそれぞれ 0 と 1 に収束する. 自由度が $n \leq 2$ ならば t 分布の分散は無限大になる.

独立な確率変数 X_1, \dots, X_n がどれも平均 μ , 分散 σ^2 の正規分布にしたがうとき,

$$M = \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n X_k, \quad S^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{k=1}^n (X_k - M)^2, \quad T = \frac{M - \mu}{S/\sqrt{n}}$$

とおくと, T は自由度 $n-1$ の t 分布にしたがう.

注意. すぐ上の設定のもとで, $E[S^2] = \sigma^2$ となる. S^2 は不偏分散と呼ばれている. 正規分布の再生性より, M は平均 μ , 分散 σ^2/n の正規分布にしたがう. ゆえに T に類似の確率変数

$$Z = \frac{M - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}$$

は標準正規分布にしたがう. 上で述べたことは, 分母の σ を確率変数 S で置き換えると標準正規分布ではなく, 自由度 $n-1$ の t 分布にしたがうということである. すでに母分散 σ^2 がわかっている場合には Z を利用できるが, 母分散がわかっていない場合には Z を利用できない. そこで母分散 σ^2 の代わりに不偏分散 S^2 を使用すると, 確率分布は正規分布からずれた t 分布になってしまうのである. \square

9.4 第一種ベータ分布と F 分布

次の確率密度関数で定義される確率分布をパラメーター $\alpha, \beta > 0$ を持つ第一種ベータ分布 (Beta distribution of the first kind もしくは単にベータ分布) と呼ぶ:

$$f_{\alpha, \beta}(x) dx = \frac{1}{B(\alpha, \beta)} x^{\alpha-1} (1-x)^{\beta-1} dx \quad (0 < x < 1).$$

平均は $x = \alpha/(\alpha + \beta)$, 分散は $(\alpha\beta)/((\alpha + \beta)^2(\alpha + \beta + 1))$ になり, $\alpha, \beta > 1$ のとき最頻値は $x = (\alpha - 1)/(\alpha + \beta - 2)$ になる.

$m, n > 0$ とし, 第一種ベータ分布の確率密度関数の x に $mx/(mx + n)$ ($x > 0$) を代入すると,

$$f_{\alpha, \beta} \left(\frac{mx}{mx + n} \right) \frac{mn}{(mx + n)^2} dx = \frac{1}{B(\alpha, \beta)} \left(\frac{mx}{mx + n} \right)^{\alpha} \left(1 - \frac{mx}{mx + n} \right)^{\beta} \frac{dx}{x} \quad (x > 0)$$

と整理される ($1 - mx/(mx + n) = n/(mx + n)$ を用いた). これは $\alpha = m/2, \beta = n/2$ のとき次の形になる:

$$g_{m, n}(x) dx = \frac{1}{B(m/2, n/2)} \left(\frac{mx}{mx + n} \right)^{m/2} \left(1 - \frac{mx}{mx + n} \right)^{n/2} \frac{dx}{x} \quad (x > 0).$$

この確率密度関数で定義される確率分布をパラメーター m, n の F 分布と呼ぶ. F 分布は $n > 2$ のとき平均が $n/(n-2)$ になり, $n > 4$ のとき分散が $(2n^2(m+n-2))/(m(n-2)^2(n-4))$ になる.

F 分布の定義より, X がパラメーター m, n の F 分布にしたがうならば, $mX/(mX+n)$ はパラメーター $m/2, n/2$ の第一種ベータ分布にしたがう.

独立な確率変数 U_1, U_2 がそれぞれ自由度 d_1, d_2 のカイ 2 乗分布にしたがうとき,

$$X = \frac{U_1/d_1}{U_2/d_2}$$

はパラメーター d_1, d_2 の F 分布にしたがう. すなわち, $X_1^{(i)}, \dots, X_{d_i}^{(i)}$ ($i = 1, 2$) がすべて独立な確率変数であり, 各々の $X_k^{(i)}$ は平均 0, 分散 σ_i^2 の正規分布にしたがうとき,

$$s_i^2 = \frac{1}{d_i} \sum_{k=1}^{d_i} (X_k^{(i)})^2, \quad X = \frac{s_1^2/\sigma_1^2}{s_2^2/\sigma_2^2}$$

とおくと, X はパラメーター d_1, d_2 の F 分布にしたがう.

第一種ベータ分布の確率密度関数 $f_{\alpha,\beta}(x) dx$ の x に $x/(1+x)$ を代入したものは, 第二種ベータ分布の確率密度関数 $\tilde{f}_{\alpha,\beta}(x) dx$ に一致する. さらに第二種ベータ分布の確率密度関数に $x = t^2/n$, $\alpha = 1/2$, $\beta = n/2$ を代入したものは自由度 n の t 分布の確率密度関数になるのであった. このことから確率変数 T が自由度 n の t 分布にしたがうとき, T^2 はパラメーター $1, n$ の F 分布にしたがい, T^{-2} はパラメーター $n, 1$ の F 分布にしたがうことがわかる. この意味で T 分布は本質的に片方の自由度が 1 の場合の F 分布であることがわかる. このことは以下の直接的な計算によっても確かめられる. F 分布の確率密度関数は次のように書き直される:

$$g_{m,n}(x) dx = \frac{(m/n)^{m/2}}{B(m/2, n/2)} \frac{x^{m/2-1}}{(1+mx/n)^{(m+n)/2}} dx.$$

$m = 1$ を代入すると,

$$g_{1,n}(x) dx = \frac{1}{\sqrt{n} B(1/2, n/2)} \frac{x^{-1/2}}{(1+x/n)^{(n+1)/2}} dx.$$

さらに $x = t^2$ を代入して, 分布を $-\infty < t < \infty$ に拡張したものの確率密度関数は

$$g_{1,n}(t^2) t dt = \frac{1}{\sqrt{n} B(1/2, n/2)} \frac{dt}{(1+t^2/n)^{(n+1)/2}}$$

になる. これは t 分布の確率密度関数 $\tilde{g}_n(t) dt$ に一致する.

9.5 $n - 1$ 次元球面上の一様分布と Maxwell-Boltzmann 則 (1)

X_i 達は独立な標準正規分布であるとし, $R_n = \sqrt{X_1^2 + \cdots + X_n^2}$, $Z_i^{(n)} = X_i/R_n$ とおく. このとき $(Z_1^{(n)}, \dots, Z_n^{(n)})$ は $n - 1$ 次元単位球面上の一様分布になる⁵⁶. 確率変数 $Z_i^{(n)}$ の確率密度関数は

$$g_n(z) dz = c_n^{-1} (1 - z^2)^{(n-3)/2} dz \quad (-1 < z < 1),$$

$$c_n = \int_{-1}^1 (1 - z^2)^{(n-3)/2} dz = B\left(\frac{1}{2}, \frac{n-1}{2}\right) = 2^{n-2} B\left(\frac{n-1}{2}, \frac{n-1}{2}\right)$$

になる. 以下, これを示そう.

$n - 2$ 次元単位球面 $S^{n-2} = \{(x_2, \dots, x_n) \mid x_2^2 + \cdots + x_n^2 = 1\}$ の面積要素を $d\omega'$ と書き, $r' = \sqrt{x_2^2 + \cdots + x_n^2}$ と置き, x_2, \dots, x_n から r' と $n - 2$ 次元単位球面上の座標の組に変数変換すると, 半径 r' の $n - 2$ 次元球面の面積は r'^{n-2} に比例するので,

$$dx_1 \wedge dx_2 \wedge \cdots \wedge dx_n = r'^{n-2} dx_1 \wedge dr' \wedge d\omega'.$$

さらに, r' から $r = \sqrt{x_1^2 + \cdots + x_n^2}$ に変数変換すると, $r' = \sqrt{r^2 - x_1^2}$, $\partial r' / \partial r = r/r'$ なので,

$$dx_1 \wedge dx_2 \wedge \cdots \wedge dx_n = r(r^2 - x_1^2)^{(n-3)/2} dx_1 \wedge dr \wedge d\omega'.$$

⁵⁶この方法を使えば標準正規分布する乱数から球面上一様分布する乱数が得られる.

最後に x_1 から $z = x_1/r$ に変数変換すると,

$$dx_1 \wedge dx_2 \wedge \cdots \wedge dx_n = r^{n-1}(1-z^2)^{(n-3)/2} dz \wedge dr \wedge d\omega'.$$

したがって, \mathbb{R}^n 上の球対称な確率密度関数 $\rho(r)$ に対して,

$$\int_{\mathbb{R}^n} g(z)\rho(r) dx_1 \cdots dx_n = \int_{-1}^1 g(z)(1-z^2)^{(n-3)/2} dz \int_0^\infty r^{n-1}\rho(r) dr \int_{S^{n-2}} d\omega'.$$

後ろの2つの積分の積を c_n^{-1} と書くと,

$$c_n = \int_{-1}^1 (1-z^2)^{(n-3)/2} dz$$

c_n を2通りの方法で計算しよう. 1つ目は $z = t^{1/2}$, $dz = t^{-1/2} dt/2$ と変数変換する方法である:

$$c_n = 2 \int_0^1 (1-z^2)^{(n-3)/2} dz = \int_0^1 t^{-1/2}(1-t)^{(n-3)/2} dt = B\left(\frac{1}{2}, \frac{n-1}{2}\right).$$

2つ目は $(1-z^2) = (1+z)(1-z)$ と因数分解し, $z = 2t - 1$, $dz = 2 dt$ と変数変換する方法である:

$$c_n = \int_0^1 2^{(n-3)/2} t^{(n-3)/2} 2^{(n-3)/2} (1-t)^{(n-3)/2} 2 dt = 2^{n-2} B\left(\frac{n-1}{2}, \frac{n-1}{2}\right).$$

これで示すべきことがすべて示された.

副産物として, ガンマ関数の duplication formula も得られていることを注意しておこう. $(n-1)/2$ を任意の正の実数 s に置き換えても c_n の二通りの表示は成立している:

$$\int_{-1}^1 (1-z^2)^{s-1} dz = B(1/2, s) = 2^{2s-1} B(s, s).$$

ベータ関数にガンマ関数を代入すると

$$\frac{\Gamma(1/2)\Gamma(s)}{\Gamma(s+1/2)} = \frac{2^{2s-1}\Gamma(s)^2}{\Gamma(2s)}.$$

すなわち, $\Gamma(1/2) = \sqrt{\pi}$ より,

$$\Gamma(2s) = \frac{2^{2s-1}}{\sqrt{\pi}} \Gamma(s)\Gamma(s+1/2).$$

この公式は (Legendre's) duplication formula と呼ばれている⁵⁷.

$Z_i^{(n)}$ の確率密度関数の例⁵⁸:

⁵⁷Legendre's duplication formula は任意の正の整数 n に対する次の Gauss's multiplication theorem に一般化される:

$$\Gamma(ns) = \frac{n^{ns-1/2}}{(2\pi)^{(n-1)/2}} \Gamma(s)\Gamma(s+1/n)\Gamma(s+2/n)\cdots\Gamma(s+(n-1)/n).$$

たとえば $\Gamma(3s) = 3^{3s-1/2}\Gamma(s)\Gamma(s+1/3)\Gamma(s+2/3)/(2\pi)$.

⁵⁸これらは本質的に第一種ベータ分布の特別な場合である.

$$\bullet g_2(z) dz = \frac{1}{\pi} \frac{dz}{\sqrt{1-z^2}} \quad (-1 < z < 1). \quad \text{平均 } 0, \text{ 分散 } 1/2.$$

$z = \sin \theta$ を代入すると, $\frac{1}{\pi} d\theta$ ($-\pi/2 \leq \theta \leq \pi/2$) と一様分布になる (当たり前). ゆえに累積分布関数は $1/2 + \theta/\pi = 1/2 + (\arcsin z)/\pi$ ($-1 \leq z \leq 1$) になる. 逆正弦関数が出て来るのでこの分布は逆正弦分布と呼ばれる⁵⁹.

$$\bullet g_3(z) dz = \frac{1}{2} dz \quad (-1 \leq z \leq 1). \quad \text{平均 } 0, \text{ 分散 } 1/3.$$

2次元球面上の一様分布の原点を通る直線上への射影は一様分布になる.

$$\bullet g_4(z) dz = \frac{2}{\pi} \sqrt{1-z^2} dz \quad (-1 \leq z \leq 1). \quad \text{平均 } 0, \text{ 分散 } 1/4.$$

この分布は半円分布と呼ばれる⁶⁰.

$z = -\cos \theta$ を代入すると, \sin^2 型分布 $\frac{2}{\pi} \sin^2 \theta d\theta$ ($0 \leq \theta \leq \pi$) になる⁶¹.

$n \geq 4$ のとき $g_n(z)$ はグラフが釣鐘型の関数になる. 平均はどれも 0 で分散は以下で示すように $1/n$ になる.

$Z_i^{(n)}$ の平均は 0 である. さらにベータ関数とガンマ関数の関係およびガンマ関数の関数等式より $c_n/c_{n+2} = (n-1)/n = 1 - 1/n$ となることがわかる. そのことを使うと, $Z_i^{(n)}$

⁵⁹ ギャンブルをやり続けるとき, トータルで勝ち越している状態の時間の長さの総和から負け越している状態の時間の長さの総和を引いた結果の確率分布は適当に規格化すると逆正弦分布に近付くことが知られている. これは逆正弦法則と呼ばれている. 逆正弦分布の確率密度関数は両端に近付くほど大きくなり, 真ん中の 0 付近は小さくなる. ゆえに, 逆正弦法則は勝ち越している時間と負け越している時間の差の絶対値は 0 付近に留まらずに大きくなる傾向が強いということを意味している. ギャンブル好きならばこの事実を経験的によく知っているはずである. 単なる偶然で, 勝ち続けたり, 負け続けたりすることの方が多い.

⁶⁰ 半円分布は行列模型における固有値の分布密度に関する Wigner の半円則に現われる. N 次実対称行列に値を持つ確率変数 M の確率密度関数は $\prod_i e^{-M_{ii}^2/2} dM_{ii} \prod_{i < j} e^{-M_{ij}^2/2} dM_{ij}$ に比例していると仮定し, ランダムな実対称行列 M の固有値の確率分布を考える. そのとき, スケール変換によって分散が $1/4$ になるように規格化すると, その確率分布は $N \rightarrow \infty$ で分散 $1/4$ の半円分布に収束するというのが Wigner の半円則である.

半円分布は量子中心極限定理における収束先として現われる典型的な確率分布である. たとえば, 尾畑伸明, 量子確率論とその応用, 無限次元解析特論 (名城大学, 2013.10) に解説がある.

⁶¹ 佐藤・Tate 予想にこの型の分布が登場する. 佐藤・Tate 予想とは「有理数体上定義された虚数乗法を持たない楕円曲線の素数位数 p の有限体上での有理点の個数から $p+1$ を引いて $2\sqrt{p}$ で割って得られる数値の分布が \sin^2 型分布になる」という内容の 1960 年代に独立に発見された予想である. 現在では完全に解決されているらしい. R=T の最近の発展についての勉強会 (2008) の報告集にまとまった解説がある.

佐藤幹夫氏の側がどのように「佐藤 \sin^2 予想」を発見したかについては, 難波莞爾, Dedekind η 関数と佐藤 \sin^2 -予想, 第 16 回数学史シンポジウム, 津田塾大学 (2005) に詳しい. 当時まだ大学院生だった難波莞爾さんがコンピューターで遊んでいることを佐藤先生らにビアガーデンで話したときについて「少し意味のある計算をやってみませんか, ということになった. それで, 楕円母数形式, 志村・谷山…などの概念や文字列と遭遇することになったのである」と書いてある. その「少し意味のある計算」の積み重ねによって「佐藤 \sin^2 予想」が発見された.

$SU(2)$ 上の一様分布 (Haar 測度) から誘導される $SU(2)$ の共役類全体の空間上の分布は \sin^2 型分布になる. その理由は以下の通り. $A \in SU(2)$ の共役類は $-1 \leq \text{tr}(A)/2 \leq 1$ で一意に特徴付けられる. (一般に $GL_r(\mathbb{C})$ のコンパクト Lie 部分群の元の共役類はその特性多項式 (すなわち固有値たち) で一意に特徴付けられる.) $A \in SU(2)$ に $\text{tr}(A)/2$ を対応させる写像は, $SU = S^3 \subset \mathbb{R}^4$ という同一視のもとで, S^3 から \mathbb{R}^4 の 1 次元部分空間への射影に一致している. このことから $SU(2)$ 上の一様分布がその共役類全体の空間上に誘導する分布は確率密度関数は \sin^2 型分布になることがわかる.

佐藤・Tate 予想は「有理数体上の虚数乗法を持たない楕円曲線から各素数 p ごとに得られる $SU(2)$ の共役類達が 3 次元球面 $S^3 = SU(2)$ 上の一様分布から誘導される分布にしたがっている」という話であるとみなせる.

の分散が $1/n$ になることを示せる:

$$c_n^{-1} \int_{-1}^1 z^2 (1 - z^2)^{(n-3)/2} dz = c_n^{-1} (c_n - c_{n+2}) = 1 - \frac{c_n}{c_{n+1}} = \frac{1}{n}.$$

ここで z^2 に $1 - (1 - z^2)$ を代入する計算を行った.

$Y_i^{(n)} = \sqrt{n} Z_i^{(n)}$ は平均 0, 分散 1 の確率変数になり, その確率密度関数は

$$g_n \left(\frac{y}{\sqrt{n}} \right) \frac{dy}{\sqrt{n}} = \frac{1}{\sqrt{n} c_n} \left(1 - \frac{y^2}{n} \right)^{(n-3)/2} dy$$

になる. $n \rightarrow \infty$ のとき, $\nu = (n - 1)/2$ とおくと,

$$\begin{aligned} \left(1 - \frac{y^2}{n} \right)^{(n-3)/2} &= \left(1 - \frac{y^2}{n} \right)^{-3/2} \left(1 - \frac{y^2/2}{n/2} \right)^{n/2} \rightarrow e^{-y^2/2} \\ \sqrt{n} c_n &= \sqrt{2\nu + 1} 2^{2\nu-1} B(\nu, \nu) \sim \sqrt{2\nu} 2^{2\nu-1} \frac{2}{\nu} \frac{\sqrt{\pi\nu}}{2^{2\nu}} = \sqrt{2\pi} \end{aligned}$$

となる⁶². 途中の計算で Wallis の公式より

$$B(\nu, \nu) = \frac{\Gamma(\nu)^2}{\Gamma(2\nu)} = \frac{2\nu \Gamma(\nu + 1)^2}{\nu^2 \Gamma(2\nu + 1)} = \frac{2}{\nu} \binom{2\nu}{\nu}^{-1} \sim \frac{2}{\nu} \frac{\sqrt{\pi\nu}}{2^{2\nu}}$$

となることを使った⁶³. したがって, $Y_i^{(n)}$ は $n \rightarrow \infty$ の極限で標準正規分布にしたがう確率変数に収束する:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{\sqrt{n}} g_n \left(\frac{y}{\sqrt{n}} \right) = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{(1 - y^2/n)^{(n-3)/2}}{\sqrt{n} 2^{n-2} B(\frac{n-1}{2}, \frac{n-1}{2})} = \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}}.$$

以上をまとめると, 実数 y の有界連続関数 $g(y)$ について,

$$C_n^{-1} \int_{\sqrt{n} S^{n-1}} g(y_i) d\omega_n \rightarrow \int_{\mathbb{R}} g(y) \frac{e^{-y^2/2}}{\sqrt{2\pi}} dy \quad (n \rightarrow \infty).$$

ここで, $\sqrt{n} S^{n-1} = \{(y_1, \dots, y_n) \in \mathbb{R}^n \mid y_1^2 + \dots + y_n^2 = n\}$ は半径 \sqrt{n} の $n - 1$ 次元球面であり, C_n はその球面の表面積であり, $d\omega_n$ はその球面上の面積要素である. この結果は物理的には Maxwell-Boltzmann 則としてよく知られている.

9.6 $n - 1$ 次元球面上の一様分布と Maxwell-Boltzmann 則 (2)

前節では半径 \sqrt{n} の $n - 1$ 次元球面上の一様分布の x_i 軸への射影の極限が標準正規分布になることを証明した.

同様の方法で, 半径 \sqrt{n} の $n - 1$ 次元球面上の一様分布の m 次元部分空間への射影が m 次元の標準正規分布に収束することも示せる. 以下でその筋道を簡単に説明しておく. 前節の記号をそのまま引き継ぐ.

⁶² $\sqrt{n} c_n = \int_{-1}^1 (1 - y^2/n)^{(n-3)/2} dy$ なので, 前者の $\lim_{n \rightarrow \infty} (1 - y^2/n)^{(n-3)/2} = e^{-y^2/2}$ から後者の $\lim_{n \rightarrow \infty} \sqrt{n} c_n = \sqrt{2\pi}$ を導くこともできる. 実際, そうした方が簡単だろう.

⁶³ 以上の計算を逆にたどることによって, 逆に Wallis の公式を証明することもできる.

$n - m - 1$ 次元単位球面 $S^{n-m-1} = \{(x_{m+1}, \dots, x_n) \mid x_{m+1}^2 + \dots + x_n^2 = 1\}$ の面積要素を $d\omega'$ と書き, $r' = \sqrt{x_{m+1}^2 + \dots + x_n^2}$ と置き, x_{m+1}, \dots, x_n から r' と $n - m - 1$ 次元単位球面上の座標の組に変数変換すると

$$dx_1 \wedge \dots \wedge dx_n = r'^{n-m-1} dx_1 \wedge \dots \wedge dx_m \wedge dr' \wedge d\omega'.$$

さらに, r' から $r = \sqrt{x_1^2 + \dots + x_n^2}$ に変数変換すると, $r' = \sqrt{r^2 - x_1^2 - \dots - x_m^2}$ かつ $\partial r' / \partial r = r / r'^{-1}$ なので,

$$dx_1 \wedge \dots \wedge dx_n = r(r^2 - x_1^2)^{(n-m-2)/2} dx_1 \wedge \dots \wedge dx_m \wedge dr \wedge d\omega'.$$

最後に x_i ($i = 1, \dots, m$) から $z_i = x_i / r$ ($i = 1, \dots, m$) に変数変換すると,

$$dx_1 \wedge \dots \wedge dx_n = r^{n-1} (1 - z_1^2 - \dots - z_m^2)^{(n-m-2)/2} dz \wedge dr \wedge d\omega'.$$

したがって, 球対称な確率密度関数 $\rho(r)$ に対して,

$$\begin{aligned} & \int_{\mathbb{R}^n} g(z_1, \dots, z_m) \rho(r) dx_1 \cdots dx_n \\ &= c_m^{(n)-1} \int_{z_1^2 + \dots + z_m^2 < 1} g(z_1, \dots, z_m) (1 - z_1^2 - \dots - z_m^2)^{(n-m-2)/2} dz_1 \cdots dz_m. \quad (*) \end{aligned}$$

ここで

$$c_m^{(n)-1} = \int_0^\infty r^{n-1} \rho(r) dr \int_{S^{n-m-1}} d\omega'$$

である. もっとも極端な場合として $m = 0$ の場合を考えると $c_0^{(n)} = 1$ となる. このことより, $\rho(r) = e^{-r^2/2} / (2\pi)^{n/2}$ とすることによって, $n - 1$ 次元単位球面の面積は

$$\int_{S^{n-1}} d\omega = (2\pi)^{n/2} \left(\int_0^\infty r^{n-1} e^{-r^2/2} dr \right)^{-1} = \frac{2^{n/2} \pi^{n/2}}{2^{n/2-1} \Gamma(n/2)} = \frac{2\pi^{n/2}}{\Gamma(n/2)} = \frac{n\pi^{n/2}}{\Gamma(n/2 + 1)}$$

と計算される ($d\omega$ は $n - 1$ 次元単位球面 S^{n-1} の面積要素). 次の公式を使った:

$$\int_0^\infty r^{s-1} e^{-r^2/2} dr = \int_0^\infty e^{-t} (2t)^{(s-2)/2} dt = 2^{s/2-1} \Gamma(s/2).$$

積分変数を $r^2/2 = t$, $r dr = dt$, $r^{s-1} dr = r^{s-2} r dr$ と変換すればこの公式が得られる. 以上より, $\int_0^\infty r^{n-1} \rho(r) dr$ は常に $n - 1$ 次元単位球面の面積の逆数になることもわかる. したがって,

$$c_m^{(n)} = \frac{\int_{S^{n-1}} d\omega}{\int_{S^{n-m-1}} d\omega'} = \frac{(n-1 \text{ 次元単位球面の面積})}{(n-m-1 \text{ 次元単位球面の面積})}.$$

これが定数 $c_m^{(n)}$ の幾何学的意味である.

定数 $c_m^{(n)}$ は以下のように計算される⁶⁴:

$$\begin{aligned} c_m^{(n)} &= \int_{z_1^2 + \dots + z_m^2 < 1} (1 - z_1^2 - \dots - z_m^2)^{(n-m-2)/2} dz_1 \cdots dz_m. \\ &= \int_{t_i > 0, \sum_{i=1}^m t_i < 1} t_1^{-1/2} \cdots t_m^{-1/2} (1 - t_1 - \dots - t_m)^{(n-m-2)/2} dt_1 \cdots dt_m \\ &= \frac{\Gamma(1/2)^m \Gamma((n-m)/2)}{\Gamma(n/2)}. \end{aligned}$$

⁶⁴ $n = m + 2$ のとき $c_m^{(m+2)} = \pi^{m/2} / \Gamma(m/2 + 1)$ は m 次元単位球体の体積に等しい.

2つ目の等号で $z_i = \sqrt{t_i}$ と変数変換し, 最後の等号で次の公式を使った: $p_i > 0$ に対して,

$$\frac{\Gamma(p_1) \cdots \Gamma(p_{m+1})}{\Gamma(p_1 + \cdots + p_{m+1})} = \int_{t_i > 0, \sum_{i=1}^m t_i < 1} t_1^{p_1-1} \cdots t_m^{p_m-1} (1 - t_1 - \cdots - t_m)^{p_{m+1}-1} dt_1 \cdots dt_m.$$

証明の方法はガンマ関数とベータ関数の関係とまったく同様である. もしくは右辺を $B(p_1, \dots, p_{m+1})$ と書くと,

$$B(p_1, \dots, p_{m+1}) = B(p_1, \dots, p_{m-1}, p_m + p_{m+1}) B(p_m, p_{m+1}) \quad (\text{B})$$

が成立することから, 帰納法で証明することもできる. 実際, $t_m = (1 - t_1 - \cdots - t_{m-1})u$ によって t_m から u に変数変換すると

$$\begin{aligned} & B(p_1, \dots, p_m, p_{m+1}) \\ &= \int_{t_i > 0, \sum_{i=1}^{m-1} t_i < 1} dt_1 \cdots dt_{m-1} \int_{-1}^1 du \\ & \quad t_1^{p_1-1} \cdots t_{m-1}^{p_{m-1}-1} (1 - t_1 - \cdots - t_{m-1})^{p_m+p_{m+1}-1} u^{p_m-1} (1 - u)^{p_{m+1}-1}. \end{aligned}$$

これより上の公式 (B) が成立することがわかる.

公式 (*) より, ベクトル値確率変数 $(Z_1^{(n)}, \dots, Z_m^{(n)})$ の確率密度関数は

$$g_n(z_1, \dots, z_m) dz_1 \cdots dz_m = c_m^{(n)-1} (1 - z_1^2 - \cdots - z_m^2)^{(n-m-2)/2} dz_1 \cdots dz_m$$

である.

これより, $\sigma > 0$ に対して, $(Y_1^{(n)}, \dots, Y_m^{(n)}) = \sqrt{n} \sigma (Z_1^{(n)}, \dots, Z_m^{(n)})$ の確率密度関数は

$$\left(1 - \frac{1}{n\sigma^2} \sum_{i=1}^m y_i^2\right)^{(n-m-2)/2} dy_1 \cdots dy_m$$

の定数倍になる⁶⁵. そして,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 - \frac{1}{n\sigma^2} \sum_{i=1}^m y_i^2\right)^{\frac{n-m-2}{2}} = \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^m y_i^2\right)$$

なので $(Y_1^{(n)}, \dots, Y_m^{(n)})$ は $n \rightarrow \infty$ で m 次元の正規分布にしたがうベクトル値確率変数に収束する⁶⁶. すなわち,

$$\begin{aligned} & \frac{1}{C_n(\sqrt{n}\sigma)} \int_{\sqrt{n}\sigma S^{n-1}} g(y_1, \dots, y_m) d\omega_n \\ & \rightarrow \frac{1}{(2\sigma^2)^{m/2}} \int_{\mathbb{R}^m} g(y_1, \dots, y_m) \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^m y_i^2\right) dy_1 \cdots dy_m. \end{aligned}$$

ここで, $\sqrt{n}\sigma S^{n-1} = \{(y_1, \dots, y_n) \in \mathbb{R}^n \mid y_1^2 + \cdots + y_n^2 = n\sigma^2\}$ は半径 $\sqrt{n}\sigma$ の $n - 1$ 次元球面であり, $C_n(\sqrt{n}\sigma)$ はその球面の表面積であり, $d\omega_n$ はその球面上の面積要素である. これは物理的には Maxwell-Boltzmann 則としてよく知られており, 分散 σ^2 は絶対温度の Boltzmann 定数倍 kT だと解釈される.

⁶⁵ $Y_i^{(n)}$ たちは独立ではないことに注意せよ.

⁶⁶ $Y_i^{(n)}$ 達は有限な n で独立ではないが, $n \rightarrow \infty$ の極限で独立な標準正規分布に収束する.

9.7 二項分布と第一種ベータ分布

$0 < p < 1$ とする. n は非負の整数であるとする. 離散型確率変数 $B_{p,n}$ がパラメーター n と p の二項分布にしたがうとは

$$P(B_{p,n} = k) = \binom{n}{k} p^k (1-p)^{n-k} \quad (k = 0, 1, 2, \dots, n)$$

が成立することであると定める. 平均と分散はそれぞれ np と $np(1-p)$ になり, 特性関数は $E[e^{itB_{p,n}}] = (pe^{it} + q)^n$ となる. 二項分布はパラメーター n に関して再生性を持つ. ゆえに中心極限定理より, p を一定のまま n を大きくすると, $(B_{p,n} - np)/\sqrt{np(1-p)}$ は標準正規分布にしたがう確率変数で近似される.

二項分布と第一種ベータ分布の関係は以下の通り.

$\Gamma(s+1) = s!$, $\binom{s}{t} = s!/(t!(s-t)!)$ と書くことにすると

$$\frac{1}{B(\alpha, \beta)} = \frac{(\alpha + \beta - 1)!}{(\alpha - 1)!(\beta - 1)!} = (\alpha + \beta - 1) \binom{\alpha + \beta - 2}{\alpha - 1}$$

なので, パラメーター $\alpha, \beta > 0$ を持つ第一種ベータ分布の確率密度関数は

$$f_{\alpha, \beta}(p) dp = (\alpha + \beta - 1) \binom{\alpha + \beta - 2}{\alpha - 1} p^{\alpha-1} (1-p)^{\beta-1} dp \quad (0 < p < 1)$$

と表される. 平均は $\alpha/(\alpha + \beta)$, 分散は $(\alpha\beta)/((\alpha + \beta)^2(\alpha + \beta + 1))$ になり, $\alpha, \beta > 1$ のとき最頻値は $p = (\alpha - 1)/(\alpha + \beta - 2)$ になるのであった.

ゆえに $\alpha + \beta - 2 = n$, $\alpha - 1 = k$ のとき, 第一種ベータ分布の確率密度関数は

$$f_{k+1, n-k+1}(p) dp = (n+1) \binom{n}{k} p^k (1-p)^{n-k} dp \quad (0 < p < 1)$$

となり, 平均値は $p = (k+1)/(n+2)$, 分散は $((k+1)(n-k+1))/((n+2)^2(n+2))$, 最頻値は $p = k/n$ になる⁶⁷.

以上の結果から, A が B と n 回対戦して k 回勝ったとき, A が B に勝つ確率はパラメーターが $\alpha = k+1$, $\beta = n-k+1$ の第一種ベータ分布にしたがっているとみなすと便利なのがわかる⁶⁸.

9.8 Poisson 分布とガンマ分布

離散型確率変数 $N_{\lambda T}$ がパラメーター $\lambda T > 0$ の Poisson 分布にしたがうとは

$$P(N_{\lambda T} = k) = \frac{e^{-\lambda T} (\lambda T)^k}{k!} \quad (k = 0, 1, 2, 3, \dots)$$

が成立することであると定める. 平均と分散はどちらも λT になる. T は測定する時間の長さを, λ は単位時間あたりにまれな事象が起こる回数の期待値を意味している. 特性関数は $E[e^{itN_{\lambda T}}] = e^{\lambda T(e^{it}-1)}$ となる. Poisson 分布は λT について再生性を持つ. ゆえに中

⁶⁷ $k \sim np$ ($n \rightarrow \infty$, p は一定) ならば, $n \rightarrow \infty$ で平均値と最頻値は p に収束し, 分散は 0 に収束する.

⁶⁸ 共役事前分布の話.

心極限定理より, λT を大きくすると, $(N_{\lambda T} - \lambda T)/\sqrt{\lambda T}$ は標準正規分布にしたがう確率変数で近似される.

Poisson 分布とガンマ分布の関係は以下の通り.

次の確率密度関数で定義される確率分布を shape $\alpha = k + 1 > 0$, scale $\tau = 1/T$ のガンマ分布と呼ぶのであった:

$$f_{k+1,1/T}(\lambda) d\lambda = \frac{e^{-\lambda T} (\lambda T)^k}{k!} d\lambda \quad (\lambda > 0).$$

平均は $\lambda = (k + 1)/T$, 分散は $(k + 1)/T^2$ になり, 最頻値は $\lambda = k/T$ になる⁶⁹.

このことから, T 単位時間の観測でまれな事象が k 回起こったならば, 単位時間あたりにまれな事象が起こる回数の平均値 λ の推定値が shape $\alpha = k + 1$, scale $\tau = 1/T$ のガンマ分布にしたがっているとみなすことが十分に合理的なことがわかる.

9.9 基本的な数学用語の大雑把な説明

確率変数にその期待値 (平均) を対応させる汎関数 $E[\]$ は以下を満たしている⁷⁰:

- $E[\alpha X + \beta Y] = \alpha E[X] + \beta E[Y]$ (線形性).
- $f \geq 0$ ならば $E[f(X)] \geq 0$ (単調性).
- $E[1] = 1$ (規格化条件).

たったこれだけの性質だけからかなりのことが言える.

確率変数 X の平均値 (期待値) が存在するとは $E[|X|] < \infty$ となることである. そのとき $\mu_X = E[X]$ を X の平均値もしくは期待値と呼ぶ. X の平均値 μ_X が存在するとき, $(X - \mu_X)^2$ の平均値を X の分散と呼び, σ_X^2 と表わし, 分散の平方根 σ_X を標準偏差と呼ぶ. 分散と標準偏差は無限大になることがありえる.

もしも $E[|X|^r] < \infty$ ならば X の r 次のモーメントが存在すると言い, $E[X^r]$ を X の r 次のモーメントと言う. X の 1 次のモーメントは X の平均 $\mu_X = E[X]$ であり, 2 次のモーメントについて $E[X^2] = \sigma_X^2 + \mu_X^2$ なので $\sigma_X^2 = E[X^2] - E[X]^2$ となる.

確率変数 X に対して $\varphi_X(t) = E[e^{itX}]$ を X の特性関数と呼ぶ. 特性関数は t について一様連続関数になる. 特性関数が等しい確率変数は確率分布を持つ⁷¹. 確率変数 X, Y が同じ確率分布を持つとき, $X \sim Y$ と書くことにする.

X の r 次以下のモーメントがすべて存在するとき, 特性関数 $\varphi_X(t)$ は $t = 0$ で r 回微分可能になり, $\varphi_X^{(k)}(0) = E[X^k]$ ($k = 0, 1, \dots, r$) となる.

X と Y は平均値と有限の分散を持つ確率変数であるとする. このとき Cauchy-Schwarz の不等式より, $E[(X - \mu_X)(Y - \mu_Y)] \leq \sigma_X \sigma_Y$ となるので, $\sigma_{XY} = E[(X - \mu_X)(Y - \mu_Y)]$

⁶⁹ $k \sim \lambda T$ ($T \rightarrow \infty, \lambda$ は一定) ならば $T \rightarrow \infty$ で平均と最頻値は λ に収束し, 分散は 0 に収束する.

⁷⁰ 確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mu)$ 上の可測関数 X を確率変数と呼ぶ. 可積分関数 X に $\int_{\Omega} X(x) \mu(dx)$ を対応させる汎関数を期待値汎関数と呼び $E[\]$ と表わす.

⁷¹ 確率変数とは確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mu)$ 上の実数値可測関数 $X: \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ のことである. \mathbb{R} の Borel 部分集合 A に対して $\mu_X(A) = \mu(X^{-1}(A))$ と定めることによって, \mathbb{R} 上の確率測度 μ_X が定まる. μ_X を確率変数 X の確率分布と呼ぶ. もしも μ_X が Lebesgue 測度の関数 $f(x)$ 倍と表示されるとき, $f(x)$ を確率変数 X の確率密度関数と呼ぶ. \mathbb{R} 上の可測関数 $g(x)$ に対して X と g の合成を $g(X)$ と書く. $g(X)$ も確率変数になる. $g(x)$ が有界連続関数のとき, $g(X)$ の期待値は $E[g(X)] = \int_{\mathbb{R}} g(x) \mu_X(dx)$ と表わされる. X の確率密度関数 $f(x)$ が存在するならば $E[g(X)] = \int_{\mathbb{R}} g(x) f(x) dx$.

が well-defined になり, $|E[(X - \mu_X)(Y - \mu_Y)]| \leq \sigma_X \sigma_Y$ となる. σ_{XY} を X と Y の共分散と呼ぶ. $\rho_{XY} = \sigma_{XY}/(\sigma_X \sigma_Y)$ を X と Y の相関係数と呼ぶ. 相関係数の絶対値は 1 以下になる.

共分散は線形代数での「ベクトルの内積」に対応し, 相関係数は「ベクトルのあいだの角度を θ と書くときの $\cos \theta$ 」に対応している. 確率変数 X を平均が 0 になるように値を平行移動した $X - \mu_X$ はベクトルの類似物であり, $E[(X - \mu_X)(Y - \mu_Y)]$ が内積の類似物であることを理解できれば, 線形代数学で学んだことがすべて役に立つ.

確率変数たち X_i が独立であるとは, i_1, \dots, i_r が互いに異なるとき,

$$E[f_1(X_{i_1}) \cdots f_r(X_{i_r})] = E[f_1(X_{i_1})] \cdots E[f_r(X_{i_r})]$$

が成立することである (f_k たちは有界な連続関数). X と Y が独立ならば X と Y の共分散と相関係数は 0 になるが, 逆は成立しない.

D_α はパラメーター $\alpha > 0$ を持つ確率変数であるとし, $X \sim D_\alpha, Y \sim D_\beta$ であり, X, Y は独立であるとする. このとき, もしも $X + Y \sim D_{\alpha+\beta}$ が成立するとき, D_α の確率分布は再生性を持つと言う.

確率変数 X_1, \dots, X_r が独立であるとき, $\varphi_{X_1+\dots+X_r} = \prod_{i=1}^r \varphi_{X_i}$ が成立する. ゆえに, $\varphi_{D_\alpha} = \phi^\alpha$ が成立することと, D_α の確率分布は再生性を持つことは同値である.

10 付録: 簡単な Tauber 型定理とその応用

10.1 不定積分型

定理 10.1. $f(t)$ は $t > 0$ で定義された正値単調減少⁷²関数であるとし, $\alpha, a > 0$ であるとする. このとき

$$\int_0^x f(t) dt \sim ax^\alpha \quad (x \rightarrow \infty)$$

ならば⁷³,

$$f(x) \sim a\alpha x^{\alpha-1} \quad (x \rightarrow \infty)$$

が成立する. (この結論の式は前提の式の両辺を形式的に x で微分した形をしている.)

証明. f が単調減少関数であることより, 任意の $c > 1$ に対して,

$$\frac{\int_0^{cx} f(t) dt - \int_0^x f(t) dt}{cx - x} \leq f(x) \leq \frac{\int_0^x f(t) dt - \int_0^{c^{-1}x} f(t) dt}{x - c^{-1}x}.$$

これの全体を $ax^{\alpha-1}$ で割ると,

$$\frac{\frac{\int_0^{cx} f(t) dt}{ax^\alpha} - \frac{\int_0^x f(t) dt}{ax^\alpha}}{c-1} \leq \frac{f(x)}{ax^{\alpha-1}} \leq \frac{\frac{\int_0^x f(t) dt}{ax^\alpha} - \frac{\int_0^{c^{-1}x} f(t) dt}{ax^\alpha}}{1-c^{-1}}.$$

⁷² $x \leq x'$ ならば $f(x) \geq f(x')$ が成立することを「単調減少」と呼んでいる. 字義通りに解釈できるようにするためには「非増加関数」と呼ぶべきかもしれないが, 慣習に合わせてこのように呼んでいる.

⁷³ $F(x) \sim G(x) (x \rightarrow \infty)$ は $\lim_{x \rightarrow \infty} (F(x)/G(x)) = 1$ を意味する

ゆえに $x \rightarrow \infty$ とすることによって⁷⁴,

$$\frac{c^\alpha - 1}{c - 1} \leq \liminf_{x \rightarrow \infty} \frac{f(x)}{ax^{\alpha-1}} \leq \limsup_{x \rightarrow \infty} \frac{f(x)}{ax^{\alpha-1}} \leq \frac{1 - c^{-\alpha}}{1 - c^{-1}}.$$

さらに $c \searrow 1$ とすることによって

$$\alpha \leq \liminf_{x \rightarrow \infty} \frac{f(x)}{ax^{\alpha-1}} \leq \limsup_{x \rightarrow \infty} \frac{f(x)}{ax^{\alpha-1}} \leq \alpha.$$

を得る. ゆえに

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{f(x)}{ax^{\alpha-1}} = \alpha, \quad \text{つまり} \quad f(x) \sim a\alpha x^{\alpha-1} \quad (x \rightarrow \infty).$$

これで示すべきことが示された. □

正値単調減少数列 a_n に対して $f(n) = a_n$ を満たす正値単調減少関数 $f(t)$ を適切に定めることによって次の結果が得られる.

系 10.2. a_1, a_2, a_3, \dots は正値単調減少数列であるとし, $a, \alpha > 0$ であるとする. このとき

$$\sum_{k=1}^n a_k \sim an^\alpha \quad (n \rightarrow \infty)$$

ならば

$$a_n \sim a\alpha n^{\alpha-1} \quad (n \rightarrow \infty)$$

が成立する. □

10.2 Laplace 変換型

Stone-Weierstrass の多項式近似定理⁷⁵を用いてまず次を示そう.

補題 10.3. $\phi(y)$ は閉区間 $[0, 1]$ 上の非負値可積分関数であるとし, $g(y)$ は閉区間 $[0, 1]$ 上の関数で一点 $c \in (0, 1)$ でのみ不連続で他の点では連続であるものとする, 極限 $g(c \pm 0) = \lim_{\varepsilon \searrow 0} g(c \pm \varepsilon)$ が存在すると仮定する. このとき, 任意の $\varepsilon > 0$ に対して, 多項式関数 $P(y), Q(y)$ で

$$\begin{aligned} P(y) &\leq g(y) \leq Q(y) \quad (0 \leq y \leq 1), \\ \int_0^1 g(y)\phi(y) dy - \varepsilon &\leq \int_0^1 P(y)\phi(y) dy \leq \int_0^1 g(y)\phi(y) dy, \\ \int_0^1 g(y)\phi(y) dy &\leq \int_0^1 Q(y)\phi(y) dy \leq \int_0^1 g(y)\phi(y) dy + \varepsilon \end{aligned}$$

を満たすものが存在する.

⁷⁴ $\int_0^{cx} f(t) dt \sim ac^\alpha x^\alpha$ ($x \rightarrow \infty$) を用いる.

⁷⁵ 閉区間上の任意の連続関数が多項式関数で一様近似されるという定理.

証明. 条件を満たす多項式函数 $Q(y)$ の存在のみを示せばよい. ($g(y)$ の代わりに $-g(y)$ を考えれば $P(y)$ の存在も示される.) さらに $g(c-0) \leq g(c+0)$ と仮定してよい. ($g(c-0) \geq g(c+0)$ ならば $g(y)$ の代わりに $g(1-y)$ を考えればよい.)

$\phi(y)$ は非負値可積分函数なので $N = \int_0^1 |\phi(y)| dy = \int_0^1 \phi(y) dy$ とおくと, $N < \infty$ となる. $g(y)$ は $[0, 1]$ 上有界なので, ある $M > 0$ で $|g(y)| \leq M$ ($0 \leq y \leq 1$) をみたすものが取れる.

任意に $\varepsilon > 0$ を取る.

c 未満の $\delta > 0$ に対して, $g(y)$ を近似する連続函数 $g_\delta(y)$ を次のように定める:

$$g_\delta(y) = \begin{cases} g(y) & (0 \leq y \leq c - \delta), \\ \max\{a(y - c) + g(c + 0), g(y)\} & (c - \delta \leq y \leq c), \\ g(y) & (c \leq y \leq 1). \end{cases}$$

ここで $a = (g(c + 0) - g(c - \delta))/\delta$ であり, $a(y - c) + g(c + 0) = a(y - (c - \delta)) + g(c - \delta)$ であることに注意せよ. 定義より

$$-M \leq g(y) \leq g_\delta(y) \leq M \quad (0 \leq y \leq 1)$$

となっている. $|g_\delta(y)\phi(y)| \leq M|\phi(y)|$ ($0 \leq y \leq 1$) かつ $\lim_{\delta \searrow 0} g_\delta(y)\phi(y) = g(y)\phi(y)$ ($y \neq c$) なので Lebesgue の収束定理より,

$$\lim_{\delta \searrow 0} \int_0^1 g_\delta(y)\phi(y) dy = \int_0^1 g(y)\phi(y) dy.$$

このことを使って, $\delta > 0$ を十分小さくして

$$\int_0^1 g(y)\phi(y) dy \leq \int_0^1 g_\delta(y)\phi(y) dy \leq \int_0^1 g(y)\phi(y) dy + \frac{\varepsilon}{3}$$

となるようにしておく.

Stone-Weierstrass の多項式近似定理より, ある多項式函数 $Q(y)$ で

$$\left| Q(y) - g_\delta(y) - \frac{\varepsilon}{3N} \right| \leq \frac{\varepsilon}{3N} \quad (0 \leq y \leq 1)$$

を満たすものが存在する.

このとき $g(y) \leq g_\delta(y) \leq Q(y)$ ($0 \leq y \leq 1$) が成立しており,

$$\begin{aligned} & \int_0^1 Q(y)\phi(y) dy \\ & \leq \int_0^1 \left| Q(y) - g_\delta(y) - \frac{\varepsilon}{3N} \right| \phi(y) dy + \int_0^1 g_\delta(y)\phi(y) dy + \int_0^1 \frac{\varepsilon}{3N} \phi(y) dy \\ & \leq \frac{\varepsilon}{3N} \int_0^1 \phi(y) dy + \int_0^1 g(y)\phi(y) dy + \frac{\varepsilon}{3} + \frac{\varepsilon}{3N} \int_0^1 \phi(y) dy \\ & = \frac{\varepsilon}{3N} N + \int_0^1 g(y)\phi(y) dy + \frac{\varepsilon}{3} + \frac{\varepsilon}{3N} N \\ & = \int_0^1 g(y)\phi(y) dy + \varepsilon. \end{aligned}$$

これで示すべきことが示された. □

定理 10.4. $f(t)$ は $t > 0$ で定義された非負値可測関数であるとし, $a, \alpha > 0$ であると仮定する. このとき

$$\int_0^{\infty} e^{-xt} f(t) dt \sim \frac{a}{x^\alpha} \quad (x \searrow 0)$$

ならば

$$\int_0^{1/x} f(t) dt \sim \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha+1)} \quad (x \searrow 0).$$

が成立する. (ガンマ関数が出て来る理由は以下の証明を見ればわかる.)

証明. $F(x) = \int_0^{\infty} e^{-xt} f(t) dt$ とおくと, 仮定 $F(x) \sim a/x^\alpha$ ($x \searrow 0$) より, $k = 0, 1, 2, \dots$ に対して,

$$\begin{aligned} F((k+1)x) &= \int_0^{\infty} e^{-xt} (e^{-xt})^k f(t) dt \\ &\sim \frac{a}{(k+1)^\alpha x^\alpha} = \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^{\infty} e^{-t} (e^{-t})^k t^{\alpha-1} dt \quad (x \searrow 0). \end{aligned}$$

ここで次の公式を使った:

$$\frac{1}{c^\alpha} = \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^{\infty} e^{-ct} t^{\alpha-1} dt \quad (c > 0).$$

したがって任意の多項式関数 $p(y)$ について

$$\int_0^{\infty} e^{-xt} p(e^{-xt}) f(t) dt \sim \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^{\infty} e^{-t} p(e^{-t}) t^{\alpha-1} dt \quad (x \searrow 0).$$

閉区間 $[0, 1]$ 上の可積分関数 $\phi(y)$ を

$$\phi(y) = (-\log y)^{\alpha-1} \quad (0 < y \leq 1), \quad \phi(0) = 0$$

と定め⁷⁶, $y = e^{-1}$ にのみ不連続点を持つ $[0, 1]$ 上の関数 $g(y)$ を

$$g(y) = \begin{cases} 0 & (0 \leq y < e^{-1}) \\ y^{-1} & (e^{-1} \leq y \leq 1) \end{cases}$$

と定める. 補題 10.3 より, 任意の $\varepsilon > 0$ に対して, ある多項式関数 $P(y), Q(y)$ で

$$\begin{aligned} P(y) &\leq g(y) \leq Q(y) \quad (0 \leq y \leq 1), \\ \int_0^1 g(y) \phi(y) dy - \varepsilon &\leq \int_0^1 P(y) \phi(y) dy \leq \int_0^1 g(y) \phi(y) dy, \\ \int_0^1 g(y) \phi(y) dy &\leq \int_0^1 Q(y) \phi(y) dy \leq \int_0^1 g(y) \phi(y) dy + \varepsilon \end{aligned}$$

を満たすものが存在する. このとき $y = e^{-t}$ とおくと,

$$\begin{aligned} \int_0^{\infty} e^{-t} g(e^{-t}) t^{\alpha-1} dy - \varepsilon &\leq \int_0^{\infty} e^{-t} P(e^{-t}) t^{\alpha-1} dy \leq \int_0^{\infty} e^{-t} g(e^{-t}) t^{\alpha-1} dy, \\ \int_0^{\infty} e^{-t} g(e^{-t}) t^{\alpha-1} dy &\leq \int_0^{\infty} e^{-t} Q(e^{-t}) t^{\alpha-1} dy \leq \int_0^{\infty} e^{-t} g(e^{-t}) t^{\alpha-1} dy + \varepsilon. \end{aligned}$$

⁷⁶ $\int_0^1 \phi(y) dy = \int_0^1 (-\log y)^{\alpha-1} dy$ で $y = e^{-t}$ とおくと, $\int_0^1 \phi(y) dy = \int_0^{\infty} e^{-t} t^{\alpha-1} dt = \Gamma(\alpha)$ となる. このことから $\phi(y) = (-\log y)^{\alpha-1}$ は $\alpha > 0$ のとき $[0, 1]$ で可積分であることがわかる.

一方, $f(t) \geq 0$ であることより⁷⁷,

$$\int_0^\infty e^{-xt} P(e^{-xt}) f(t) dt \leq \int_0^\infty e^{-xt} g(e^{-xt}) f(t) dt \leq \int_0^\infty e^{-xt} Q(e^{-xt}) f(t) dt$$

なので, これの全体を $a/(x^\alpha \Gamma(\alpha + 1))$ で割って, $x \searrow 0$ の極限を取ると,

$$\begin{aligned} \int_0^\infty e^{-t} P(e^{-t}) t^{\alpha-1} dt &\leq \liminf_{x \searrow 0} \frac{x^\alpha \Gamma(\alpha + 1)}{a} \int_0^\infty e^{-xt} g(e^{-xt}) f(t) dt \\ &\leq \limsup_{x \searrow 0} \frac{x^\alpha \Gamma(\alpha + 1)}{a} \int_0^\infty e^{-xt} g(e^{-xt}) f(t) dt \leq \int_0^\infty e^{-t} Q(e^{-t}) t^{\alpha-1} dt \end{aligned}$$

以上の2つの段落の結果を合わせ, $\varepsilon > 0$ をいくらでも小さくできることに注意すれば次が成立することがわかる:

$$\lim_{x \searrow 0} \frac{x^\alpha \Gamma(\alpha + 1)}{a} \int_0^\infty e^{-xt} g(e^{-xt}) f(t) dt = \int_0^\infty e^{-t} g(e^{-t}) t^{\alpha-1} dt.$$

すなわち次が得られた⁷⁸:

$$\int_0^\infty e^{-xt} g(e^{-xt}) f(t) dt \sim \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^\infty e^{-t} g(e^{-t}) t^{\alpha-1} dt \quad (x \searrow 0).$$

$e^{-1} \leq e^{-xt}$ と $t \leq 1/x$ は同値であり, $t \leq 1/x$ のとき $e^{-xt} g(e^{-xt}) = 1$ となり, $t > 1/x$ のとき $g(e^{-xt}) = 0$ なので, すぐ上の式は次のように書き直される:

$$\int_0^{1/x} f(t) dt \sim \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^1 t^{\alpha-1} dt = \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\alpha \Gamma(\alpha)} = \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha + 1)} \quad (x \searrow 0).$$

これで示すべきことがすべて示された。□

上の定理と前節の訂正を合わせることによって次の結果が得られる。

系 10.5. $f(t)$ は $t > 0$ で定義された正値単調減少関数であるとし, $\alpha, a > 0$ であるとする。このとき

$$\int_0^\infty e^{-xt} f(t) dt \sim \frac{a}{x^\alpha} \quad (x \searrow 0)$$

ならば,

$$\int_0^t f(t') dt' \sim \frac{at^\alpha}{\Gamma(\alpha + 1)}, \quad f(t) \sim \frac{at^{\alpha-1}}{\Gamma(\alpha)} \quad (x \rightarrow \infty)$$

が成立する。□

数列 a_n に対して $f(n) = a_n$ を満たす函数 $f(t)$ を適切に定義することによって近似したり, Stieltjes 積分版の定理を証明し直したり, さらに $y = e^{-x}$ と置いて $x \searrow 0$ の極限を $y \nearrow 1$ の極限に書き直すことによって, もしくは直接証明し直すことによって以下の結果が得られる。($1 - e^{-x} \sim x$ ($x \searrow 0$) であることに注意せよ.)

⁷⁷ここで $f(t)$ の非負性を使っている。

⁷⁸以上の Stone-Weierstrass の多項式近似定理を使う鮮やかな方法は Jovan Karamata による。

系 10.6. a_0, a_1, a_2, \dots は非負値数列であるとし, $\alpha, a > 0$ であるとする. このとき

$$\lim_{y \nearrow 1} (1-y)^\alpha \sum_{n=0}^{\infty} a_n y^n = a$$

ならば

$$\sum_{k=0}^n a_k \sim \frac{an^\alpha}{\Gamma(\alpha+1)} \quad (n \rightarrow \infty)$$

が成立する. (ガンマ関数が出て来る理由は以下の証明を見ればわかる.) \square

証明. 直接証明し直しておこう. $x > 0$ とし, $y = e^{-x}$ とおくと, $1-y \sim x$ ($x \searrow 0$) なので,

$$F(x) := \sum_{n=0}^{\infty} e^{-nx} a_n \sim \frac{a}{x^\alpha} \quad (x \searrow 0).$$

ゆえに任意の $k = 0, 1, 2, \dots$ に対して,

$$\begin{aligned} F((k+1)x) &= \sum_{n=0}^{\infty} e^{-nx} (e^{-nx})^k a_n \\ &\sim \frac{a}{(k+1)^\alpha x^\alpha} = \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^\infty e^{-t} (e^{-t})^k t^{\alpha-1} dt \quad (x \searrow 0). \end{aligned}$$

ここで次の公式を使った:

$$\frac{1}{c^\alpha} = \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^\infty e^{-ct} t^{\alpha-1} dt \quad (c > 0).$$

したがって, 任意の多項式関数 $p(y)$ について

$$\sum_{n=0}^{\infty} e^{-nx} p(e^{-nx}) a_n \sim \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^\infty e^{-t} p(e^{-t}) t^{\alpha-1} dt \quad (x \searrow 0).$$

多項式関数で函数

$$g(y) = \begin{cases} 0 & (0 \leq y < e^{-1}), \\ y^{-1} & (e^{-1} \leq y \leq 1) \end{cases}$$

を近似することによって次が得られる⁷⁹:

$$\sum_{n=0}^{\infty} e^{-nx} g(e^{-nx}) a_n \sim \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^\infty e^{-t} g(e^{-t}) t^{\alpha-1} dt \quad (x \searrow 0).$$

$e^{-1} \leq e^{-nx}$ と $n \leq 1/x$ は同値であり, $n \leq 1/x$ のとき $e^{-nx} g(e^{-nx}) = 1$ なので, すぐ上の式は次のように書き直される:

$$\sum_{0 \leq n \leq 1/x} a_n \sim \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_0^1 t^{\alpha-1} dt = \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\alpha \Gamma(\alpha)} = \frac{a}{x^\alpha} \frac{1}{\Gamma(\alpha+1)} \quad (x \searrow 0).$$

⁷⁹実際には補題 10.3 を用いた注意深い議論が必要になる. その議論の詳細を見ないと, どうして $a_n \geq 0$ と仮定しているか, よくわからないだろう. 議論の詳細については定理 10.4 の証明を参照せよ. この方法は Jovan Karamata による.

右辺で $x = 1/n$ とおき, 左辺の和を $k = 0, 1, \dots, n$ の和に書き直すと,

$$\sum_{k=0}^n a_k \sim \frac{an^\alpha}{\Gamma(\alpha+1)} \quad (n \rightarrow \infty).$$

これで示すべきことが示された. □

系 10.7. a_0, a_1, a_2, \dots は正値単調減少数列であるとし, $\alpha, a > 0$ であるとする. このとき

$$\lim_{y \nearrow 1} (1-y)^\alpha \sum_{n=0}^{\infty} a_n y^n = a$$

ならば

$$\sum_{k=0}^n a_k \sim \frac{an^\alpha}{\Gamma(\alpha+1)}, \quad a_n \sim \frac{an^{\alpha-1}}{\Gamma(\alpha)} \quad (n \rightarrow \infty)$$

が成立する. □

定理 10.4 の Stieltjes 積分版は次の通り.

定理 10.8. $\varphi(t)$ は $\varphi(t) = 0$ ($t < 0$) を満たす右連続単調増加関数であるとし, $a, \alpha > 0$ であるとする. このとき

$$F(x) := \int_{-0}^{\infty} e^{-xt} d\varphi(t) \sim \frac{a}{x^\alpha} \quad (x \searrow 0)$$

ならば

$$\varphi(t) \sim \frac{at^\alpha}{\Gamma(\alpha+1)} \quad (t \rightarrow \infty)$$

が成立する. □

この定理の特別な場合として, もしくは定理 10.4 の証明と完全に同様の筋道をたどることによって次の結果が得られる.

系 10.9. $\lambda_n \geq 0$ は単調増加数列であるとし, $a, \alpha > 0$ であるとする. このとき

$$\sum_{n=1}^{\infty} e^{-\lambda_n x} \sim \frac{a}{x^\alpha} \quad (x \searrow 0)$$

ならば

$$\#\{n \mid \lambda_n \leq t\} \sim \frac{at^\alpha}{\Gamma(\alpha+1)} \quad (t \rightarrow \infty)$$

が成立する. さらに $t = \lambda_n$ の場合を考えることによって

$$\lambda_n \sim \left(\frac{\Gamma(\alpha+1)}{a} \right)^{1/\alpha} n^{1/\alpha} \quad (n \rightarrow \infty)$$

も得られる. □

10.3 Wallis の公式と逆正弦分布

べき級数展開 $(1-y)^{-1/2} = \sum_{n=0}^{\infty} a_n y^n$ ($|y| < 1$) で数列 a_n を定めると

$$\begin{aligned} a_n &= (-1)^n \binom{-1/2}{n} = \frac{\frac{1}{2}(\frac{1}{2}+1)\cdots(\frac{1}{2}+n-1)}{n!} \\ &= \frac{1 \cdot 3 \cdots (2n-1)}{2^n n!} = \frac{(2n)!}{2^{2n} (n!)^2} = \frac{1}{2^{2n}} \binom{2n}{n} > 0. \end{aligned}$$

4つ目の等号で分子分母に $2 \cdot 4 \cdots (2n) = 2^n n!$ をかけた. さらに

$$a_{n+1} = \frac{n+1/2}{n+1} a_n < a_n.$$

ゆえに a_n は正値単調減少数列である. $(1-y)^{1/2} \sum_{n=0}^{\infty} a_n y^n = 1$ なので系 10.7 を適用することによって次が得られる:

$$a_n = \frac{1}{2^{2n}} \binom{2n}{n} \sim \frac{n^{1/2-1}}{\Gamma(1/2)} = \frac{1}{\sqrt{\pi n}} \quad (n \rightarrow \infty).$$

この公式は Wallis の公式と呼ばれている.

逆正弦分布が出て来る一つのパターンについて説明しよう. そのために正値数列 a_n は Wallis の公式型の漸近挙動 $a_n \sim 1/\sqrt{\pi n}$ ($n \rightarrow \infty$) を満たしていると仮定し, $p_{n,k} = a_k a_{n-k}$ とおく. このとき, 仮定より $\min\{k, n-k\} \rightarrow \infty$ において

$$p_{n,k} \sim \frac{1}{\pi} \frac{1}{\sqrt{k(n-k)}} = \frac{1}{\pi} \frac{1}{\sqrt{\frac{k}{n} \left(1 - \frac{k}{n}\right)}} \frac{1}{n}$$

となるので, $0 \leq a < b \leq 1$ に対して,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{a \leq k/n \leq b} p_{n,k} = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{a \leq k/n \leq b} \frac{1}{\pi} \frac{1}{\sqrt{\frac{k}{n} \left(1 - \frac{k}{n}\right)}} \frac{1}{n} = \frac{1}{\pi} \int_a^b \frac{dx}{\sqrt{x(1-x)}}.$$

確率密度関数 $\pi^{-1}(x(1-x))^{-1/2} dx$ が定める確率分布は逆正弦分布と呼ばれている. そのように呼ばれる理由はその累積確率分布関数が次のように逆正弦関数で表わされるからである:

$$\frac{1}{\pi} \int_0^x \frac{dt}{\sqrt{t(1-t)}} = \frac{2}{\pi} \int_0^{\sqrt{x}} \frac{dy}{\sqrt{1-y^2}} = \frac{2}{\pi} \arcsin \sqrt{x}.$$

この確率分布は中心が $(x, y) = (1/2, 0)$ で半径が $1/2$ の円周上の一様分布を x 軸上に射影したものに等しい.

このように Wallis の公式型の漸近挙動の仮定から逆正弦分布が出て来る. そして Wallis の公式型の漸近挙動は Tauber 型の定理 (系 10.7) から出て来る. 一般的な 1次元ランダムウォークに関する逆正弦法則はそのような方針で証明される.

逆正弦法則とは「左右対称もしくは期待値が 0 で有限の分散を持つような原点から出発する 1次元ランダムウォークにおいて, 原点より右側に留まっている時間の総和の割合の分布が時間無限大の極限で逆正弦分布に収束する」という法則のことである⁸⁰. 逆正弦

⁸⁰詳しくは Frank Spitzer, Principles of Random Walk, Springer GTM 34 (1964) の第 20 節を参照せよ. 特にその pp. 225–227 あたりを参照すればこのノートとの関係がわかるはずである.

法則の証明にはかなりややこしい計算が必要になる. 確率 $1/2$ で左右に 1 ステップずつ進む単純なランダムウォークに関する逆正弦法則の場合でさえ, 組み合わせ論的にややこしい議論が必要になる⁸¹. ここではその手の面倒な議論には一切触れないことにする.

しかし, 逆正弦法則によれば結果的に以下が成立している:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{\#\{(x_i)_{i=1}^n \in \{\pm 1\}^n \mid na < \#\{k \mid x_1 + \dots + x_k > 0\} < nb\}}{2^n} = \frac{1}{\pi} \int_a^b \frac{dx}{\sqrt{x(1-x)}},$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{2^n} \int_{\substack{-1 < x_1, \dots, x_n < 1, \\ na < \#\{k \mid x_1 + \dots + x_k > 0\} < nb}} dx_1 \dots dx_n = \frac{1}{\pi} \int_a^b \frac{dx}{\sqrt{x(1-x)}}.$$

ギャンブルにたとえば, 条件 $x_1 + \dots + x_k > 0$ は「浮いていること」(トータルで勝っている状態)を意味し, $\#\{k \mid x_1 + \dots + x_k > 0\}$ は浮いている時間の長さを意味しており, 条件 $na < \#\{k \mid x_1 + \dots + x_k > 0\} < nb$ は浮いている時間の長さの割合が a より大きく b より小さいことを意味している. ランダムウォークに関する逆正弦法則は「浮いている時間の割合」が $n \rightarrow \infty$ で逆正弦分布にしたがうことを意味している.

10.4 $x - x^2 + x^4 - x^8 + x^{16} - x^{32} + \dots$ で $x \nearrow 1$ とすると?

函数 $F(x)$ を

$$F(x) = x - x^2 + x^4 - x^8 + x^{16} - x^{32} + \dots = \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k x^{2^k} \quad (|x| < 1)$$

と定める. このとき $x \nearrow 1$ で $F(x)$ は収束するか? 収束するとしたらその収束先の値は何になるか?⁸²

仮に収束するとしたら, その収束先は $1/2$ でなければいけないことはすぐにわかる. なせならば,

$$F(x^2) = x - F(x)$$

が成立しているからである. さらに数値計算してみると, x が 1 の近くで $F(x)$ の値は 0.5 にかなり近いこともわかる. たとえば

$$F(0.99) \simeq 0.494098, \quad F(0.999) \simeq 0.500124.$$

$F(x)$ は $x \nearrow 1$ で $1/2$ に収束するのだろうか?

数列 a_n, s_n を

$$F(x) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n, \quad s_n = a_0 + a_1 + \dots + a_n$$

⁸¹単純なランダムウォークの逆正弦法則の証明に興味がある人は例えば服部哲也, 確率論講義付録, 20030525 もしくは服部哲也著『ランダムウォークとくりこみ群』共立出版(2004)の第1章を参照して欲しい. 服部哲也さんが書いたものはサービス精神が旺盛でどれも楽しいので, 数楽好きの人にはおすすめできる.

⁸²筆者はこの問題の存在を Peter Duren, Sums for Divergent Series: A Tauberian Adventure, 2013-10 (講演スライド)で学んだ. それによれば G. H. Hardy がこの問題を 1907 年に解いたらしい. 数値計算すれば $x \nearrow 1$ で $F(x)$ の値が 0.5 の周囲を小さく無限に振動している様子を見られる. そして上の講演スライドでは実際に無限に振動していることが証明されている.

と定める. 一般に

$$\sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n = (1-x) \sum_{n=0}^{\infty} s_n x^n$$

のとき

$$s_n = a_0 + a_1 + \cdots + a_n$$

となることに注意せよ.

上の状況で

$$\begin{aligned} F(x) &= x(1-x) + x^4(1-x^4) + x^{16}(1-x^{16}) + \cdots = (1-x)f(x), \\ f(x) &= x + x^4(1+x+x^2+x^3) + x^{16}(1+x+\cdots+x^{15}) + \cdots \\ &= x + (x^4 + x^5 + x^6 + x^7) + (x^{16} + x^{17} + \cdots + x^{31}) + \cdots. \end{aligned}$$

となるので, $s_n \geq 0$ である. ゆえにもしも

$$\lim_{x \nearrow 1} F(x) = \lim_{x \nearrow 1} (1-x) \sum_{n=0}^{\infty} s_n x^n = a$$

と収束するならば, 系 10.6 ($\alpha = 1$) より,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=0}^n s_k = a$$

と収束するはずである. しかし,

$$\begin{aligned} \lim_{k \rightarrow \infty} \frac{s_0 + s_1 + \cdots + s_{2^{2k}-1}}{2^{2k}-1} &= \lim_{k \rightarrow \infty} \frac{1 + 4 + 16 + \cdots + 4^{k-1}}{4^k - 1} = \lim_{k \rightarrow \infty} \frac{4^k - 1}{4^k - 1} = \frac{1}{3}, \\ \lim_{k \rightarrow \infty} \frac{s_0 + s_1 + \cdots + s_{2^{2k-1}-1}}{2^{2k-1}-1} &= \lim_{k \rightarrow \infty} \frac{1 + 4 + 16 + \cdots + 4^{k-1}}{\frac{1}{2}4^k - 1} = \lim_{k \rightarrow \infty} \frac{4^k - 1}{\frac{1}{2}4^k - 1} = \frac{2}{3} \end{aligned}$$

なので, $n^{-1} \sum_{k=0}^n s_k$ は $n \rightarrow \infty$ で収束しない. したがって $x \nearrow 1$ で $F(x)$ も収束しない.

11 付録: Taylor の定理に証明の仕方

「(Taylor 展開の途中まで)+(剰余項)」の形式の公式を Taylor の公式と言う. この節では Taylor の定理の導出の方針について説明する. この節の内容は非常に易しい.

11.1 積分剰余項型 Taylor の定理

積分表示された剰余項を持つ Taylor の定理は

$$f(x) = f(a) + \int_a^x f(x_1) dx_1$$

を単純に繰り返し用いることによって証明可能である⁸³. 実際, これに

$$f'(x_1) = f'(a) + \int_a^{x_1} f''(x_2) dx_2$$

を代入すると

$$f(x) = f(a) + f'(a) \int_a^x dx_1 + \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} f''(x_2) dx_2.$$

ここで括弧の使用量を減らすために

$$\int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} f''(x_2) dx_2 = \int_a^x \left(\int_a^{x_1} f''(x_2) dx_2 \right) dx_1$$

という書き方を用いた. さらに

$$f''(x_2) = f''(a) + \int_a^{x_2} f'''(x_3) dx_3$$

を代入すると

$$f(x) = f(a) + f'(a) \int_a^x dx_1 + f''(a) \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 + \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 \int_a^{x_2} f'''(x_3) dx_3.$$

さらに同じ計算をもう一度繰り返すと

$$f(x) = f(a) + f'(a) \int_a^x dx_1 + f''(a) \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 + f'''(a) \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 \int_a^{x_2} dx_3 + R_4$$

$$R_4 = \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 \int_a^{x_2} dx_3 \int_a^{x_3} f^{(4)}(x_4) dx_4.$$

以上の計算を続ければ帰納的に次が成立することがわかる:

$$f(x) = \sum_{k=0}^{n-1} f^{(k)}(a) \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 \cdots \int_a^{x_{k-1}} dx_k + R_n,$$

$$R_n = \int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 \cdots \int_a^{x_{n-2}} dx_{n-1} \int_a^{x_{n-1}} f^{(n)}(x_n) dx_n.$$

R_n を剰余項と呼ぶ. 以上の計算では積分の線形性しか使っていない.

剰余項以外の逐次積分は以下のように順番に (すぐ上の式を使うことによって次々に) 容易に計算される:

$$\int_a^x dx_1 = x - a,$$

$$\int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 = \int_a^x (x_1 - a) dx_1 = \frac{(x - a)^2}{2},$$

$$\int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 \int_a^{x_2} dx_3 = \int_a^x \frac{(x_1 - a)^2}{2} dx_1 = \frac{(x - a)^3}{3!},$$

.....

$$\int_a^x dx_1 \int_a^{x_1} dx_2 \cdots \int_a^{x_{k-1}} dx_k = \int_a^x \frac{(x_1 - a)^{k-1}}{(k-1)!} dx_1 = \frac{(x - a)^k}{k!}.$$

$x > a$ のとき, この計算結果は k 次元立方体の体積の $k!$ 分の 1 を意味している.

⁸³部分積分さえ使う必要がない!

- $k = 1$ の場合は線分 $\{x_1 \mid a \leq x_1 \leq x\}$ の長さである.
- $k = 2$ の場合は直角二等辺三角形 $\{(x_1, x_2) \mid a \leq x_2 \leq x_1 \leq x\}$ の面積すなわち正方形の面積 $(x-a)^2$ の半分である. 半分になる理由は, $x_2 \geq x_1$ を満たす (x_1, x_2) のみについて積分するからである. 正方形全体の面積を得るためには $x_1 \leq x_2$ を満たす (x_1, x_2) についても積分しなければいけない.
- $k = 3$ の場合は $\{(x_1, x_2, x_3) \mid a \leq x_3 \leq x_2 \leq x_1 \leq x\}$ の体積であり, 立方体の体積 $(x-a)^3$ の $3!$ 分の 1 になる. $3!$ 分の 1 になる理由は, $x_3 \leq x_2 \leq x_1$ を満たす (x_1, x_2, x_3) のみについて積分するからである. 立方体全体の体積を得るためにはすべての大きさの順番について積分しなければいけない. x_i の個数は 3 個なので並べ方の総数は $3!$ 個ある.
- 一般の k の場合も以上と同様である. x_1, x_2, \dots, x_k の並べ方の総数が $k!$ なので逐次積分の結果は k 次元立方体の体積 $(x-a)^k$ の $k!$ 分の 1 になる.

以上によって Taylor 展開の各項の分母に階乗が現われる理由も明瞭になった!

以上のまとめ:

$$f(x) = \sum_{k=0}^{n-1} f^{(k)}(a) \frac{(x-a)^k}{k!} + R_n, \quad R_n = \int_a^x dx_1 \cdots \int_a^{x_{n-2}} dx_{n-1} \int_a^{x_{n-1}} f^{(n)}(x_n) dx_n.$$

これを積分剰余項型の Taylor の定理と呼ぶことにする.

剰余項 R_n が $n \rightarrow \infty$ で 0 に収束するならば

$$f(x) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} f^{(k)}(a) (x-a)^k$$

が成立する. これを函数 f の $x = a$ における Taylor 展開と呼ぶ.

剰余項の大きさを上から評価するためには次のようにすればよい. まず $R > 0$ を取って, x の動く範囲を $|x-a| \leq R$ に限定する. そして, ある $M_n > 0$ で $|f^{(n)}(x)| \leq M_n$ ($|x-a| \leq R$) を満たすものを見付ける. そのとき

$$|R_n| \leq M_n \left| \int_a^x dx_1 \cdots \int_a^{x_{n-2}} dx_{n-1} \int_a^{x_{n-1}} dx_n \right| = \frac{M_n |x-a|^n}{n!} \leq \frac{M_n R^n}{n!} \quad (\text{R})$$

となるので, $M_n R^n / n! \rightarrow 0$ ならば Taylor 展開が $|x-a| \leq R$ において $f(x)$ に一様収束する. 剰余項の具体的な形そのものよりも剰余項の大きさの評価式 (R) の方がよく使われる.

たとえば M_n 増大速度が n の指数函数程度ならば Taylor 展開は収束する ($M_n R^n / n! \rightarrow 0$). そのことから, e^x , $\cos x$, $\sin x$ の Taylor 展開がどのような a , x についても常に収束することが容易に確かめられる:

$$e^x = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{x^k}{k!}, \quad \cos x = \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \frac{x^{2k}}{(2k)!}, \quad \sin x = \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \frac{x^{2k+1}}{(2k+1)!}.$$

M_n の増大速度が $n!$ と同じ程度な場合には $|x-a| < 1$ で Taylor 展開は $f(x)$ に収束する. たとえば, $f(x) = (1+x)^\alpha$ のとき,

$$f^{(n)}(x) = \alpha(\alpha-1)\cdots(\alpha-n+1)(1+x)^{\alpha-n}$$

なので, この f の $x = 0$ での Taylor 展開は $|x| < 1$ で収束することがわかる. 同様にして $f(x) = \log(1+x)$ の $x = 0$ での Taylor 展開は $|x| < 1$ で収束することがわかる.

$$(1+x)^\alpha = \sum_{k=0}^{\infty} \binom{\alpha}{k} x^k, \quad \log(1+x) = \sum_{k=1}^{\infty} (-1)^{k-1} \frac{x^k}{k}.$$

上の評価式 (R) を知っていれば十分なのだが, 剰余項 R_n を逐次積分ではなく, 1 回の積分で表示する公式があるのでそれを紹介しておこう. 簡単のため $a \leq x$ と仮定しよう ($a \geq x$ の場合も同様である). R_n の逐次積分は $a \leq x_n \leq x_{n-1} \leq \dots \leq x_1 \leq x$ にわたる積分であることに注意しながら, x_n による積分を一番外側に出すと,

$$R_n = \int_a^x f^{(n)}(x_n) \left(\int_{x_n}^x dx_1 \int_{x_n}^{x_1} dx_2 \cdots \int_{x_n}^{x_{n-2}} dx_{n-1} \right) dx_n = \int_a^x f^{(n)}(x_n) \frac{(x-x_n)^{n-1}}{(n-1)!} dx_n.$$

2 つ目の等号で逐次積分が $(n-1)$ 次元立方体の体積の $(n-1)!$ 分の 1 になるという上の方で説明した結果を使った.

11.2 線形常微分方程式の解法

次の線形常微分方程式を考える:

$$\frac{dU(t)}{dt} = A(t)U(t), \quad U(0) = E.$$

ここで $A(t)$ は正方行列値連続関数であり, $U(t)$ は初期値が正方行列の正方行列値関数である. この微分方程式は次と同値である:

$$U(t) = E + \int_0^t A(t_1)U(t_1) dt_1.$$

前節を読んだ読者は Taylor の定理を証明した場合と同様にこの式を繰り返して用いれば解が得られそうなことに気付くはずである. この式で t, t_1 のそれぞれを t_1, t_2 に置き換えた式をその式自身に代入すると,

$$U(t) = E + \int_0^t A(t_1) dt_1 + \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} A(t_1)A(t_2)U(t_2) dt_2.$$

同じ操作をもう一度繰り返すと

$$U(t) = E + \int_0^t A(t_1) dt_1 + \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} A(t_1)A(t_2) dt_2 + R_3,$$

$$R_3 = \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \int_0^{t_2} A(t_1)A(t_2)A(t_3)U(t_3) dt_3.$$

同様に繰り返すと, 帰納的に次が成立していることがわかる:

$$U(t) = \sum_{k=0}^{n-1} \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t_{k-1}} A(t_1)A(t_2) \cdots A(t_k) dt_k + R_n,$$

$$R_n = \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t_{n-1}} A(t_1)A(t_2) \cdots A(t_n)U(t_n) dt_n.$$

実はこれの $n \rightarrow \infty$ の極限で微分方程式の解が

$$U(t) = \sum_{k=0}^{\infty} \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t_{k-1}} A(t_1)A(t_2) \cdots A(t_k) dt_k.$$

で得られることを示せる. 積分中の $A(t)$ は大きな t の順番に並んでいることに注意せよ. 時間順序積 $T[\]$ を次のように定める:

$$T[A(t_1) \cdots A(t_k)] = A(t_{\sigma(1)}) \cdots A(t_{\sigma(k)}), \quad t_{\sigma(1)} \geq \cdots \geq t_{\sigma(k)}, \quad \sigma \in S_k.$$

この記号法のもとで上の公式は次のように書き直される:

$$U(t) = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} \int_0^t \cdots \int_0^t T[A(t_1) \cdots A(t_k)] dt_1 \cdots dt_k.$$

さらに形式的に $T[\]$ を積分と和の外に出すことを許せばこれは次のように書き直される:

$$U(t) = T \left[\sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} \left(\int_0^t A(s) ds \right)^k \right] = T \left[\exp \int_0^t A(s) ds \right]$$

この形の公式は物理の教科書などで散見される.

以上で解説した線形常微分方程式の解法は Picard の逐次代入法の特別な場合である. すなわち以上の方法は非線形の場合にも適用できる. このように Taylor の定理の逐次積分による証明法を知っていれば, 線形常微分方程式の逐次代入法による解法もすぐに思い付くだろうし, さらに Picard の逐次代入法にまで一般化される. このような理由から Taylor の定理を逐次積分で証明する方法の紹介は相当に教育的だと思われる.

11.3 微分剰余項型 Taylor の定理

逐次積分表示された剰余項を持つ Taylor の定理を知っているだけで困らないはずなのだが, 多くの文献で剰余項を高階の導関数で表示する公式もよく使われているので簡単に紹介しておこう.

Cauchy の平均値の定理: 実函数 F, G が微分可能でかつ $F(t) \neq G(a)$ でかつ速度ベクトル (F', G') が a と t のあいだで決して 0 にならないならば a と t のあいだのある実数 t_1 で

$$\frac{G(t) - G(a)}{F(t) - F(a)} = \frac{G'(t_1)}{F'(t_1)}$$

を満たすものが存在する.

この定理が成立することは xy 平面に $(F(s), G(s))$ の奇跡の曲線を描き, 点 $(F(a), G(a))$ と点 $(F(t), G(t))$ を結ぶ直線と速度ベクトルが平行になる時刻 t_1 の存在が視覚的に読み取れることを確認すれば納得できるだろう. 厳密な証明には Roll の定理を使うが, 個人的には「直観的に明らかな定理」とみなして問題ないと思う.

まず例として f が 4 回微分可能な場合を扱おう.

$$G(t) = f(t) - f(a) - f'(a)(t-a) - f''(a) \frac{(t-a)^2}{2} - f'''(a) \frac{(t-a)^3}{3!},$$

$$F(t) = (t-a)^4$$

とおく. $F(a) = F'(a) = F''(a) = F'''(a) = 0$, $G(a) = G'(a) = G''(a) = G'''(a) = 0$ に注意しながら, Cauchy の平均値の定理を次々に適用すると, a と t のあいだのある実数 t_1, t_2, t_3, t_4 で以下を満たすものの存在が示される:

$$\begin{aligned} & \frac{f(t) - f(a) - f'(a)(t-a) - f''(a)\frac{(t-a)^2}{2} - f'''(a)\frac{(t-a)^3}{3!}}{(t-a)^4} \\ &= \frac{f'(t_1) - f'(a) - f''(a)(t_1-a) - f'''(a)\frac{(t_1-a)^2}{2!}}{4(t_1-a)^3} \\ &= \frac{f''(t_2) - f''(a) - f'''(a)(t_2-a)}{4 \cdot 3(t_2-a)^2} \\ &= \frac{f'''(t_3) - f'''(a)}{4 \cdot 3 \cdot 2(t_3-a)} \\ &= \frac{f^{(4)}(t_4)}{4!}. \end{aligned}$$

形式的には分子分母を微分して次の番号の t_i を代入する操作を繰り返しただけである. 以上によって a と t のあいだのある実数 t_4 で

$$\begin{aligned} f(t) &= f(a) + f'(a)(t-a) + f''(a)\frac{(t-a)^2}{2} + f'''(a)\frac{(t-a)^3}{3!} + R_4, \\ R_4 &= f^{(4)}(t_4)\frac{(t-a)^4}{4!} \end{aligned}$$

を満たすものの存在が証明された.

さらに上の計算中のうしろから 2 番目の等号の右辺の $t \rightarrow a$ での極限は

$$\frac{1}{4!} \lim_{t_3 \rightarrow a} \frac{f'''(t_3) - f'''(a)}{t_3 - a} = \frac{1}{4!} f^{(4)}(a)$$

になる. t_4 は a と t のあいだにあるので, $t \rightarrow a$ で $t_4 \rightarrow a$ となることに注意せよ. これは上の計算の出発点の式の $t \rightarrow a$ での極限に等しい:

$$\lim_{t \rightarrow a} \frac{f(t) - f(a) - f'(a)(t-a) - f''(a)\frac{(t-a)^2}{2} - f'''(a)\frac{(t-a)^3}{3!}}{(t-a)^4} = \frac{1}{4!} f^{(4)}(a).$$

これは次と同値である:

$$\begin{aligned} f(t) &= f(a) + f'(a)(t-a) + f''(a)\frac{(t-a)^2}{2} \\ &\quad + f'''(a)\frac{(t-a)^3}{3!} + f^{(4)}(a)\frac{(t-a)^4}{4!} + o((t-a)^4). \end{aligned}$$

これで 4 回微分可能な函数に関する微分剰余項型 Taylor の定理が証明できた.

以上と全く同様にして, f が n 回微分可能ならば

$$f(t) = \sum_{k=0}^{n-1} f^{(k)}(a) \frac{(t-a)^k}{k!} + R_n, \quad R_n = f^{(n)}(t_n) \frac{(t-a)^n}{n!}$$

を満たす a と t のあいだの実数 t_n の存在が証明できる. ゆえに $|t-a| \leq R$, $|f^{(n)}(s)| \leq M_n$ ($|s-a| \leq R$) ならば

$$|R_n| \leq \frac{M_n R^n}{n!}$$

となる. すなわち積分表示された剰余項の場合と同じ形の評価式が得られる. さらに上と同様にして次も証明される:

$$f(t) = \sum_{k=0}^n f^{(k)}(a) \frac{(t-a)^k}{k!} + o((t-a)^n).$$

これらの結果も **Taylor の定理** と呼ばれる.

以上の証明は n 回微分可能性のみを仮定すれば得られる. n 階の導函数の連続性を仮定する必要はない.